

戦後史における加藤秀俊のメディア知識人としての役割—高度経済成長を観察した先見者—

2023年3月

松井勇起

戦後史における加藤秀俊のメディア知識人としての役割—高度経済成長を観察した先見者—

筑波大学

図書館情報メディア研究科

2023年3月

松井勇起

概要

論文題目

戦後史における加藤秀俊のメディア知識人としての役割—高度経済成長を観察した先見者—

1章 研究背景及び目的

大東亜戦争への道と末路を筆頭に、空気の暴走による悲劇は枚挙に暇がない。だとするならば、空気を操作できるメディア知識人が、空気を暴走させる方向へと誘導する場合、彼らの害悪を取り除くことは不可欠である。そうした存在を止めうる存在として先見者が考えられる。先見者は認知的不協和に対する耐久力が高く、厳しい現実を見据えることが出来る存在であり、聞きたくない他者から迫害されやすいという点で難儀な存在である。だが、その性質上空気や空気操作者たるメディア知識人とは対立することになりやすいはずである。

加藤秀俊は高度経済成長が起きる前にその可能性を読み切ったという点で十分に戦後日本の論壇上重要な位置を占めるにもかかわらず、江藤淳や大江健三郎、藤田省三からは理解されず理不尽な迫害をされた。このことから、加藤を先見者の事例として把握しても良いのだろうか。研究目的は、加藤が江藤たちから迫害されたのは、加藤もまた先見者の定義に当てはまるからではないか、という具体例を示すことによって、先見者が迫害される理由についての仮説を補強するという意味で帰納的なものである。研究目的に対して、3つの作業仮説に分解して説明を試みることをまず行う。その上で、最初の研究目的に戻る、という流れである。研究目的を細かく分けた場合、先見者一般に関するものである「先見者は何故迫害されるのか」、先見者の事例として加藤が上手く当てはまるか、と分かれる。

以下の章で加藤が先見者であるか否かの説明に繋がるものを上手く説明できるのではないかと考えられる重要な3つの作業仮説を考察することで、研究目的を達成することを試みた。その構造を、本章で大枠として示した。3つの作業仮説とは、具体的には、①実感論争における加藤と他の論者との距離を単に実感に対する是非のみならず他人指向型への是非から捉える作業によって加藤の立ち位置を明確に炙り出すこと、②加藤が中公新書に込めたメディア戦略と中間文化論との関係を探ること、③以上の点を踏まえた上で新たに認知的不協和とミッテルの観点から中井正一と比較して見えるものを考察すること、以上の3点である。

2章 先行研究

加藤秀俊に関する考察・言及・先行研究並びに戦後日本のメディア知識人に関する考察・言及・先行研究を本章では扱う。そのうち、前者である加藤に関するものについては次段で取り上げる竹内のものを除くと、加藤の論敵となった江藤淳や藤田省三による評価

の他は、書評や文献解題などで加藤の著作一冊をピックアップして取り上げたものが散見される。後者のメディア知識人論についてはジュリアン・バンダやオルテガ・イ・ガセット以来知識人論として始まり、日本でも丸山眞男が触れた他、坂本多加雄や西部邁が比較的整理的な議論を行っている。

その中で最も重要なものはメディア知識人の定義を行った竹内洋によるもので、竹内は前者と後者どちらの要素も兼ね備えた議論を、『大衆の幻像』の中でピンポイントのタイトルの「加藤秀俊論」でしている上に、メディア知識人に対する考察も豊富である。竹内は丸山眞男・吉本隆明をその典型とする、戦後の多くのメディア知識人が該当する天下国家を語る武士・農村型知識人と、町人型の知識人との対立軸を見出す。その上で竹内は加藤を後者である町人型知識人に分類し、一橋大学の「隠れたカリキュラム」の影響があるとした。さらに竹内は、清水幾太郎をちやほやされるためにメディア知識人になった愛情乞食と分析し、世を騒がす刺激的な論考を出すことで注目を浴び下位からの逆転を狙う転覆戦略を企てる清水の姿からメディア知識人の理念型を見出した。以上の竹内の考察を踏まえると、加藤秀俊はメディア知識人ながら庶民の日常生活などを素材にした話題を中心に発信する、転覆戦略的行動をしない人物であり、加藤と清水は大きく異なることになる。だが、竹内によれば非東大卒・下町出身・右派など主流から遠いメディア知識人は転覆戦略を取りがちであるが、なぜ加藤は清水のように転覆戦略を取らなかったのであろうか。竹内の図式に当てはまらない事例として加藤を考察することを次章以降で行っていく。

3章 実感論争と他人指向型

この章では加藤と江藤の物別れについて、田口富久治との討論中に出てきた他人指向型について考察することで1つ目の作業仮説の説明を試みる。

プラグマティズムの立場から加藤は『中間文化論』を発表したが、「主体性に欠ける」「ファシズム的である」と江藤淳に批判されることにより、実感論争に巻き込まれることとなった。丸山眞男の『日本の思想』論文で図式化された理論信仰と実感信仰という言葉に対して、加藤が実感を擁護したからであった。座談会において加藤は江藤との対話を試みるが、江藤は自説を変えず、議論自体は物別れに終わることとなった。その際にポイントとなるのは東大卒でマルクス主義者であった政治学者の田口とは実感論の肯定では加藤は一致していたものの、他人指向型への支持では意見が分かれたことである。

他人指向型を定義したリースマンは、加藤同様に他人指向型に対して高い評価をしていた。リースマンと加藤は他人指向型にも自律的に行動できる主体的な存在がいることに着目し、自由に他者と交わり自己決定することを肯定的に考えていた。そこから考えれば、他人指向型を評価する場合は、自由に人間関係を取り結ぶことを肯定的に捉えることになるので、大衆社会化が進展する高度経済成長下の日本と親和的であること、さらに竹内洋の東大卒は実感信仰に反撥するという説を修正し、東大卒は他人指向型を評価しにくくなる、という傾向を見出せて、第一の作業仮説を説明できた。

4章 「刊行のことば」分析から見える加藤によるメディア戦略

この章では加藤が中公新書の「刊行のことば」を執筆したことを素材に、二つ目の作業仮説である中公新書に込めたメディア戦略と中間文化論との関係を説明することを試みる。

中央公論社の宮脇俊三の依頼で加藤は「刊行のことば」を執筆した。この「刊行のことば」を分析していくと、加藤が中公新書に込めたメディア戦略は、中間文化論の実践であると解釈することが可能であることが分かった。中間文化が高級文化と大衆文化を媒介するものであり、高度で専門的な内容を分かりやすく大衆に伝えつつ、大衆も新書の内容を読み込んで自ずから考える力を身に着けるようになる、という相互媒介の成り立つ社会を形成させ、さらにそのことが中間文化に親和的な中公新書の市場拡大に繋がるという中間文化の多層性を示すロジックがそこにあることを抽出した。その上、大衆が賢く自ら考えることはサークルの形成による中間団体の形成により、ファシズム化を防ぐという効果も見込むことが出来る。以上で第二の作業仮説の説明となる。

5章 加藤秀俊の先達としての中井正一

4章までの議論を、第三の作業仮説である認知資源の限界と認知的不協和の打破という観点から纏め、中井正一と比較することで加藤の特徴を別の側面から分析する。プラグマティズムと中間文化論はそれぞれ経験と抽象的な理論を行き来することを目指すものであり、認知資源を消費させることである。新たな人間関係を取り結ぶ発想をする他人指向型を加藤が理想視していたものも、中公新書のメディア戦略にも通底する考え方であると評価できる。中井のメディウム・ミッテル論を考えると、加藤は中井同様に単に中間にいるだけのメディウムではなく、積極的に二者の相互媒介を促すミッテルを目指したと分析可能であることを示した。以上で第三の作業仮説の仮説が完了し、最初の研究目的の説明の準備が整う。

6章 考察と結論 加藤秀俊はどのような人物だったのか

ミッテル的で認知資源が豊富にある加藤は、通常の場合人間には受け入れがたい現実を見据えて、認知的不協和に耐えることが得意である。さらに、柳田国男の民俗学的手法を社会学に応用することでミクロな現象を一つ一つ丁寧に観測しつつもそれらを束ねて社会全体のマクロな視点から見出すシステム思考的な考え方をしている。すなわち、加藤は豊富な認知資源をベースにして、短期間から長期間までの時間的視点、極小点から人間社会全てまでの空間的視点、部分と全体を行き来するシステム論的視点の三つで幅広く複合的な見方を得意としている。先見者は認知資源を豊富に用いて人間が見向きもしない厳しい現実を見据える程に認知的不協和に対する耐久力が高い強い存在であるが、長期・全体を見据える程に認知資源を消費できることは先見者である可能性が高いと分析することが可能である。そして加藤が主体的な要素も重要視しているのに、江藤らに「主体的でない」

と言われるなど理不尽な理由で激しく迫害されたことは、認知資源の余裕がない人物に対して受け入れがたい現実を突きつけた先見者であるからと解釈するのが妥当である。

加藤が先見者であるならば、戦後日本においてバブル期までの間、概ね未来の予想に成功し、高度経済成長以後の日本の世相を代表する機能を果たしたと整合的である。加藤の存在を描き分析することによって、竹内のメディア知識人と公共知識人に関する議論の精緻化を行うことが出来た。清水のような世論を煽り空気を形成するパフォーマー型のメディア知識人と公共知識人的な素養を多く持つ先見者的なメディア知識人という対比を見出しつつ、先見者と天才・秀才、更には対先見者耐性の高低という区分を見出した。先見者である加藤、加藤と意見が対立しても加藤の存在に対して理不尽な対応を取らない鶴見や田口の様な対先見者耐性の高い天才や秀才はそれぞれ公共知識人であると言える。

英文概要

Title

Hidetoshi Kato's role as a Media Intellectual in Postwar History: The seer who observed rapid economic growth

Abstract

Chapter 1 Research Background and Objectives

A seer has a high tolerance for cognitive dissonance, can see harsh realities, and is easily persecuted by others who do not want to hear about them. By their very nature, they are likely to be at odds with the media intellectuals who are atmosphere steerers or the atmosphere itself.

Despite the fact that Hidetoshi Kato occupies an important position in postwar Japanese debates in predicting Japan's high economic growth before it occurred, he was not understood by Jun Eto, Kenzaburo Oe, and Shozo Fujita, and was unreasonably persecuted. Can we therefore consider Kato to be a seer? I have attempted to achieve the research objective by considering three important working hypotheses that may successfully explain what leads to the explanation of whether or not Kato is a seer in the following chapters: (1) to clearly identify Kato's position in the controversy feeling not only in terms of feeling but also in terms of the other-directed type, (2) to explore the relationship between Kato's media strategy in the *Chuko-shinsho* and the Middle Culture 3) to consider what can be seen in comparison with Nakai Shoichi from the perspective of cognitive dissonance and Mittel.

Chapter 2: Previous Studies

This chapter deals with discussions, references, and previous studies on Hidetoshi Kato, as well as on media intellectuals in postwar Japan. One of the most important authors is Yo Takeuchi, who combines elements of both the former and the latter in his "Kato-hidetoshi-ron(Study of Hidetoshi Kato)," a chapter within "Taishyu-no-Genzo (The Phantom of the Masses)," while also having written extensively on media intellectuals. Takeuchi finds an axis of opposition between the samurai/rural-type intellectuals who set the world to rights, to whom many postwar media intellectuals, exemplified by Maruyama Masao and Yoshimoto Takaaki fall, and the merchant-type intellectuals. Takeuchi then classifies Kato as the latter, a merchant-type intellectual, and attributes this to the influence of Hitotsubashi University's "hidden curriculum." Furthermore, Takeuchi analyzed Ikutaro Shimizu as an affection beggar who became a media intellectual in order to be pampered, and found the ideal type of media intellectual in the figure of Shimizu, who plotted a subversion strategy to gain attention and reverse his position by publishing stimulating essays that caused a sensation. In light of Takeuchi's discussion, Hidetoshi Kato, although a media intellectual,

is a person who mainly publishes topics based on the daily lives of ordinary people and does not engage in subversion strategies, and Kato and Shimizu are very different. However, according to Takeuchi, media intellectuals who are far from the mainstream, such as non-University of Tokyo graduates, coming from downtown Tokyo, and being on the right wing, tend to adopt a subversion strategy, but why did Kato not adopt a subversion strategy like Shimizu? In the following chapters, I will examine Kato as a case that does not fit Takeuchi's scheme.

Chapter 3: The Controversy Feeling and the Other-directed Type

In this chapter, I explain the first working hypothesis by discussing the other-directed type that emerged during the debate with Fukuji Taguchi regarding the conflict between Kato and Eto.

From the standpoint of pragmatism, Kato published his "Middle Culture," but he became embroiled in the controversy feeling when Jun Eto criticized it as "lacking in subjectivity" and "fascistic." This was because Kato defended the concept of "feeling" in response to the term "faith in theory" and "faith in feeling" that Maruyama Masao had used in his article "Nihon-no-Shiso(Thinking in Japan)". Kato attempted to engage Eto in dialogue, but Eto did not change his own theory, and the discussion ended in a deadlock. The key point is that Kato and Taguchi, a political scientist who was a Marxist and a graduate of the University of Tokyo, agreed with Kato's affirmation of the feeling, but they disagreed in their support for the other-directed type.

Riesman, who defined the other-directed type, had a high opinion of this type, as did Kato. Both Riesman and Kato focused on the fact that there are subjective individuals among this type who can act autonomously and freely interact with others and make their own decisions. This leads to the modification of Takeuchi's theory in finding that graduates of the University of Tokyo are less likely to praise other-directed people, thereby explaining the first working hypothesis.

Chapter 4: Kato's Media Strategy as Seen through the Analysis of " Words of Publication"

This chapter attempts to explain the second working hypothesis, the relationship between media strategy and the theory of Middle Culture.

Kato wrote "Words of Publication" at the request of Shunzo Miyawaki of Chuokoron-sha. Analyzing this "Words of Publication," it became clear that Kato's media strategy for the Chūkō Shinsho could be interpreted as a practice of the Middle Culture theory. Middle Culture mediates between high culture and popular culture, and entails a society in which intermediation is possible: advanced and specialized content is conveyed to the masses in an easy-to-understand manner, while the masses also acquire the ability to think for themselves by Shinsho. This is a logic that shows the multilayered nature of Middle Culture. Furthermore, the fact that the masses think wisely and independently can be expected to have the effect of preventing fascism through the formation of intermediate groups by forming circles. This explains the second working hypothesis.

Chapter 5: Shoichi Nakai as a Predecessor of Hidetoshi Kato

Pragmatism and the Middle Culture Theory wavers between experience and abstract theory, and consumes cognitive resources. Kato's idealization of the other-directed type, which is an idea that leads to the conception of new relationships, is also an idea that runs through Chūkō Shinsho's media strategy. Considering Nakai's medium-mittel theory, Kato, like Nakai, aimed to be a mittel that actively facilitated the intermediary between two parties, rather than a medium that merely existed in the middle. This explains the third working hypothesis.

Chapter 6: Discussion and Conclusion: What kind of person was Hidetoshi Kato?

Mittel-like and rich in cognitive resources, Kato was adept at enduring cognitive dissonance in the face of a reality and sustaining a broad and complex perspective. A seer is a strong being with high endurance against cognitive dissonance to the extent that he or she is able to use cognitive resources abundantly to look at a harsh reality that humans cannot see, but it is possible to analyze the possibility of being a seer as being able to consume cognitive resources to the extent that he or she can look at the long term and the entirety. It is also reasonable to interpret the fact that Kato was persecuted by Eto and others for unreasonable reasons, such as being called "not proactive," as being a seer who presented an unacceptable reality to those with no cognitive resources to spare.

If Kato was a seer, it is consistent with the fact that he was generally successful in predicting the future in postwar Japan until the bubble era, and functioned as a representative of the post-high economic growth era in Japan. By depicting and analyzing Kato's existence, I also elaborated on Takeuchi's discussion of media intellectuals and public intellectuals, finding a distinction between seers and geniuses/gifted people, as well as between high and low tolerance for seers.

目次

1 研究背景及び目的	1
1.1 戦後日本のメディア知識人及び論壇	1
1.2 空気と空気操作者の天敵・先見者とその悲劇.....	4
1.3 本論文の目的 「加藤秀俊はなぜ江藤淳・大江健三郎と藤田省三に迫害されたのか？」という謎の解明	8
2 先行研究	11
2.1 加藤秀俊に関する先行研究	11
2.2 戦後日本のメディア知識人及び論壇に関する先行研究.....	16
3 実感論争と他人指向型.....	21
3.1 講談社文化と岩波文化、理論信仰と実感信仰、中間文化論.....	21
3.2 江藤・加藤論争	23
3.3 座談会 「実感」をどう発展させるか.....	26
3.4 リースマンの類型論	27
3.5 類型論への態度から見る大衆社会への見方.....	30
3.6 実感論におけるメディア知識人の立場の決定要因と東大の機能.....	36
4. 「刊行のことば」分析から見える加藤によるメディア戦略.....	40
4.1 加藤秀俊と中公新書	40
4.2 中間文化論と中公新書	42
4.3 加藤秀俊とプラグマティズム	44
4.4 中公新書「刊行のことば」の分析	49
4.5 中公新書「刊行のことば」のまとめ	53
5 加藤秀俊の先達としての中井正一.....	56
5.1 中井論の前提である認知論と4章までの議論の再整理.....	56
5.2 中井正一のメディウム、ミッテル、メディウムに支えられたミッテル論.....	59
5.3 中井正一の図書館論 加藤秀俊の『整理学』との比較.....	65

6. 考察と結論 加藤秀俊はなぜ江藤淳・大江健三郎・藤田省三から理不尽な扱いをされるのか	74
6.1 中井と加藤の共通項 長期的でマクロな視点による認知的不協和の打破.....	74
6.2 先見者の条件とは何か	81
6.3 実際に加藤の先見者としての実績の検証.....	83
6.4 結論	85
謝辞	92
文献リスト	94
全研究業績のリスト	101

1 研究背景及び目的

1.1 戦後日本のメディア知識人及び論壇

日本は空気で動く国である、という言説は山本七平が『空気の研究』（1977=1983）で纏めて以来、まことしやかに言われ続けている。山本はその例として、戦艦大和の沖縄特攻である天一号作戦という非合理的決定を神重徳連合艦隊司令部参謀が強引に押し通した結果連合艦隊内部で規定事項となってしまう、現場トップである伊藤整一第二艦隊司令長官も従ってしまったケースを説明している。神の言い分を通してしまった小沢治三郎軍令部次長は当時の空気に従った旨を戦後に弁明しているため、山本の言うように空気とは科学や合理を越えた絶対的支配力を持つことを示している。山本は、人間が何か物質や現象の背景から影響力を感じると認識した状態を臨在的把握と定義し、臨在的把握をした者は無言の臨在間を感じてしまうことが空気の根幹であると説明した。それ以前¹から、例えば夏目漱石の『三四郎』ですでに空気という単語が同様の意味で使われている通り、近代以降の伝統にさえなっている。論理や理性ではなく空気で動くことは、いい方向に行くこともあれば、かの「大東亜戦争」の敗戦のような最悪な事態を惹き起こすこともありうる。

山本は、いつの間にかその場にいる皆によって出来上がっていった、空気を作り上げた皆やその周囲の者たちを縛り付ける機能を果たすものとして空気を考えた。しかし、松井・中尾(2020)では空気を自由自在に操作して自分の利益へと誘導出来る存在という、空気操作者を見出した。松井・中尾はその典型例として大東亜戦争を首相・陸相として指導した東條英機に陸軍省人事局長・陸軍次官として支えた富永恭次に着目し、東條幕府とも呼ばれた見かけ上の強大な東條の権力²に、富永が言わば側用人として支えつつ、東條と富永が共に不得意な、非連続的・非線形的な解決策を主張する軍人を排除しインクリメン

¹ 「空気で動く日本」説の有効性について、筆者は日本中世の思想史を専門とする今西宏之から以下のような指摘を受けた。前近代では神仏やあの世について実在していると社会の中では認識されており、神仏やあの世にいる先祖をはじめとする霊が一方的に世間を見ているものだと考えられていた。このことにより、前近代では「お天道様が見ている」という言葉に代表されるように、神仏やあの世は悪いことをする際の抑止力として働いていた（池見 2004）では、これを慙愧という概念からこれを考察している）。近代になってこれらの概念が薄れたことで、そうした外部の視点のモデルが世間・空気に一本化されたのではないか、というものである。今西の説は説得力があり、日本を射程にした空気論の考察上極めて重要な点であるが、本論ではあくまで近代以降を対象としているため、詳しく取り上げない。

² 東條は首相在任時に多くの大臣職を兼任していたが、その権力の源泉は日本軍の勝利ムードと他に首相の代わりが見つからないという消去法的な理由であった（川田 2015）。1943年にガダルカナル島から撤退し日本軍が苦境に陥ると海軍や元首相たち重臣などが離反しはじめ、1944年にサイパン島陥落が陥落すると岸信介国務大臣兼軍需次官は流通網・工場が直接攻撃されることによって戦争継続不能を訴え辞任し、これにより倒閣に追い込まれている。

タルな打開策に帰着させ続けたと分析した。さらに、参謀本部作戦部の中で、当時作戦部長だった富永をも部内で突き上げて強硬な意見へと流す有象無象の強硬派の作戦参謀たち（西浦 2013）という、空気操作者の中でもよりオルテガのいう大衆的な、大衆的空気操作者たちの存在を指摘した。富永はあくまで組織内の空気を操作し東條を補佐することにこだわり自分の能力のコントロール性も含めて自律的要素がある程度存在する組織内空気操作者であるが、大衆的空気操作者である作戦参謀たちは組織内外どちらの空気を動かす代わりに自分で作った空気にさえ動かされるどこまでも他律的な存在である。己の器を越える能力を求められる事態になったときの空気操作者による打開策はかえって墓穴を掘ること、富永のような空気操作者さえ操る、ムードを作るだけ作る大衆的操作者が存在し開戦への空気を決定的にしたことは、それぞれ大東亜戦争の末路を考えれば反省しなければならないことである。しかも、この当時は富永達軍人の他にも、近衛文麿（筒井 2009）や松岡洋右（服部 2020）などの様々な職業のエリートの中に空気操作者が偏在しそれぞれ悪影響を与えあっていたため、軍以外の責任もかなりの程度考えなければならない。

以上のことを踏まえた上で、空気操作者³という存在は権力の大きさという観点からすれば重要である。例えば会社の社長は一平社員に比べると権力を持っているため、社長の言い分は通りやすく、平社員の言い分は通りにくい。この二人の中では当然会社社長は空気操作者に該当する。勿論、これは極めて単純な図式であり、例えばその平社員が先代社長の息子である、期待の新人である、など様々な属性が加えられたり、第三者の媒介などによって権力は大いに変わりうる。

竹内洋は戦後日本の空気について二つの側面から分析した。第一に竹内(2015)は戦後日本の大学を「左翼に非ずんば人に非ず」の空間として捉えて、竹内本人が当時新左翼のスターとして絶頂の人気を誇っていた吉本隆明の信者の女子学生に保守の福田恆存の本を勧めたら「この人ウヨクよー」と見下されたエピソードを紹介している。竹内はこのエピソードの前提として、福田恆存は今でこそ良質な保守主義の古典として一定の価値、象徴資本があると世間からは思われているが、当時の相場はこのようなものであったという見解を示している。また、竹内(2018:33)はメディア知識人を「メディアを舞台にしたオピニオン・リーダー」と定義してその典型として社会学者清水幾太郎を挙げている。竹内は清水のことを伊藤整による愛情乞食という表現を用いて、自己愛をコントロールできない人物であり、ちやほやされたいがために学者になったと紹介している。清水は戦前マルキストとして出発しながら戦時中は愛国者、戦後に砂川闘争や安保闘争に参加し、最晩年は再

³本論では空気操作者という概念それ自体について扱うわけではないが、メディア知識人という、加藤秀俊であれ江藤淳・大江健三郎・藤田省三であれ空気を操作する仕事を生業とする存在を分析する以上、空気操作者概念と密接に関連する。実際その中でも、小谷野(2018)によれば江藤淳と大江健三郎は無責任で外れる言動を繰り返しつつも人気を集める松井(2016)の言うパフォーマー的な存在であり、空気操作者としての度合いは高い。

び右派に転向した⁴ことから毀誉褒貶が激しい人物であるが、その時代の空気を掴んで操作し続けたという一貫性があったと竹内は指摘している。清水のようなメディア知識人は、大東亜戦争の悲劇を生み出した富永や富永を突き上げた強硬派の軍人たちと同様に空気操作者である、といえる。

清水のような人物がメディア知識人の典型であれば、空気はメディア知識人によって煽られるだけ煽られて、意見は極論から極論へとスイングし続けるという不健全な姿を示すことになる。実際佐藤(2008)は、ユルゲン・ハーバーマス (Jürgen Habermas) の公共圏の議論を参考に、大正デモクラシー以後に大衆社会が出現し熟議的な輿論 (よろん) から扇動的な世論 (せろん) へと転換したことを説明している。筒井ら(2021)の大正史再考は朴烈怪写事件を典型に、大正時代がポピュリズム的な意味での現代性を帯びており、軍国主義の時代たる昭和戦前期との連続性を指摘しており、東条英機ら権力者首脳部の主体的意思ではなく空気の暴走によって戦争が起きた⁵ことを確認している。実際清水(1993)は開戦の報に接した際に喜び気分が良かった旨を回想している。この回想文は空気を操る達人自らは空気に乗せられやすくもある、という危うい存在であることを示唆しているだろう。

戦後は敗戦の反動により左派・平和主義が覇権を握ったという点では、戦前と戦後は確かに分断している。ただし、上記に書いたように、世論的な、すなわち流動的な空気は継続し続けたと考えざるを得ない事例に戦後史は満ちている。安田講堂事件をはじめとする大学紛争では、新左翼に属する学生たちは旧左翼に属する大学教員や日本共産党に対して敵対的な行動を取り、その横暴かつ暴力的な姿勢から丸山眞男に「ファシストでさえやらなかった」と激しく批判された程であった⁶。福間(2013)によれば、学生たちは映画コンテンツで 226 事件を見て、皇道派青年将校たちに自分の身を重ねて軍国主義的な要素以外は共感していた。皇道派青年将校と団塊の世代の新左翼たちは情動的共感という点で共通点があったということであり、表面上のイデオロギーの違いを乗り越えて結びついたといえる。すなわち、戦後になっても「空気の暴走で大東亜戦争が始まる」類の危険性は常に継続し続けている、と思わざるを得ない。竹内が清水を今にも続くメディア知識人の典型として分析したことは、極めて悲観的な色彩が強いといっても過言ではない。竹内の見たと

⁴ 清水本人(1972)は転向について、読書や新しい経験による学習によって日々転向しているのだとむしろ堂々と開き直っている。

⁵ 筒井(2018)は満州事変の首謀者石原莞爾や東条の部下で日中戦争の推進者武藤章が主戦派だったときは陸軍内で権力を握れて、和平派に転じると途端に下から突き上げられて権力を失ったことを描いている。松井・中尾(2020)でも、西浦(2013)の証言から東条の部下である富永恭次が部下の意見のうち強硬な意見を取り上げると公言するなど部下に操られる場面を抽出しており、この当時の強硬的な空気が将官クラスの軍人さえ容易に左右する様子が見て取れる。

⁶ 丸山がこの時期に「そろそろ殴っちゃおうか」「ヘン、ベートーヴェンなんかききながら、学問をしやがって」などと暴言を言われて研究室を荒らされたことは有名である(丸山 1998 : 133-135p)。この時の学生紛争は空気の暴走、いじめと解釈するのが適当である。

ころ、数多くの清水のような空気操作者が日本中に跋扈しているということに他ならないからである。

1.2 空気と空気操作者の天敵・先見者とその悲劇

こうした空気を操作し社会を崩壊させる可能性を常に持たせ続けるメディア知識人に対して、何らかの対抗策はあるのだろうか。山本は「水を差す」こと、すなわちその空気を説明できない現実をぶつけることで空気が破壊されるという構造を示した。「空気を読めない者」は空気を壊す意図がないが、「空気を読まない」ことは意図的に空気の破壊を狙ったものであることになる。間違った方向へと向かう空気を破壊することは有用である。

ここで、空気を読まずに意図的に破壊する人物として、非学術系の雑誌（商業カルチャー誌）において松井(2018b)が取り纏めた概念である先見者について触れたい。先見者とは、文字通り「先見の明」があり、未来を見抜くことができるような人物である。こうした先見者を把握することは容易ではないが、そのためにプラグマティズムの哲学者チャールズ・サンダース・パースが提示した手法であるアブダクションと呼ばれる考え方をを用いている。アブダクションは少ない事例で大きなことを説明するという論理上の飛躍を行うことで大胆な説明を推論するものであるが、その際に事例として注目度が高い面白いものを見出して、その事例を上手く説明できる仮説を立てる（アブダクションについては本稿4.3で詳細に説明する）。このアブダクションによって、事後的に考えて「先見の明」があったといえる複数の人物、具体的にはジョン・メイナード・ケインズ、フリードリヒ・ハイエク、レイモン・アロン、ピエール・ブルデュー、吉田茂、岸信介という6人の事例を比較・分析し、そこから共通項を抽出した（松井 2018b）。

その共通項は、以下の1～5の流れに沿って先見者と大衆が交互に行為するという理念型である。ここでいう大衆とは、ホセ・オルテガ・イ・ガセット『大衆の反逆』（1929=2020）に記されるような、欲望が肥大化し横暴な言動を行う無責任で精神的に自立できていない普遍的存在を想定している。1、3、5の奇数が先見者側の行為であり、2、4の偶数が大衆側の行為となる。認知的不協和とは、矛盾する認知を持つ状態や、その状態が起きることによるストレス、ストレス緩和のための認知修正（歪み）の発生のことである（5.1で詳細に説明する）。

1：未来を正確に予測して事実を告げる（未来予測）

↓

2：その事実は生々しいために大衆から無視されがちである（生々しさ→反感）

↓

3：それでも大衆を信じて事実を語る（信頼→言論活動）

↓

4：大衆に認知的不協和を起こさせ猛反発が起こる（盲目的拒否→反発）

↓

5：大衆の理不尽さを学習して絶望する（理不尽→絶望）

1は、先見者は自身の目の届く範囲で根拠を拾い上げ、予測を組み立てているからである。先見者の思考法は帰納法やアブダクション的である。ただし、この部分及び次の2の部分は3以降と比べると表に出にくく観測しにくいいため、3以降の推移からそれ以前にこのようなことがあったであろうと観測できない部分を推測している部分も多い。2は大衆が、自分自身に対しても他者に対しても悶着を起こさない、「現状に安住する、いい人でありたいし、他者からもそう思われたい」という欲望を持つために、先見者に対して起こす拒否反応である。その世界あるいは世間の中でよしとされている価値観から乖離しない、きれいごとを信じていると周囲から見られることはますます周囲から評価されて承認欲求を満たすことにつながる。先見者が語る事実は先見者からすれば単なる事実であり心を揺さぶられるようなものではないが、先見者から提示されなければそもそも大衆は気づきもしなかった事項であり、無意識に観測することを恐れていたようなものである。ということは、大衆からすれば「不都合な事実」であり、このことを認知させられることは心理的に苦痛であるため、「生々しいもの」である。そしてそれゆえ、大衆は先見者に対して「反感」を抱く。

3からは観測しやすい部分である。3では、大衆が見ようとしなない「不都合な現実」を先見者が突きつけさえすれば、たちまち大衆はこれを理解して認識を改め、状況の改善を行うであろうと先見者が予測することで発生する。4では、学習の結果、先見者は、大衆に無視されないような形で「不都合な現実」を突きつける手法を取ることで、大衆による先見者への反発は2のときと比べて激しくなる。5になると、それまで先見者は大衆の認知能力を信じていたからこそ自身の予測を発表してきたのだが、4の結果を見たことにより、先見者は自分の意見が理解されないのかと激しく落胆あるいは憤慨するところに行きつく。先見者と大衆との相互影響と学習との結果、「先見の明」を持つこと自体が迫害される要因となることがわかる。先見者は生々しい現実には耐えられるが、大衆はそうではない。それこそが先見者と大衆が不倶戴天の敵たる所以である。

上記の例から、以下のことも説明できる。先見者は認知資源を豊富に持ち、情報処理力が高くステレオタイプに流されにくく、瞬時に判断するヒューリスティックな処理だけでなく熟考を行うシステムティックな処理も行うが、そうした人間は少ない。それに対して多数を占める大衆はヒューリスティックな処理に頼ることが多い。その当時ソ連が敵であるか否かは関係なくその本質は何かを考えたハイエクに対して、大衆はそのときのポジションからヒューリスティックな判断をしていたのである。このように両者におけるタフネス性や認知資源の差が露呈する。

このタフネス性や認知資源の差を巡る先見者と大衆のすれ違いをさらにうまく説明する

ために、グレゴリー・ベイトソンの学習論(1972=2000)を導入できる。ベイトソンは学習をゼロ学習、学習Ⅰ、学習Ⅱ、学習Ⅲの四つに分けており、数字が増えるごとにコンテキストを巡るメタ度が上昇しより複雑な回路になっていくものだろうと考えている。ゼロ学習とは、コンテキスト(既存の文脈)がない状態での自動的かつ単純な刺激による反応であり、機械的なものが想定される。学習Ⅰとは同一コンテキストに基づく慣れ・反復であり、心理学における行動主義の刺激・反応(S-R)モデルでの心理学実験室での様子が該当する。学習Ⅱは、状況に応じて変化するコンテキストの基準(コンテキスト・マーカ)変容を学ぶものであり、学校や会社の中でのOJT的な世間でのルール学習に該当する。例えば、会議やゼミの発表の場では先輩に対して果敢に異議を挟むことを推奨しつつ、そうでない場では先輩・後輩関係を考慮するようにする、というのはとある部署で学ぶべき典型的なコンテキスト・マーカである。学習Ⅲとは、コンテキスト・マーカさえ複数用意して相対化するという最もメタな学習である。通常、とある教室や会社に馴染めばそのまま長年居座ることは容易であり楽なので、長年親しんできた常識が通用しない、別の常識で動いている場に遭遇したという状況にならない限りは、学習Ⅲは発生しない。そのため、学習Ⅲは機会の稀少性と実際に遭遇した場合の困難さという二つの点で難易度が高いが、後者の遭遇した際に失敗した場合はダブルバインドを引き起こしやすくなる。ダブルバインドとは、階層の異なるコンテキスト間で矛盾する命題をぶつけ続けられながらも、その場から退去できない状態であり、不愉快でストレスの高い場に縛られる分、大いに自分の今までの常識を疑うきっかけになるという点では学習の進捗が深まるが、一方でその負担の大きさから精神が危険な状態になることも多いという点でリスクも存在する。

先見者も、先ほどの1~5の流れでは4→5の個所で、このベイトソンの理論でいうところのダブルバインドに遭遇し学習Ⅲに到達する。そのメカニズムは以下の通りである。

大衆は認知的不協和を引き起こすがゆえに自分の話を聞いてくれない

↓

しかし、大衆が学習をしない限り世の中は良くなる

↓

このジレンマは自分が世の中を良くしたいと思う限り終わらない

↓

だが、世の中を良くしたいと思うことは自らのアイデンティティとなっている(退去不可)

つまり、先見者が先見者として大衆が見たがらない真実を突きつけようとするのは己の存在意義であり、それは極めて難しいが、それを諦めることは自分自身を否定することに繋がる。こうした先見者が直面したダブルバインドの例としては、例えば『イリアス』の登場人物であるトロイア王女カサンドラ(Κασσάνδρα)や旧約聖書の預言者エレミヤ(יְרֵמְיָהוּ)の事例が伝統的に先見の明があった人物として知られている(松井 2018b)。

カサンドラは太陽神アポロンに求愛され愛人となり未来を予言する力を授けられたが、早速この力によってアポロンがカサンドラを捨てる未来が見えてしまった。カサンドラはアポロンの愛を拒絶し、アポロンは激昂してカサンドラの予言を父のトロイア王プリアモスをも含めた誰もが信じなくなる呪いをかけてしまう。以降、カサンドラはトロイの木馬を入れてはいけないことを筆頭に様々な悲劇を予言するがその度に誰からも聞いてもらえず、トロイアの滅亡をはじめとする複数の悲劇を味わい続けて自分の死亡さえも防げない運命にあった。

エレミヤは北からの災いを神の言葉として預言⁷したが、王や民はエレミヤの不吉な預言に対して認知的不協和を起こして反感を覚え、その代わりに楽観的な未来を語る偽預言者の言葉を信じ、そもそもヤハウエの神ではなく周辺の諸民族が信仰するバアルを信仰する有様であった。ジレンマを解消できずにダブルバインドに陥ったエレミヤは預言を続けるも、バビロニア王ネブカドネザル二世（英語表記は Nebuchadnezzar II、アッカド語が文字入力に対応していないので、代わりにアッカド語読みをアルファベットで表記すると Nabû-kudurri-ušur）によるエルサレム破壊とバビロン捕囚を止めることはできなかった。王や民に裏切られ続けたエレミヤの怒りは凄まじく、バビロニア王は神が遣わした懲罰であるとの預言も行っており、呪いの言葉を以て復讐することを神に祈った（古田 2020）。

カサンドラとエレミヤの事例は先見者がダブルバインドに陥った際に当人はそれでも現実を突きつけ続ける形でダブルバインドの乗り越えに成功したものの、大衆とのコミュニケーションには失敗したパターンに属する。身も蓋もない現実としての正しいことを言う先見者は必ず大衆に反発されてしまうという問題は、空気とメディア知識人の問題にも直接的に繋がる。見たくない現実を突きつける先見者を必然的に嫌う大衆は、甘言を以て現実を否定するメディア知識人を支持するようになるからである。先見者にとっての敵は空気と空気を作ってそれに乗る大衆だけではなく、大衆を動かす空気を操る空気操作者としての能力を持つメディア知識人も敵として立ちふさがる。先見者はメディア知識人に対して言論で勝利し空気・影響力の面でも抑えつけ、大衆から攻撃されないようにするという、いばらの道を歩かなければ己の愛する国や社会を守れない難儀な存在である。

この先見者に関する議論（松井 2018b）を一度まとめる。それは、未来を見て有益な活動をする先見者はなぜ理不尽に迫害されてしまうのかという問いであった。先見者は目を背けたくなる事象を観測しても認知的不協和を起こさず人々に知らせる。知らされた人々

⁷ 古田(2020)は預言者兼先見者と旧訳聖書（サムエル記下 24:18-25）に明確に書かれているガデという人物を事例に、神によって命じられて言葉を発すること（預言）と未来を見ること（先見）を区別している。しかし、結局預言者が未来を当てていること、預言者は現実に耐えて預言者の話を聞く人が認知的不協和を起こし預言者の話を基本的に聞かず迫害することという松井(2018b)の先見者の特徴に該当しているので、機能的に考えてここでは預言者も先見者として扱う。

は知った現実の醜さと、醜い現実には耐えられる先見者に対して認知的不協和を起こしてしまふ、というものである。もちろんこの命題はアブダクションで示した仮説にすぎない。しかし、もし先見者がいるのであれば、暴走した空気にやそうした空気を煽るメディア知識人に対して、その性質上必ずどれだけ不利だとしても立ち向かおうとするはずである。

1.3 本論文の目的 「加藤秀俊はなぜ江藤淳・大江健三郎と藤田省三に迫害されたのか？」という謎の解明

以上の背景をもとに、本論文の目的を説明する。メディア知識人は確かに、竹内の言う通りパフォーマー型の愛情乞食が多いように思える。ワイドショーを騒がすコメンテーターたちは派手な格好をしたり、世間を脅かす極論を述べたり、ウケを狙うことで世間の関心を浴びてちやほやされることを狙えるのである。そして確かに、そうしたメディア知識人の口車に乗って世論が煽られ過激な方向へと二転三転していく事例も事欠かない。

しかし、果たしてそういう人物ばかりがメディア知識人になるのだろうか。そうでない人物、先見者として動くメディア知識人もいるのではないか。そして、もし先見者として動くメディア知識人がいるのであれば、世論を鎮静化、情動的共感ではなく認知的共感的（ブルーム 2018）な、理性的なもの⁸であるへと変化させることもできるのではないか。竹内の清水論に対してはそうした問いが浮かび上がってくる。

竹内はメディア知識人とは異なる区分として公共知識人というカテゴリーも用意している。竹内(2014:96)は公共知識人を学会などで専門家に向けて発表したり、学会誌に専門論文を発表したりする専門学者ではない、誰もが考えなければならない政治・経済・社会・文化問題に対して、専門家にむけてではなく、知的公衆に意見を具申する知識人であると定義している。ここから、竹内は公共知識人を熟議デモクラシー的な理知的な存在、メディア知識人を世論を煽り空気を操作する存在として対比的に考えている。一方竹内(2018)による「メディアを舞台にしたオピニオン・リーダー」というメディア知識人の定義では公共知識人もメディア知識人に含まれるが、この意味で、竹内は確かに良質なメディア知識人としての公共知識人を想定しているとも考えられる。先見者的なメディア知識人がいるとするならば、竹内の言う公共知識人に該当する。誰もが聞きたくない身も蓋もない現実とは、誰もが考えるべき政治・経済・社会・文化問題の中でも重たいものである。専門家ではなく知的公衆に向けて意見を発信する点も公共知識人と先見者は照合する。

以上のように考える場合、果たしてどのような人物が公共知識人であろうか、という問

⁸ 佐藤(2008)は理知的な輿論（よろん）と情動的・扇動的な世論（せろん）とを対比させ、前者はハーバーマスが理想視した公共性、後者をファシスト的公共性の原動力とした。

いを立てることが出来る。その答えもすでに竹内は用意している。竹内本人も指導を受けた加藤秀俊である。竹内は加藤を 2 章で触れる通り公共知識人的な存在として紹介している。加藤は実際にどういうところが公共知識人的な存在なのだろうか。

本論文で主題とする社会学者加藤秀俊（1930～）は以下のようなキャリアを歩いた。以下は加藤本人の自伝（1982, 2021）による。加藤は陸軍軍人の子としてまだ未開発であった頃の東京渋谷に生まれ、仙台の陸軍幼年学校在籍中に終戦を迎えた。その後東京に戻りこれからは商売の時代だと思って東京商科大学予科、本科に進学するも簿記や経済学の難しさと南博との知遇を得て社会学を専門としていくこととなった。大学院に進みながら高校で西洋史を教える短い時期を経て京都大学人文科学研究所の助手ポストを得てアカデミアの道へと進んだ。大学紛争期に京大教育学部助教授になるがすぐに辞任し、学習院大や放送大などのポストを渡り歩いた。

加藤はメディア知識人としても「穏当で煽らない」人物であるという点で、2 章で扱う竹内洋の狭義のメディア知識人の定義に当てはまらない特徴がある。さらに加藤は左派中心の思想の科学研究会に加入しつつも、粕谷一希が編集次長になって以来右派色が強くなる前後の時期でも中央公論系の知識人であるなど、思想的にも周辺人物の関係上も左右の中間に位置づけられる人物である。戦後日本の論壇でのメディア知識人としてこれまで盛んに論じられてきた丸山眞男を中心とする左派の主流、あるいは吉本隆明などの左派の反主流や福田恆存や小林秀雄のような右派とも加藤は異なる立ち位置にいることになる。

加藤の独自性としてよく言われることはプラグマティズム的思想と中間文化論である。加藤はイギリス経験論の系譜に位置するプラグマティズムに親和的な思想を持つ。プラグマティズムは明治期に流行したものの大正～昭和期には傍流となっていたイギリス経験論の系譜に位置する。このことは『中間文化論』で高級文化と大衆文化の融合、抽象的なものと具体的なものの相互影響を論じたことにダイレクトに繋がっている。竹内は加藤の『中間文化論』を名著として紹介している。竹内の論考では、高度経済成長が起きる前に加藤がその可能性を読み切ったという点で、加藤が十分に戦後日本の論壇上重要な位置を占めていると分析されているからである。

しかし、3 章で検討する、加藤を批判した人物たちである江藤淳や大江健三郎、藤田省三からは理解されずその言説を分析すると、それらはもはや理不尽な迫害に他ならなかった、という特異な事例を観測できる。しかも、3 章に出てくる知識人のうち鶴見俊輔や橋川文三、田口富久治らのように加藤に好意的な人物もある程度存在し、田口は紛れもなく左派であった。江藤は当時は左派で後に右派に転向する。それ以外で挙げた人物は概ね左派に該当する。つまり、単純な左右のイデオロギーでこのことを説明するのは困難である。江藤、大江、藤田の三人は竹内が加藤論の中で加藤に反発した人物としても出た人物であるが、肝心の竹内の説明で説明しきれないという問題がある。言い換えれば、加藤は先見者であり、加藤に反発した江藤・大江・藤田の三人は反先見者的なメディア知識人であるために反発したのではないか、ということ見通しを本稿は示したい。つまり、前節で紹介

した「先見者はなぜ理不尽に迫害されるのか?」「それは、先見者が他者を認知的不協和にさせるからである」という仮説の良い事例として加藤が該当しないだろうか、という形で新たな仮説が形成される。先見者の仮説をすでに 1.2 でしているの、この新しい仮説は、1.2 で想定された先見者の特徴を加藤が満たしているかどうかを検討するという意味で帰納的な方法論に基づくものである。

以上の状況を踏まえて、「先見者はなぜ何故理不尽に迫害されるのか?」「それは、先見者が他者を認知的不協和にさせるからである」という仮説の下で、「加藤秀俊は先見者に該当するか?」という仮説を検討することを研究目的とする。後者を解明するため、本論では三つの小さな作業仮説に分解して説明を試みることをまず行う。その上で、加藤は江藤淳や大江健三郎、藤田省三からは理解されず理不尽に迫害されたことは加藤が先見者であることの証明になるだろうかという点に立ち戻る、という流れで進めていく。三つの作業仮説は、具体的には、①実感論争における加藤と他の論者との距離を単に実感に対する是非のみならず他人指向型への是非から捉える作業によって加藤の立ち位置を明確に炙り出すこと、②加藤が中公新書に込めたメディア戦略と中間文化論との関係を探ること、③以上の点を踏まえた上で新たに認知的不協和とミッテルの観点から中井正一と比較して見えるものを考察すること、以上の3点である。

2 先行研究

2.1 加藤秀俊に関する先行研究

竹内洋(2018)によるメディア知識人の定義「メディアを舞台にしたオピニオン・リーダー」はメディア知識人論を整理したという点で画期的である。竹内はメディア知識人の典型例として、社会学者清水幾太郎のことを、自己愛を制御できずメディアに派手に露出する人物として描写する。しかし、竹内のメディア知識人の定義に加藤も当てはまるにもかかわらず、加藤は清水と同じパーソナリティの持ち主ではない。竹内は加藤について別の論考で扱っているが後述する。

加藤秀俊を主題として扱った評論や先行研究は、加藤が現在も学術顧問を務める中部大学が編纂している雑誌『ARENA』が2011年に発行した第12号で「加藤秀俊をめぐる環」特集を嚆矢に、同誌への寄稿文に加筆を加えた竹内洋(2014)の「加藤秀俊論」や、竹内と同じく寄稿した佐藤卓己(2013)が加藤について触れている。さらに、佐藤卓己が京都大学大学院メディア文化論研究室の機関誌として発行している『京都メディア史研究年報』の第2号では津金澤聰廣(2016)による京都大学時代の加藤の様子や、松永智子(2016)による加藤秀俊本人を交えた加藤秀俊著『メディアの展開』(2015)をめぐるワークショップ報告が載っている。

しかし、これらの加藤を論じた論考は加藤の「実感」についての特徴を説明していない。また、竹内の加藤論を除きメディア知識人との関係で加藤に注目していない。

竹内洋は、加藤を清水のような人気取りを機会主義的に狙う狭義のメディア知識人ではなく、教養溢れる公共知識人の一人であると取り扱い、分析を行った。竹内は公共知識人を「学会などで専門家に向けて発表したり、学会誌に専門論文を発表したりする専門学者ではない。誰もが考えなければならない政治・経済・社会・文化問題に対して、専門家にむけてではなく、知的公衆に意見を具申する知識人である」と定義している。

なお、竹内は、ここではメディア知識人と公共知識人とが違うという点を強調しているが、他方で、竹内(2018)はメディア知識人を「メディアを舞台にしたオピニオン・リーダー」と定義しており、この範囲は幅広い。公共知識人は知的公衆に意見を具申する存在である以上、必ずメディアを用いてオピニオン・リーダーとしてふるまわなければならないため、1.3で先述のように、上記のメディア知識人の定義の中には公共知識人は丸ごと含まれてしまう。そこで、「メディアを舞台にしたオピニオン・リーダー」の意味のメディア知識人を「広義のメディア知識人」竹内が公共知識人と区別したメディア知識人を「狭義のメディア知識人」とすると、メディア知識人・公共知識人・専門知識人の関係は表1のようになる。

表 1 : 知識人カテゴリーの整理

	広義のメディア知識人であるか否か
狭義のメディア知識人	必ず該当する
専門知識人	該当する場合もある
公共知識人	必ず該当する

表 1 を詳細に説明すると、専門知識人は狭義のメディア知識人・公共知識人・広義のメディア知識人何れとも部分的に重なる。その上で表 1 の整理に従って、例えば清水幾太郎と加藤秀俊を代入すると、以下の表 2 として整理できる。

表 2 : 表 1 の具体的代入

	清水幾太郎	加藤秀俊
広義のメディア知識人	○	○
狭義のメディア知識人	○	×
専門知識人	○	○
公共知識人	○	○

以下、本文で扱う人物は必ず広義のメディア知識人・公共知識人であることは自明な人物を扱うため、本文でメディア知識人と言う場合は加藤のメディア知識人性を扱うときは広義の意味、それ以外の場合は基本的には狭義の意味に限定する。例外となる場合は先に広義の、狭義の、を形容詞として付ける。

竹内の論考では加藤が町人型の公共知識人であり、マルクス主義者や丸山ら近代主義者に代表される天下国家型で武士・農民型の公共知識人とはスタイルが真逆であると見なした。こうしたスタイルによる違いは身体・流儀（ハビトゥス）的な特徴によるものであり、加藤のスタイルは一橋大の「見えないカリキュラム」が影響していると竹内は説明する。

加藤自身も「如水会館とわたし」の中で、東大の卒業生を中心とした筋向いの学士会館と一橋の如水会館の雰囲気はまったく「異質」だといっている（『如水会報』一九九五年四月号）。卒業大学の影響は四年間で終わるわけではない。卒業後も他者や読者は、著者を卒業学歴でみる。そのぶん自己社会化は卒業後も続く。（中略）東大卒の人はいつまで立っても東大卒らしい。いや東大卒らしく振る舞う。加藤にとっても一橋大学出身というのは、本人が意識する以上に大きなものがあるのではないか。いや意識されないからこそ大きいといえる。（竹内 2018 p. 148-149）

竹内は一橋らしさを帝国大学に対する商科大学が正系ではないこと、一方で入学試験が学歴エリートとして遜色ない程度に難しくビジネスエリートの輩出率で東大に勝っていたことから、正系にかぎりなく近い傍系と定義している。

正系に近い傍流であればあるほど正系を意識せざるを得ない。正系に近づこうとする「引力」と目と鼻の先にある正系に激しく反撥する「斥力」の両極端の力が働きやすい。こうして一橋には正系学歴貴族文化への強い「同調」か、強い「離反」の両極端の作用が働きやすくなる。(竹内 2018 p. 171)

竹内は上記の説明の例として、正系に近づくべく帝大式教養主義を理想とした福田徳三(1874～1930)や上原専祿(1899～1975)と、同じ教養主義でも一橋化した阿部謹也(1935～2006)や知の中心そのものへ激しく反発した石原慎太郎(1932～)(別の著書では田中康夫(1956～))を挙げた上で、以下の図1にまとめている。

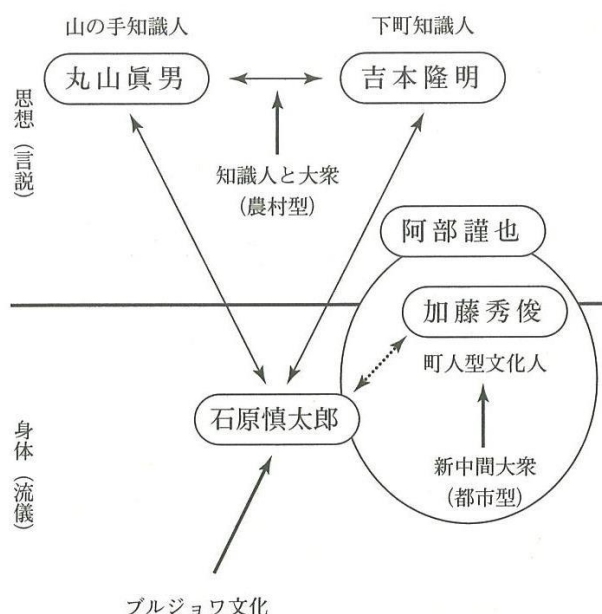


図1：竹内洋『加藤秀俊論』(p. 151)より

竹内によれば、阿部・石原・加藤はいずれも一橋らしさという共通点を持っている。そのハビトゥスは都市のブルジョワ由来のものであり、身体的なものであった。丸山に代表される旧制高校・帝国大学の思想重視のハビトゥス⁹は、丸山を批判する下町知識人である吉本隆明とは思想重視の農村型である点で共通しており、一橋のものと丸山・吉本のものとは対比的な存在であると竹内は指摘している。市民・ブルジョワと大衆は通常対比されるべきものである(ハーバーマス 1994)が、竹内は農村・町人という対比軸を用いて、新中

⁹ ハビトゥスはピエール・ブルデューの用いた語であり、習慣・性向など複合的な意味を持つ(磯 2020)。その意味は時期によって揺れがあるが、社会的なものが個人に刻み込まれた結果、認知や思考、行動に影響する構造である。

間大衆¹⁰が主に都市の住民である点を以って同等なものであると扱っている。

また、竹内は『メディアと知識人』では帝大を出ているか否かと山の手育ちか下町育ちかという二つの軸でメディア知識人を分けている。ピエール・ブルデュー (Pierre Bourdieu) が用いる文化資本というキーワードがあり、概ね意味は教養・学歴など価値がある文化的な構造である。竹内は文化資本の中でも学歴に該当する部分を学歴資本という形で特別に取り出しており、それ以外の部分を文化資本とした。竹内はその上で、帝大を出ている場合は学歴資本が相対的に高く、出ていなければ学歴資本が相対的に低いと分析し、山の手育ちならば文化資本が相対的に高く、下町育ちならば相対的に文化資本が低いとした。山の手育ち東大出身者の丸山眞男¹¹は文化資本も学歴資本も相対的に高いので正系であり、東大出身だが下町育ちの清水幾太郎¹²や、山の手出身だが帝大ではなくハーバード大に留学した鶴見俊輔、下町出身で東工大出身の吉本隆明は傍系であると分析した。以下を図示すると表3となる。表1での丸山の部分に該当する、山の手育ちかつ帝大卒のみが正系である、と竹内は分析した¹³。

この図1と表3の結論を統合すると以下ようになる。

表3：竹内の学歴資本・文化資本分類

	山の手育ち	下町育ち
帝大卒	丸山・正系	清水・傍系
非帝大卒	鶴見・傍系	吉本・傍系

大学と育ち共に良い存在が正系知識人であり、そこから外れたら傍流である。竹内によれば伸びやかな町人型である一橋に対して、東大をはじめとする帝大は正系的であるため

¹⁰ 新中間大衆は村上(1984)を参照のこと。

¹¹ 丸山眞男はほぼ東京育ちであるものの、父であるジャーナリスト丸山幹治は長野の生まれで早稲田の出身者であり、丸山もまた、大衆文化に親和的な思想の科学研究会の創設時メンバー七名の一人であるなど、単純ないいとこ育ちと言い切るには不適切な要素がある。なお、『思想の科学』発刊当時は鶴見が学んだ論理学・プラグマティズムを中心にアカデミックな色が濃かった。

¹² 竹内は清水がスラムとしての東京下町育ちであることを指摘しつつも、没落した旗本の家系に連なる可能性を同時に指摘している。その場合は、平均的な下町育ちよりは圧倒的に文化資本の面で優位に立っていたことになるが、竹内はこの側面を捨象して分析することになる。

¹³ ハーバード大など海外の名門大学での学歴は世界の大学ランキング上では東大や京大に勝っていても、日本国内では「ガイハク (外博)」と呼ばれたように、海外で博士号を取った人物に対して低い評価がなされたりもした。ブルデューの言う「界」が分断されることで、評価基準が異なるためである。東工大や一橋が実務で高い評価を得ているにもかかわらず、竹内が言うようにアカデミアの世界では傍系に位置する、といった現象も同様に考えることができる。

固くて真面目な農村・武士型スタイルである。一方、本稿 3 章でとりあげる実感主義は大衆が主な担い手である。よって、筆者が竹内を補足する形で実感論を表 3 に当てはめると、表 4 のようになる。山の手育ちの帝大出身者は江戸の時代の儒学者のように大衆や実感を評価せず、傍系である一橋のような他の大学出身者や帝大出身でも下町出身者は大衆や実感に親和的であるという傾向がある、ということが想定される。

表 4：図 1 と表 3 から導かれる学歴資本・文化資本と実感論との関係予想

	山の手育ち	下町育ち
帝大卒	非実感論的	実感論的
非帝大卒	実感論的	実感論的

以上の先行研究の妥当性の有無を、3.1 で詳しく述べることになる加藤の『中間文化論』に即して考えていくこととなる。その前に、加藤の『中間文化論』を巡る論争について簡潔に記述しておきたい。『中間文化論』に対して、東大卒で丸山の弟子である藤田省三は久野収や鶴見俊輔との対談の中で「普遍への欲求がない」と反発している（久野・鶴見・藤田 2010）が、その様子は、その通り竹内のロジックで説明できるように見える。

しかし加藤を批判する江藤淳は慶応出身で久野収は京大出身であり、逆に江藤に加藤同様の立場＝実感主義であると批判された三名のうち、後藤宏行は東大、梅棹も京大出身と加藤以外は(旧)帝大卒であるなど、単純に大学の「見えないカリキュラム」の違いでは説明できない事象もある。さらに、加藤を批判する東大出身者である藤田省三と大江健三郎の生まれは愛媛県出身、日高六郎は海外（中華民国時代の青島）生まれであり、竹内が出身地の分析で用いた例では東京内での山の手・下町の対比であるため、東京外の地域がどのようにカテゴライズされるか不明瞭である。そのため、加藤への反発は竹内の想定する大学・出身地とは別の原因がより強く働いている可能性がある。

その上、竹内は分析対象として想定している旧帝大として東大をイメージしており、竹内の出身校であり勤務校でもあった京大など他の旧帝大の扱いも不明瞭である。また、旧帝大以外の大学を旧帝大より劣位にある存在であると竹内は図式で示しているが、東工大・一橋などの国立大や早慶に代表される私立大、ハーバード大などの海外の大学を旧帝大ではないというカテゴリーの中に強引に押し込んで等価としている。一橋内部の分析についても、上原と阿部は師弟関係であるにもかかわらず、竹内は両者の正系（に限りなく近づいた）・傍系（であることをよしとした）というスタイルの違いをただ指摘するだけであるなど印象論的な傾向がある。

こうした竹内の加藤論での東大卒・他大卒評価の曖昧さは、竹内がブルデューの社会学理論をアレンジしつつも、基本的にブルデューの理論の前提を正しいものとして設定してそこから全てを導出しようとする演繹的な手法のみに頼ったことに由来していると考えられる。そこで本稿では、実際の例を踏まえてチェックするという帰納的な手法を用いなが

ら、より説明が通る命題を提示するというアブダクションも行うことで精緻化をさせたい。その上で加藤の『中間文化論』に至る流れを確認し、加藤と江藤の論争を分析することとする。その上で、加藤のメディア知識人としての特徴を、竹内が既に取り上げた清水と対比する形で見出したい。

2.2 戦後日本のメディア知識人及び論壇に関する先行研究

戦後日本のメディア知識人に関する先行研究については、すでに竹内のメディア知識人論を挙げた。竹内(2018)によるメディア知識人の定義「メディアを舞台にしたオピニオン・リーダー」はメディア知識人論を整理した上での定義という点で画期的だということも既に触れた。では、それ以前のメディア知識人に関する議論はどうだったのだろうか。

知識人という言葉は、フランスのドレフュス事件(1894年)に遡る。この際、小説家であるエミール・ゾラ(Émile Zola)をはじめとする文人たちは、ドイツ軍のスパイと疑われたユダヤ人のフランス軍大尉アルフレド・ドレフュス(Alfred Dreyfus)を擁護するという立場で論陣を張るが、これを反ドレフュス派の小説家・政治家のモーリス・バレス(Maurice Barrès)らが抽象的思考しかできずに現実的ではない「知識人」とレッテルを貼って非難したのが知識人という言葉の最初である。

その後、フランスのユダヤ人作家ジュリアン・バンダ(Julien Benda)は『知識人の裏切り』(1927=1990)で、正義や真理といった普遍的なものを語るべき知識人がモーリス・バレスのように党派的な政治的議論に熱中し本来の役割を忘れていくという批判を展開し、知識人という言葉を使用した。政治的党派性を丸出しに特定の勢力・権力に媚び従属するような知識人を戒めたバンダは王党派からマルクス主義者まで幅広い立場から敵対されたという。無論、正義や心理など普遍を語る知識人は実際どれだけいたのかはバンダ自身も認めているようにかなり理想的な状態を想定したものであり、一つの理念型として考えるべきである。

ジュリアン・バンダの知識人論はあくまであらゆる党派の権力を批判する理念型的な知識人という、バンダ自身できえ完全にはできなかった完璧な存在を前提にしたうえで、それから外れた知識人を「本来の知識人の役割を裏切った」存在であるとして批判するというものであった。それは単純に言えば善悪二元論的であり、知識人の権力批判のやり方にみに注目するものである。そこで、次に紹介するのは所謂「専門知識人」批判である。

スペインの哲学者ホセ・オルテガ・イ・ガセット(José Ortega y Gasset)は、大衆と高貴な人とを分ける貴族主義的な二分法に基づき大衆論を展開した(『大衆の反逆』(1929=2020))。「良きにつけ悪きにつけ、大衆とはおのれ自身を特別な理由によって評価せず、「みんなと同じ」であると感じても、そのことに苦しまず、他の人たちと自分は同じなのだ、むしろ満足している人たちのことを言う(69p)」という発言の通りオルテガは大衆に批判的であり、ギユスターヴ・ル・ボン(Gustave Le Bon)の『群集心理』

(1895=1987)と同様に近代化によって生じた根本的な社会変動の結末であると見なしている。

しかし、その二分法は人間の個別的な資質に由来するものである。オルテガは社会階級における貴族やブルジョワジーが良い存在であり労働者階級が批判されるべき存在であると見なしているわけではない。貴族・ブルジョワジーにも労働者にも双方に優れた少数派と大半の（批判されるべき）大衆とがそれぞれ存在しているのだと論じているのだ。

労働者階級だけでなく貴族やブルジョワジーも大半がそうであるとオルテガから批判された大衆とはどんなものだろうか。オルテガによれば大衆＝勉強量が足りなくて知的能力に欠ける、というわけではない。オルテガによる大衆とは、優れた少数派と異なり現状に満足し、大衆の中にいることに喜びを覚え同じであるがゆえに満足し、そうであることを大衆でない人にも強要して権力を発揮してくる人たちと解されている。つまり、他律的であることに居直って暴力的であることこそ大衆特有の野蛮さであると論じているのである。この「凡庸さ」の観点はハンナ・アレント (Hannah Arendt) の『イェルサレムのアイヒマン』(1963)などにも受け継がれ、無責任な人間の一つの類型を提供している。

続けてオルテガは専門家が大衆の一部であると指摘し、専門家批判を行っている。オルテガによれば、近代に突入するまでの知識人は高貴な人であり、近代に入ってそれが専門分化したことで大衆に落ちぶれてしまったとしている。

このように、オルテガによれば本来の知識人とは専門領域外の幅広いことのわかる存在であったが、専門分化によって専門外のことがわからない存在に変化してしまったと論じている。つまり、専門領域の細かい（そしてどうでもいいような）知識で武装した大衆でしかないということであり、幅広い教養に富んだ物事を全体的に見ることができる存在ではなくなってしまったということである。こうした専門家・学者は特定の分野の見方しかできないにもかかわらず、物事すべてを分かったように論じて大衆の先頭に立って大衆を煽る、という見方は後の専門家批判論の原型となった。党派的権力に寄り添って本来の役割を裏切った知識人というバンダの知識人論とはまた違った、知識人の持っている教養・知識の全体的スケールの中から専門分化する知識人、という新しい知識人論であった。

オルテガの知識人論はジャン＝フランソワ・リオタール (Jean-François Lyotard) 『知識人の終焉』(2010)にも受け継がれている。リオタールは、フランスにおける1968年の五月危機の後は普遍的世界を司る知識人が大きな物語を語る時代が過ぎ去り、テクノクラートとしての専門家となりより高い賃金を得ることを目指すようになったと主張した。リオタールによるこの議論は、オルテガの専門家批判を受け継ぎつつ、世の中のポストモダン化というリオタールがパイオニアとなった論点へと接続する試みであると評価できる。

パレスチナ系アメリカ人のエドワード・サイード (Edward Wadie Said) (1998)は知識人を亡命者にして周辺的存在、アマチュア、さらには権力に対して真実を語ろうとする言葉の使い手であるとしているが、これは晩年のバンダ同様かなり単純な見方である。権力を

語る行為自体が権力的な行為である¹⁴ように、ある権力に対して立ち向かう行為そのものもまた権力的な行為でしかない。すなわち、知識人は皆どのような立場を採用するにしても権力的な存在である。自分の立場は社会から切り離されたものであり、自分を除いた他に悪いものの原因があるという見方(犬飼 2016)は心地の良さをもたらすかもしれないが、現実の認識の正確性という意味では問題があり、知識人としてはバンダが批判する対象に随ってしまうということになる。結局は自分の権力性に自覚的になりつつも、それでも必要なものと自らが認めた言説を行っていく責任倫理を果たすという、マックス・ウェーバー(Max Weber)が『職業としての政治』(1980)で述べたことを自らのこととして味わうことが求められる。政治権力に対するスタンスとはまた別に政治に関わるのも自分が目立つためとする竹内の定義するメディア知識人という定義がこれまであまり広まってないために、こうした議論がはびこってしまうという分析ができよう。

日本政治思想史を専門とする学者である坂本多加雄(2005)は、日本において知識人という言葉が出回るのは大正時代後半であり、それは知識階級という言葉として定着したと指摘している。坂本は、明治時代は天下国家に知識は役立つことが自明であり、日露戦争が終わることで独立の危機という緊急事態を乗り越えたあたりから個人の問題・自分の人生とは何かという内省的な問題にシフトするようになったという。

坂本は哲学・文学・美学など主に人文系の分野の本でこうした人生の意義を問う試みを教養という言葉で呼んだこと、それが大正以降に広まって教養主義と呼ばれたことを指摘している。しかしその教養とは明治の修養主義の延長線上にある自分を鍛えるという発想に基づいており(筒井 2009)、高踏的で遊びに類するものであるか、それまでの明治時代や大正時代以降も多くを占める貧しい人々がやるように実用に即するものであるかの違いでしかなかった。高踏的な議論に夢中になってこれを出来ない人を見下すという現象は普遍的に起こるものであるが、労働争議やロシア革命の発生に呼応する形で教養主義者たちはマルクス主義に染まっていった。マルクス主義は高踏的ではなく社会変動を促し労働者の解放を目指す実用的な学問であり、フランス社会主義・ドイツ観念論・イギリス経済学を総合するものであると見なされた。こうして、革命という実用のために資する知識・教養の担い手としての知識人というイメージが大正末から昭和の戦後のある時期までを支配した。

経済思想史の学者である西部邁(1996)は、知識人という言葉に対応する欧州語が三つあることに着目して知識人のカテゴリー分類を試みた。一つ目はインテレクチュアル、二つ目はインテリジェント、三つめはインテリゲンチャである。インテレクチュアルはオルテガのいう専門分化する前の知識人に該当する。インテリジェントはオルテガのいう専門化

¹⁴ ミシェル・フーコー(Michel Foucault)(2020)は言説それ自体、人間関係そのものが権力であるとするミクロ権力論を唱えた。この考え方によれば、万人が権力者としての一面を持つということとなる。

した知識人に該当する。インテリゲンチヤは政治勢力に加わりその政治運動を担う知識人のことであり、バンダのいう「知識人であることを裏切った知識人」に該当する。その意味で、西部の知識人論はバンダとオルテガの知識人論を踏まえた上で両者を統合する試みであったといえる。

その際のポイントとして、バンダ・オルテガ双方が良い側であると考えている知識人を等しいものであると見なした点である。バンダはインテリゲンチヤ、オルテガはインテリジェントを批判しているが、この両者に対比されるべき良い知識人のことを、バンダは普遍的な正義や公的問題を論じる、オルテガは教養があり全体を論じることができると見なしており、確かにこの部分には共通点がある。バンダ・オルテガの言うそれぞれの良い知識人をインテレクチュアルと見なすことで知識人の類型化が一通り行われたという意味では西部の作業には意義がある。

竹内洋(2014)は著書や論考によって言葉の使い方がブレているものの、大まかにまとめると公共知識人・専門知識人・テレビ文化人もしくはメディア知識人という三つのカテゴリーを用いている。公共知識人は西部の言うインテレクチュアル、専門知識人は西部の言うインテリジェントに相当する。テレビ文化人もしくはメディア知識人というカテゴリーが西部の言うインテリゲンチヤと重なる領域であるものの、西部は中でも政治的発言をすることに力点を置いており、竹内はここにブルデューのハビトゥス論・象徴資本論を用いた覇権戦略論や日本における知識人という言葉の使われ方の展開史を踏まえた概念を与えている。以下の説明では三つめのカテゴリーをメディア知識人という名称を用いて説明をしていく。

西部・竹内共に、三つのカテゴリーが相互に排反事象か否かの記述があいまいな点が挙げられる。例えば、竹内が分析のために扱った人物として清水幾太郎が挙げられるが、彼は社会学者としての仕事を評価されており¹⁵、専門知識人としての実力もあったということになる。さらに、竹内自身、メディア知識人の先駆として清水を語りつつ清水以降のメディア知識人のひどさを批判しているように、公共知識人としての要素を清水にも認めている。つまり、この三つのカテゴリーは相互に重なりうるものであると考えるほうが自然である。理念型が複合する場合はマックス・ウェーバー(1980)の支配の類型のように起こりうるものであるが、西部・竹内共にカテゴリーの差の記述に重点を置きすぎている点がある。例えば、清水は西部でいうインテリゲンチヤ、竹内でいうメディア知識人要素だけでなく、インテリジェント≡専門知識人要素や、インテレクチュアル≡公共知識人要素も存在する。

また、竹内のメディア知識人論は鋭く通常人が目を背けたくなるような人間の醜さを描き出そうとしている点で評価できるが、覇権戦略による転覆と清水とは違う主流派に属する秀才タイプによる慎重戦略とをやや対比的に捉えすぎているように思われる。例えば東

¹⁵ 例えば、富永健一(2004)や庄司武史(2015, 2020)の清水論を参照すること。

大主流派学者や共産党中央の幹部といったアカデミック界限において安泰な立ち位置にいる人物が慎重戦略を採用するのは、ソースティン・ヴェブレン (Thorstein Bunde Veblen)、ヴェルナー・ゾンバルト (Werner Sombart)、ジャン・ボードリヤール (Jean Baudrillard) が指摘した見栄の張り合いによるマウンティングの欲求という形でそのポスト自体がマウンティングのツールとして強力に働くからであるとも言える。その意味では、主流派なのに場を揺らすタイプや、傍流なのに分相応の戦略を採用するタイプの存在こそがマウンティングの欲求の度合いで対照されるべきである。例えば、清水幾太郎の場合、仮に東大副手から東大の助教授・教授に残ることができて史実以上に覇権戦略的な行為への動機を抑えられたとしても、そのパーソナリティ故にかなりアクティブに行動したと思われる。

3 実感論争と他人指向型

3.1 講談社文化と岩波文化、理論信仰と実感信仰、中間文化論

1章から説明している通り、加藤が江藤・大江・藤田に理不尽な迫害された理由を探求することは、加藤が先見者であるか否かを分析するにあたって重要なヒントとなりうるため、本論の研究目的である。研究目的を構成する加藤の独自性に関する三つの作業仮説のうち、本章では①実感論争における加藤と他の論者との距離を単に実感に対する是非のみならず他人指向型への是非から捉える作業によって加藤の立ち位置を明確に炙り出すことを目指す。実感論争は加藤の『中間文化論』に関係しており、『中間文化論』を論じるためには、加藤の意見と実質対立する見方を先に紹介する方が良い。それは蔵原惟人と丸山眞男の文化論であり、文化が社会階層や文化資本で二分されているという見方に拠っている¹⁶。

評論家であり、当時日本共産党の中央委員でもあった蔵原惟人(1947)は講談社文化と岩波文化という二つの読書文化の対比を論じた。前者は「大衆の卑俗な封建的文化」であり後者は「知識層の高踏的な自由主義文化」であるとし、両者は分断されていたために、岩波文化は戦時中大衆に対して力を発揮できずに軍国主義の台頭を阻止できなかったとした。

この図式は遠山茂樹らの『昭和史』(1955)などに受け継がれており、基本的には二項対立として当時の読者は受容した。この図式は単純すぎるものであったが(村上 2013)、岩波文化側たる知識人・読書人は己の無力さを反省しつつ(堀口 2008)、講談社文化側たる大衆に対して優越感を抱くことが出来たため定着した。丸山をはじめとする岩波文化をけん引する進歩派に属する学者でも、「昭和史論争」の際は、『昭和史』の岩波文化対講談社文化や共産党対天皇制下の支配層という単純明快な構図を、国民の戦争責任の免責につながると批判している(佐藤 2013)者もいるが、丸山が批判したわかりやすい「講談社文化的」要素は丸山眞男「日本ファシズムの思想と運動」(1964)のインテリ・亜インテリ論にも存在している¹⁷。丸山は下級官吏や小学校教員などの地元小権力者たちを亜インテリと名付けて軍国主義に協力したと批判するが、亜インテリ≒講談社文化側という図式になっているように、丸山の中で「講談社文化的なもの」を批判するという要素の排除は不徹底に終わっている。

さらに丸山(1961)は1957年の『岩波講座 現代思想 5 現代日本の思想』に「日本の思想」を執筆した。ここで丸山が作った図式である理論信仰と実感信仰という言葉をきっかけに、論壇上では「実感論争」が巻き起こることとなる(飛矢崎 2016)。丸山は理論信仰を

¹⁶ もう少し精緻化すればブルデューの文化資本論と接続できる内容と言える。

¹⁷ 実際、丸山は講座派の歴史観に影響を受けている(苅部 2006:66-70p)。さらに丸山は遠山及び同様に講座派歴史学の立場である服部之総と共に『尊攘思想と絶対主義』を1948年に執筆している他、『昭和史』の遠山との共著者である今井清一は丸山の講義を受けた経験があるなど、丸山と講座派の距離は近いところにある。

体系的・概念的・抽象的な理論がかえって物神化することで抽象化プロセスではなく結果が信仰されてしまうことと定義し、実感信仰を小林秀雄の文章に典型的に見られるような文学的な感情に基づく、規範への嫌悪であると定義した。インテリ・亜インテリ論と同様、丸山が二項対立的な考えを完全には排除しておらず、批判の対象としての単純な「講談社文化（批判）的」要素という考えを保持したことがここでも示されている。

一方加藤秀俊は『中間文化論』で、戦後直後に流行した高級文化と、逆コース期に流行した低級文化の折衷としての、中間文化が1957年当時には覆っていることを論じながら、知識人と大衆の分断ではなく連続を指摘した。加藤はマス・コミュニケーションの発達により文化差がなくなっており、高低両極端のひょうたん型から、中間が膨らんだちょうちん型へ移行していると分析した。講談社文化と岩波文化を対立的に読んだ蔵原や、蔵原を批判しつつも中途半端に終わった丸山のインテリ・亜インテリ論と異なり、加藤は高低両文化の融合が進んでいると考えた。

中間文化は大衆の常識主義に担われているとする。中間文化を担う中心は大卒のサラリーマンであると見た加藤は、彼らが外国語文献を読みこなすようなエリートとして育ったものの、結局一人の労働者になっていくことの意味を見出すことをした。中間文化は高級文化にシンパシーを持ち大衆文化を低く見るような人物が支えることとなるが、中間文化の大衆文化的要素を卑下せず誇りを持つべきであると加藤は主張する。その上で、エーリッヒ・フロム (Erich Seligmann Fromm) の『自由からの逃走』で描かれるような、ファシズム¹⁸に転がることのない健全な中間層創出の方向に中間文化を発達させるべきであり、そのためには異なる実感をお互いぶつけ合うことで健全さを担保する必要があると論じた。

加藤の論は戦後日本社会が大衆社会化しているという状況認識のもと、大衆社会化して

¹⁸ ジョヴァンニ・サルトーリ (Giovanni Sartori) (2009)は政党システムを区分し、一党制及び他党が存在していてもそれは強力な政党の衛星政党でしかないヘゲモニー政党制の二つを非民主主義的なものとしている。戦前の日本は政党が解散し大政翼賛会になり、東條内閣のもとで翼賛選挙が行われてもナチス党やファシスト党、ソ連共産党のような形で機能せず (伊藤 2015)、東條内閣時であっても非翼賛議員が多数誕生し議会で東條内閣批判が行われるなど、議会そのものは機能していた。さらに、陸軍は海軍や議会、宮中など様々な機関と比べて著しく強い力を持っていたわけではなく、陸軍内部でさえ皇道派と統制派が争い、首相の在任年数は極めて短く何度も交代した。そのため、より正確には当時の軍国主義化していた日本の政治体制は一党独裁制や全体主義・ファシズムとは言えない (佐藤・五味・高埜・鳥海編 2017)が、ファシズムを目指そうとした近衛新体制運動や陸軍皇道派・統制派がファシズムへの到達という点では明治憲法が政治システム上分権を強要するために未完に終わりつつ (片山 2012) も、一定以上程度の影響力を持ったことから大正期よりも非民主主義的なものではあるので、権威主義体制 (リンス 1995) といえる。よって、丸山であれ加藤であれ江藤であれ、戦前から戦時中の日本の軍国主義はファシズム・全体主義であるという共通理解があるが、現代の政治学・歴史学の標準見解では誤りである。リンスによる権威主義体制論や伊藤隆によるファシズム論争などは後年の話である。とはいえ、当時の空気感覚を優先して本文では戦前日本の軍国主義をファシズムとして論者たちが扱っていることに対して特に留保をつけずに扱っていく。

いることを肯定すべきであり、そのことでかえって社会が健全になるという思想に基づいている。その意味で『中間文化論』は実感を肯定する立場から実感と理論の融合を推進していると言えよう。

とはいえ加藤同様に丸山も理論信仰と実感信仰の両方を批判しながら持論を展開する際に、理論と実感そのものは必要なものと見なした。その際に、理論と実感の相互媒介の必要性を示している。「日本の思想」論文をきっかけに始まった実感論争では、「実感」という語が丸山の定義を離れて論者たちの間で単純化していった。丸山は「その直接の反響が、ほとんど「理論信仰」と「実感信仰」の対比という問題にだけ集中したのは、正直言って予想外であり」¹⁹、極端な場合は理論を信ずることが理論信仰、実感を信ずることが実感信仰と通俗化されたと説明している。

3.2 江藤・加藤論争

丸山の論をきっかけに実感論争が起こり、多くの広義のメディア知識人が論争に参戦した。その流れの中で、文芸評論家として『三田文学』にて『夏目漱石論』でデビューしていた当時慶應義塾大学の大学院生であった江藤淳(1957)は、加藤秀俊の『中間文化論』と後藤宏行の『陥没の世代』、さらに梅棹忠夫を実感主義であるとひとくくりにして批判した。三者が主張している内容は完全に一致しているわけではないが、江藤の視点からすれば三者とも、丸山の言う理論信仰と実感信仰で言えば後者寄りの、民衆実感を重視するものに見えたことで実感主義と名付けられた。奇しくも三人とも、「思想の科学」のメンバーであるものの、2章でも述べたように出身大学は異なる。

江藤は後藤の世代論の区分を概ねそのまま受け取る。戦争時の年代を目安に、世代を戦前派・戦中派・戦後派と大まかに分ける。江藤は概ね、戦中派を終戦時に多感な若者であった1920年代生まれであると考えている。戦中派は真剣に戦争を支持し同世代の人間が多数前線で戦い亡くなった、あるいは自身も従軍した経験を持つため、強く裏切られた感情から戦争を心の底から後悔している人が多いと江藤は分析する。例えば藤田省三は1927年生まれで戦時中は陸軍士官学校に在籍しており戦中派の典型である。

さらに江藤によればリベラルな大正デモクラシー時代を経験している戦前派と同様に、1930年生まれの加藤のように明るい戦後を謳歌する戦後派も現状維持派・昔は良かった派であり、彼らと戦前派との共通意識を実感であると見なす。藤田と加藤とは三歳差であり、加藤も仙台陸軍幼年学校に在籍しているなど終戦時の学校キャリア路線も近いものであることや、戦前派に該当する丸山なども反戦派であること、さらには戦中派世代の梅棹が実感主義であることや江藤は加藤よりもさらに二歳若いことを踏まえると、江藤の世代論は雑な印象を受ける。

¹⁹ 丸山(1961)より、192p.のあとがきからの引用。

しかし、戦中派が最も濃密な戦争体験をしたという江藤の指摘は正しい。それに対して戦後派はムードに基づきあるがままに受け取る受け身の姿勢であり、「奴隷の思想」であると江藤は解釈する。江藤は実感の問題点を具体的な行動への意志と未知なるものに対するおそれあるいは想像力の欠如、および、未知なるものに対するおそれと想像力の両方の欠如であるとした。

その上で江藤は加藤らの実感主義を、実感の合理性を過信するものと指摘し、「近代の超克」やファシズムといった戦時中のムードをも肯定しうる危険性²⁰があるとした。江藤の論は、実感と理論の橋渡しが重要であるとする点では一致する加藤と丸山とは異なり、実感全否定論である。江藤にとっての実感論とは、その場のムードを肯定しうると評価しているように、言い換えれば山本七平の言うところの空気に流されることを肯定²¹する、という極めて単純化された、悪く言えば思い込みに基づいたものであった。

それに対して加藤は江藤が加藤に貼った実感主義者という名称を受け入れた上で、江藤への反論を行った。加藤は思想の人的基礎が実感であること、思想と実感が切れてしまっていることが問題であること、各人の共通感覚は各人の実感をぶつけ合いながら繋げるべきという、昨今ハーバーマス(1994)が唱えた熟議デモクラシーに繋がる考え方を披露した上で江藤を論駁している。最初に認識は実感から始まって、徐々に現実にぶつけていって修正・共有していくという加藤の実感認識は社会学・心理学的通説²²に従ったものであり、空気に流されることを肯定するという江藤が危惧した意味では決してない。思い込み

²⁰ 後藤宏行は思想の科学研究会編『共同研究「転向」中編』(1960)で、田辺元や柳田謙十郎のように、通説として戦時中に軍国主義側であったと思われる京都学派の哲学者を分析している。その際に柳田が戦後再転向し武装路線の共産主義の立場を採用したことに触れて、思想内容が変わっただけで過激な点では変わってないことを批判している。その点では、後藤を批判した江藤の主張とは異なり、後藤は左右どちらの極論も排していたという点でファシズムには程遠かったと言える。なお、田辺は戦時中の段階で『懺悔道としての哲学』の内容を構想していたように、どこまで軍国主義の政府に依っていたのかという観点では尚論争がある。

²¹ 江藤の文章は空気を分析対象として扱っておらず直観的な文芸評論として書いたものであり、後に山本が空気論を執筆する1977年よりも20年も前の段階であることも踏まえれば、江藤と山本の問題意識はある程度重なっていても、それはある程度でしかない。江藤は戦前派と戦後派を実感論とまとめて批判することを主題としており、実感論が空気に流されることを自明とする条件設定を行っている。そうした条件設定は山本にはなく、ある空気を破壊するために「水を差す」ことは有効であるとしつつ、結局その水が別の空気になっていくという「全ては何かしらの空気である」という徹底的な立場に立っている。山本の立場に立てば、江藤の反実感論も空気を作って煽ることであり、同じ次元での争いであるということになる。山本的な分析はマルクスのイデオロギー批判に対してカール・マンハイム(Karl Mannheim)がマルクス主義「も」イデオロギーだと批判した構造と同じであり、基本的には正しいと筆者は考えている。

²² この発想の近代における源流はアダム・スミス『道徳感情論』やウィリアム・ジェームズ『宗教的経験の諸相』などが該当する。何れも経験論・プラグマティズムの系譜に位置する。

の激しい江藤は自己認識を修正することではなく、加藤は江藤の思い込みに苦勞することになる。

江藤(1958)は加藤の反論に対して反論を加え、加藤(1958)も新聞で以下のように再度江藤に対して批判を行った。江藤を思い込みの激しい人物である旨であることを非難する内容も含まれており、加藤は江藤に対して相当に怒っていることがわかる。

江藤氏のような紳士をやくざにたとえるのは恐縮だが、本紙四月二十一日号の「加藤秀俊の実感主義」に関するかぎりは、「それが合わねえ」といった理由で挑戦されているとしか思えなかった。

(中略)

江藤式フィルターはかくのごとく屈折率の高いシロモノであるから本当なら何も口答えしないほうが賢明なのかもしれない。何を言っても、こう歪みの強い解釈をうけるのでは、生産的な論争になりそうもないからである。”(中略)

“実感がセルフ・コミュニケーションの通路として自己完結的な様相を示すようになったら、何にもならない(たとえば俳句、日記、ひとりごと)。そこで個人の実感は集団のなかでぶつかり合うことが必要になってくる。サークルの意味は、まさにここにあるのだ。江藤氏は「色合いのちがった思想や実感がぶつかり合い、しかもケンカにならない」状態を私がうんぬんしたのを「ほどよく酒をのんで社交的な会話」のなかでしかその状態は生み出せない、と言う。果たしてそうか。私の考えでは、そもそも民主主義というものはそういうルールのうえにのっかっているのである。(中略)腹が減っては民主的な人間交渉ができない、そこではケンカあるのみ、というのが江藤氏の「実感」なら、かれは民主主義のイロハを拒否していることになろう。

加藤は「江藤式フィルター」による解釈を問題視した上で、意味論における混乱を防ぐ必要性を痛感した。そのため加藤は実感の意味を予め加藤の側が分節化しつつ定義するという方法・戦略を採用した。

一つ目は「科学の対象」たる実感である。二つ目は「思索の方法」たる実感である。三つめは「組織の方法」たる実感である。第一の意味は人間の非合理的な面の心理的分析と加藤が説明しているように心理学的な認知論である。第二の意味は加藤が個人的経験から思想のレベルに高めて他人の実感とぶつけあう民主主義の基本となることを説明しているようにジョン・デューイ(John Dewey)流のプラグマティックな文脈での実感である。第三の意味は加藤が体制変革の原理を民衆の実感と合わせていくことで確実に改革を行う原理と説明している通り、経営学的なマネジメント論・モチベーション論的な文脈での実感に該当する。江藤は第二の意味でのみ実感を捉えた。それを踏まえた上で江藤の言うような、実感とはファシズムと同じであるという図式に、加藤は以下のように反論している。

加藤によれば民主主義とは、プラグマティストであるデューイ流の経験教育的な、実感

をぶつけ合って調整していく民主主義である。確かにケンカあるのみという民主主義は、カール・シュミット (Carl Schmitt) (1970)の友敵理論を筆頭に存在するものであるので、加藤の批判は正確には間違っている。

しかし、シュミットがファシズムを肯定的に捉えていることや当時ファシズムと民主主義が対立的に捉えられていたことを勘案すれば、(民主主義内部の論争の中で) 江藤こそがファシストであるという批判の意味でならば加藤の反論は通用する。

3.3 座談会 「実感」 をどう発展させるか

その後中央公論誌上で加藤と江藤は直接論争する機会を得た。丸山のゼミに参加し『日本浪漫派批判序説』をまとめるなど政治思想を専門とする当時明治大講師であった橋川文三を司会に、座談会²³が組まれたからである。他に橋川と同様に当時明治大講師であるマルクス主義の政治学者田口富久治と、当時『飼育』で芥川賞を受賞したばかりであった小説家大江健三郎が参加した(橋川ほか 1958)。橋川と田口は東大法学部、大江は東大文学部を卒業している。非東大卒は慶應文学部卒の江藤、一橋卒の加藤であった。竹内の理論通りならば江藤は実感に好意的であると予想できるが、そうではないことは既に述べた。では、橋川・田口・大江はどうか。

加藤は実感について最初に意味を分けて細かく整理した。江藤への再反論で用いた戦術をここでも用いる形で、江藤が意味論的に混乱することを事前に防ぐことを意図したものである。その際、加藤は新たに「学問のアプローチとしての実感」と「コミュニケーション(原文ママ)の方法としての実感」を加えている。前者は梅棹忠夫『文明の生態史観』のように注目すべき体験・実感をしてこにして理論構築をする、プラグマティズムの哲学者チャールズ・サンダース・パース (Charles Sanders Peirce) が概念化した思考法であるアブダクションに該当するものであり、後者は言語シンボルだけではなく視聴覚メディアなどのシンボルを扱うというコミュニケーション論に該当するものである。

しかし、江藤は加藤の議論を「危機的状況」に対応できないと批判した。「危機的状況」が何なのか、江藤は明示しなかったが、加藤とのそれまでの論争を加味するとファシズムの危機だと思われる。江藤は丸山同様に、丸山の言う実感信仰をファシズムに結びつくものであると考えている。

さらに、大江も表現者としては実感を即座に捨て去るべきとの主張を行って、江藤と同じ立場を取った。江藤と大江は実感を捨てて主体を確立すべきであるという立場を取って

²³ 座談会をどのような経緯でセッティングしたのかは不明である。この座談会の少し前の号の江藤の加藤批判が『中央公論』における江藤の初論考であること、CiNiiで検索した限り、1958年以前の段階で加藤以外『中央公論』ではそれまで執筆していなかったことを勘案すると、江藤と加藤の論争に発展したことで中公内の編集者が動いたことによって実現したと推測できる。

おり²⁴、実感は教育で指導できず、さらには理論と繋げることもできないとし、実感によるコミュニケーションについて加藤が楽観視しすぎていることを指摘している。

橋川は司会であるため発言が少ないが、発言している箇所では加藤を支持した。橋川は最後に「今日の話で面白いのは、社会科学者の側が実感擁護の立場にまわり、文学者の側がそれを否定するといった結果になった」点にあるとまとめている。丸山の理論信仰・実感信仰論では、理論信仰の典型はマルクス主義＝（当時の文脈での）社会科学であり、逆に実感信仰の典型は橋川も後の真正面から批判を試みた日本浪漫派＝文学であるはずであった。橋川は、この座談会では丸山の想定していた事例と真逆であることを指摘しながら、加藤の挙げた組織の方法としての実感を重視することに親和的な姿勢を見せた。橋川も東大出身でしかも丸山の弟子でもあるが加藤の側に立つという点で、竹内の想定する図式では説明できない。

実際、政治学者の田口はマルクス主義者であり、東大出身かつ丸山の授業を受けた経験があるなど、竹内の図式で言えば加藤とは対比的なポジションにいるはずだが、橋川の指摘通りかなりの部分で加藤に同調した。しかしほぼ加藤に同調した田口が、唯一同調できなかったのが他人指向型への態度である。他人指向型とは、加藤が京大助手に着任した後にハーバード大及びシカゴ大に特別研究員となった際に加藤を指導した、社会学者デイビッド・リースマン（David Riesman）（1909～2002）が提唱した概念である。

3.4 リースマンの類型論

リースマン『孤独な群衆』（2013）では類型として伝統指向型・内部指向型・他人指向型が出てくる。伝統指向型とは、伝統や慣習に従うタイプの大衆²⁵であり、前近代社会によく見られる。内部指向型とは、己に埋め込まれた信念に従うタイプの大衆であり、マックス・ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』に出てくるような勤勉でストイックな大衆を想定している。他人指向型とは、他人の動き方に合わせてそれに従うタイプの大衆であり、リースマンは当時のアメリカの上・中流階級に見るようになってきたものであるとした。

政治学者の加藤秀次郎（2008）は、リースマンの類型論が誤解されやすいことを以下のよう

日本ではどうしても、内部志向型（原文ママ）を自立的だとして良くとらえ、他人志向型（原文ママ）を同調的だということで悪くとらえるきらいがあるようである。そして

²⁴ その割に、江藤と大江の批判の仕方は思い込みに基づく極めて感情的なものであり、実感に囚われたものになっている。この点は重要なので、第六章で再び触れる。

²⁵ リースマンは群集を人々の意味で用いており、大衆ともほぼ同じ意味である。

大衆社会に顕著な過剰同調を克服する手掛かりとして、自己の自主性を保つように行動する内部志向(原文ママ)型の期待をかける、というのがパターンとなっている。(p. 231)

リースマンは『孤独な群衆』(2013)の日本版前書きで以下のように同じことを指摘している。

多くの日本の学者や批評家たちが日本人を「他人指向的」だとして批判的に語っているのを耳にした。

(中略)

他人指向的であり、状況的である、というのは、狂信的で排外的で、他人のことをいっこう気かけない態度を日本人がすでに克服したということにほかならないのではないか。(中略) 柔軟さそれじしんは悪徳ではないのである。(p. 4)

リースマンの弟子として『孤独な群衆』の翻訳を行った加藤秀俊も1964年版のあとがき(リースマン 2013)で以下のように書いている。

しかし、読者たちの多くは、「内部指向型」のほうが「他人指向型」よりもいいという読み方をした。いわば十九世紀讃歌である。じっさい、日本でも、多くの社会学者や文芸評論家までが、たとえば「内幕情報屋」をひきあいに出して「他人指向型」を慨嘆したりするふうがさかんなのだ。

(中略)

「他人指向型」の柔和さは、それじたいこんごの世界のなかでひとつのプラスの徳目として展開しうるものだし、逆に、「内部指向」のひとつの表現形態としての独善的ながむしやら個人主義(rugged individualism)には、マイナスの点をこそつけるべきであろう。(p. 262-263)

以上をまとめると、日米の知識人には内部指向型が理想で他人指向型を批判することが多いとリースマンと加藤は嘆いている。リースマンと加藤は、内部指向型の良い点は自律的であること、悪い点は独善的で他人を気にしないことであると考えている。逆に他人指向型の良い点は柔軟であることであり、悪い点は同調的で自主性に欠けることであると考えている。その上で、リースマンと加藤は現代社会においては他人指向型こそがふさわしいと考えている。

政治学者の加藤秀次郎(2008)はリースマンの類型論がさらに三つの「適応型」「アノミー型」「自律型」に分けられ、その結果合計 3×3 で全部で九つのタイプに分けられるとした。

「適応型」は、彼が三つの志向型として描いたものの典型的なタイプである。つまり、①前近代社会にあって、伝統に適応していく伝統志向型、②近代社会にあって、幼少年期に植え付けられた内面的価値観に適応していく内部志向型、③現代社会にあって他者に合わせていく他人指向型がそれである。しかし、前近代、近代、現代の、それぞれの社会にあって、同調能力を欠き、適応に失敗している人々もいるのであり、それが「アノミー型」（「不適応型」）である。これに対して、同調の能力はあるが、同調するか否かを自由に選択しうる主体性をもつタイプもあり、これが「自律型」である。（p. 231）

以上を図示すると以下の表5のようなマトリクスになる。

表5：リースマン類型の整理

	伝統指向	内部指向	他人指向
適応型			
アノミー型			
自律型			

加藤秀次郎による「適応型」「アノミー型」「自律型」という分け方はリースマンの本から取った用語に由来しているが、リースマンや加藤秀俊はこのような明確な形で類型化をしているわけではない。しかし、大まかに言ってリースマンと加藤秀俊が概ね自律型の他人指向型を評価していることはわかる。リースマンは『孤独な群衆』の第十二章以降で自律型を如何に増やすかを論じ、結論となる第十六章のまとめで以下のように書いている。

“もしも、他人指向的な人間がじぶんがいかに不必要な仕事をしているか、そして、じぶんじしんの考えだの、生活だのというのがそれじしん他人たちのそれとおなじようにじつに興味深いものであるということを見出すならば、かれらはもはや群衆のなかの孤独を仲間集団に頼らないですむようになるであろう。人間はそれぞれの個人の内部に汲めどもつきない可能性をもっているのだ。そのような状態になったとき、人間はじぶんじしんの実感だの、抱負だのにより多くの関心をはらうようになるにちがいない。（中略）

自然の恵みと人間の能力には無限の可能性があり、人間の能力はそれぞれの人間の経験をじぶんじしんの力によって評価できるだけのものをもっているということである。したがって、人間はかならずしも適応型にならないでもすむし、また適応に失敗しないでもすむし、アノミー型にならないでもすむのである。”（p. 246-247）

加藤も先の座談会では、他人指向型の長所についてリースマンと同様に自由なコミュニケーション関係を他人と持ち、サークルを気軽に作って表現活動を共同で行えることであると指摘している。田口はこれに対して、マスコミにのらない場合は、日本人は日記のような「自己指向メディアで表現」するしかないと反論した。田口は日本人が自由意志を持つ場合は専ら内向的な行為に向くものであり、外で社交する形の外向的な行為を想定していなかったこととなる。それに対して加藤は、集団の中での活動をしていく中で他人とは異なる自主性を鍛えるべきであると反論した。田口は座談会の際に多くの論点で加藤に同調したが、唯一他人指向型への評価では意見を異にした。それは、あるべき大衆の理想像の違いが背景にある。

3.5 類型論への態度から見る大衆社会への見方

リースマンと加藤は、他人指向型に対しても肯定的に評価する珍しい立場であった。個人の主体を評価し、それが出来ない大衆を啓蒙する必要性を主張した江藤や大江だけでなく、大衆社会の良い点も見た上で実感を高く評価した田口も他人指向型の方を評価しなかった。1958年は戦争が終わってから13年目であり、社会の大衆化・情報化という側面よりも近代化の不足こそ大きな問題と思われており、丸山などは日本社会の近代化不足という論を採用した。丸山門下である松下圭一（1929～2015）は師匠である丸山とはここでは違う立場を採用（松下1994）した。すなわち、大衆社会論を唱え大衆社会論争が起こるが、松下のもとには反論が相次いだように、当時は大衆化を指摘しながら肯定的に扱う論考に対して拒否感が強かった。

その意味で、当時後藤や江藤が論じた世代論は社会に対する認識と概ね相関する。戦中派は、太平洋戦争が始まった1941年から終戦の1945年までの間に青年時代を送った世代であり、その前後を更に戦前派と戦後派に分ける。安倍能成や和辻哲郎など明治生まれのオールド・リベラリストと丸山ら大正初め前後に生まれた世代は戦前派に該当し、軍国主義に世論が迎合しきる前の大正デモクラシー的な風潮を肌で知っている。戦中派は多感な時期を軍国主義の風潮の下で育ち、例えば橋川は戦時中日本浪漫派に親近感を覚え、吉本や藤田は、戦時中は素直に戦争を肯定した。戦後派はその後に生まれた加藤や石原などの世代であり、加藤は終戦時には仙台陸軍幼年学校在籍であったように、少年時代のままで戦争が終わった。この経験により戦後戦争に引きずられずに戦後の風潮にいち早く対応できた反面、戦中派より前の世代からは違和感を持たれた（久野・鶴見・藤田2010）。もっとも、世代の違いによる社会認識の違いは、当人ごとの環境や世代に対するものも含めて自己認識の違いによるものも大きい。

世代別の経験の違いが、1958年当時の社会の見方に大きく影響を与えている。戦時中の抑圧を深刻に考える丸山の世代や戦中派は共に日本の近代化不足を痛感したが、それでも各所で丸山ら戦前派と戦中派は認識に溝を生じさせている。さらにその前後のオールド・

リベラリストと加藤ら戦後派では戦時中の抑圧を直ちに近代化の不足とは直結させにくいなど、また異なる傾向にある。

そのため、各論者のリースマンの類型論への態度の根幹には大衆社会化への判断や理想とする社会への物の見方の違いが存在する。具体的には、リースマンの分類に従って「伝統社会」「近代社会」「現代社会」という社会類型があるとして、一つ目に当時をどの社会に位置すると見なしているか、二つ目にそもそも理想としての社会がどれであると考えているかという論点がある²⁶。

実感論争の際に、丸山や江藤は当時の日本社会を近代化が不足する前近代的な社会であると考えており、田口と加藤はそれに対して大衆社会化＝現代社会化が到来していると考えた。しかし田口は、大衆は理想的には近代社会における内部指向型的に動くことを望んでおり、他人指向型を評価する加藤とこの点で対立した。内部指向型の大衆を良いと見なす意味では田口は丸山や江藤と同じ立場であった。

佐藤卓己(2013)は大衆社会論について、大衆社会とファシズムという観点でのみ語る左派の側の限界点を指摘している。佐藤がここで取り上げている松下圭一はマルクス主義的に大衆社会論を受容し、スターリン批判を踏まえて共産党などのエリートによる教条主義を批判しながら大衆社会の中に生きる市民の立場からの革命という立場を模索した。ソ連が崩壊した現在から読むと、革命が良いことであることを自明としているなど、歴史的な側面を持つ文章であるが、その松下の大衆社会論を前提とする議論でさえ当時は既存のマルクス主義者からは反発された。

実感論争中に加藤の『中間文化論』を日本の現実とずれていると批判した日高六郎(1958)も、社会学者として大衆社会論を紹介しながら、松下同様に大衆社会論を巡ってはマルクス主義を公式的に採用する立場からは距離をとった。日高は細かく分派するマルクス主義諸派の対立を調停しまとめることが多かったという²⁷。日高は加藤がリースマンと共に依拠するフロムの翻訳者であり、フロムも大衆社会論的な議論を展開している人物である。

以上のことを考慮すると、松下や日高、田口に代表される、大衆社会論と革新を両立させる市民派は広くくれば典型的な革新側であるが、共産党の知識人の権威が強い時代においては革新派内の傍流でしかなかった。共産党はマルクス主義の歴史観の中でも主流を占めており、講座派の歴史認識は丸山をはじめ非マルクス主義者の歴史観にも大きな影響

²⁶ 戦前日本が封建的か否かという問題意識は、そのまま戦前日本は大衆社会であったかという問題意識と重なる。大衆社会＝封建的ではないという図式がウィリアム・アラン・コーンハウザー (William Alan Kornhauser) によって唱えられおり、最近の大正史研究のまとめである筒井編(2021)でもそのような見方が支持されつつあるが、江藤のような「封建的かつ大衆社会」でもあるという講座派的な見方も存在する。

²⁷ 日高六郎, 杉山光信編. 日高六郎セレクション. 岩波書店, 2011, 353p. の杉山光信による解説より。

を与えたが、そうした講座派に反する見解を持っている人物もいた。

マルクス主義歴史学において、封建貴族が支配者である封建社会がブルジョワ革命によりブルジョワが支配者である近代市民社会となり、近代市民社会がプロレタリア革命により社会主義に至るという図式が存在する。マルクス主義歴史学の中でも講座派は日本の社会は明治維新によっても封建社会を脱していないと解釈し、未だにブルジョワによる近代市民社会は来ていないと現状を見る。そのため、プロレタリア革命の前にブルジョワ革命が必要であるという政治的な立場を採用する。

他方、日本のマルクス主義者の中での講座派のライバルである労農派は、明治維新は近代ブルジョワ革命であると解釈し、日本の現状はすでに近代社会であると考え、プロレタリア革命の一步手前の状態であると診断する。現代から考えれば労農派の明治維新＝近代化説の方がより妥当な考えであると思われるが、当時は少数派であった。松下や日高、田口²⁸は大衆社会論を受容するという点において日本が近代社会であるか否かを巡る論点では事実上労農派に近い考えであった。

しかし一方で革新側であるということは、最終目的としての革命²⁹という主題が大きかった。そのため市民派の観点からは、大衆社会化・情報社会化の大きな要素である娯楽面などについて、革命から遠ざける邪魔な要素と見てしまうか、革命の手段としての娯楽・芸術という考えに行き着きやすい。そうなれば、大衆社会化という現状を踏まえてどう革命をするかという観点が中心にならざるを得ない。松下は後に革新自治体が出現するとこれを支持し、日高も「世俗を満喫する日本の大衆」という加藤の見方を批判した上で、反戦平和運動を盛り立てた。松下は地方自治で、日高は反戦平和運動でという形で暴力革命に拠らない方法を採用したが、体制の変革を手段としてではなく目的とする点では変わらない。大衆社会論を前提にしながら、松下・日高は体制変革を無条件に正しいものだと考えていた。

体制改革に対して無条件に価値判断を下さず、手段として考えている加藤は現実観察という観点では強みがあった。体制変革の良し悪しはア・プリオリに決まっているわけではなく。具体的に現実を観察するというプラグマティックな発想こそ、大衆社会化・情報社会化の観察をより良くするものと加藤は考えた。三木武夫内閣の文部大臣となった教育社会学者永井道雄³⁰のもとで開かれた文明問題懇談会に加藤も参加したが、その時に応対し

²⁸ 田口はこの時共産党員であったが、加藤・江藤の参加した座談会では実質加藤の味方側だったという点では、労農派寄りの見方を披露したこととなる。後に田口(2005)は共産党を離党し丸山の市民社会派左派の立場を評価するようになったので、そのさきがけと見ることも可能である。もっとも、丸山は実感論においてはやや加藤とズレた立場と考えられるので、あくまで丸山系でも松下と同じあたりに行きついたらと解釈するのが妥当であろう。

²⁹ 革命のやり方として暴力革命を採用するか否かで大きく立場が異なる上に、日本共産党のように時期によって変動する場合もある。

³⁰ 永井が嶋中と共に鶴見の東京高等師範学校附属(現筑波大附属)中学時代の友人で、永

た天城勳や木田宏などの文部官僚に対して好意的な印象を持っている。体制変革を志すにしても、虚心坦懐に物事を見極め続けることが不可欠である、と加藤は考えている。加藤は中公新書刊行の言葉を中公の編集者であった宮脇俊三の依頼で書いた。この「刊行のことば」については、次章第4章で詳述するが、この「刊行のことば」執筆当時を振り返って、中央公論新社が2012年に非売品として全国の書店で配布した総目録(中央公論新社2012)の中でこう書いている。

だが、その位置づけをどうするかはなかなか尋常ではない。中央公論社が「新書」と名乗るにあたってはそれに先行して確乎たる地位を確立していた「岩波新書」を意識せざるをえないからである。あきらかに後発である。いったい、どこで岩波との「種差」をつけるか、が大問題であった。いったい、どこに「中公新書」の特徴をだしていったらいいのか。そのことを宮脇さんとわたしはあれこれと語りあった。そして意見が一致したのは「観念論」を排除することであった。

ドイツ観念論は大正教養主義の中で、修養主義と結びつきながら、旧制高校や帝国大学を中心に日本のエリートの基礎教養として君臨した(筒井 2009)³¹。ゲオルグ・ヴィルヘルム・フリードリッヒ・ヘーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel) の弁証法は抽象的であり、絶対精神に向かう歴史である。ヘーゲルに代表されるドイツ観念論への批判として描いたカール・マルクス (Karl Marx) の唯物論的弁証法も、結局は共産主義革命に向かう必然の歴史を抽象的に語ったものである。また、マルクスの後継者たちは正統派から見て修正主義的な分派を除き、マルクス同様に現実を分析して理論を何度も作り直すよりは、マルクスの枠組みに現実を当てはめる演繹的な思考を好んだ。戦前から戦後しばらくの間、普遍的思考が信じられていたので、「普遍・一般や普遍・一般として認められる法則から具体例全てを説明する」という意味での演繹的思考法が観念論と呼称されて日本では受容された。その典型例としてドイツ思想が強い影響力を持った。

マルクス主義は、ヘーゲルのドイツ観念論をベースにアダム・スミス (Adam Smith) らの古典派経済学やクロード・アンリ・ド・サン＝シモン (Claude Henri de Rouvroy de Saint-Simon) などのそれまでの社会主義を統合させた教養として受容された(筒井 2009)。経験よりも理屈を重視する朱子学が江戸時代に主流の学問としてエリートに根付いている伝統と、ドイツ観念論との親和性は高い(古田 2014)。旧制第一高校の校長を務めた新渡戸稲造は英米的な教育を受けた人物だが、新渡戸の教養主義は皮肉にもドイツ思想の受容の中で社会に影響を与えた。これらア・プリオリな議論は観念的であり、こうしてマルクス

井と鶴見は共に著名政治家の息子で、嶋中も永井も中学同窓の縁で思想の科学研究会のメンバーでもあった。

³¹ もちろん、大正～昭和戦前期も新渡戸稲造など英米思想の影響は傍流ながら一定の存在感を示している。

主義は観念論を批判しながらも、経験よりも演繹的に図式を重視するという点で、広い意味での観念論の枠内に収まったと評しうる。例えば、竹山道雄は戦時中の軍国主義と戦後のマルクス主義を共にリベラリズムの立場から批判した人物であるが、『昭和の精神史』（1958=2011）では以下のようにマルクス主義の演繹的方法論を批判している。

歴史を解釈するとき、まずある前提となる原理をたてて、そこから下へ下へと具体的現象の説明に及ぶ行き方は、あやまりである。歴史を、ある先験的な原理の図式的な展開として、論理の操作によってひろげてゆくことはできない。このような「上からの演繹」は、かならずまちがった結論へと導く。事実につきあたるとそれを歪めてしまう。事実をこの図式に合致したものとして理解すべく、都合のいいもののみをとりあげて都合のわるいものは棄てる。そして、「かくあるはずである。故に、かくある。もしそうでない事実があるなら、それは非科学的であるから、事実の方がまちがっている」という。

「上からの演繹」は、歴史をその根本の発生因と想定されたものにしたがって体制化すべく、さまざまな論理を縦横に駆使する。そして、かくして成立した歴史像をその論理の権威故に正しい、とする。しかし、そこに用いられている論理は、多くの場合にはなはずさんなものである。(6-7p)

(中略)

性急な一元的説明への要求が、ことに前世期以来、圧倒的な印象をあたえてきた自然科学的方法への眩惑が、ドグマ的先入観に変形して、このような結果を生んだ。

「上からの演繹」は、前世紀には自明の立証方法として、あまねく行われた。ヘーゲルやニーチェやダーウィンの亜流やヘッケルや、今世紀になってからのフロイドなどは、みなこれをした。(25p)

実際、藤田省三はその典型であると解釈可能である。秀才的で文献学的な教養主義の一環としてマルクス主義を扱うという藤田の姿勢は、筒井の指摘する論点と重なる。この藤田の方法論に対する丸山の枠組みで言う理論信仰的な姿勢は松井・中尾(2020)がいうところのメソッドマン、すなわち「一つの人工的に作られた方法論・知識体系・価値体系(=method)を内面化した存在」とであると評価することが出来る。この論点は後の章でもたびたび触れる。

加藤が挙げた観念論の対義語は経験論であるが、経験論の流れの中にプラグマティズムが位置付けられる。加藤は宮本常一の民俗学や今西錦司の生態学を、本稿4章で主題とする、「刊行のことば」の中で挙げるが、宮本や今西の方法論は観念論の真逆であり徹底的な現実の観察を基に研究を積み上げるスタイルである。そして加藤も、広い意味でプラグマティズム側にいることを中公新書「刊行のことば」で宣言している。

加藤自身、リースマンがシカゴ学派社会学の末裔なので自らをシカゴ学派社会学の影響を受けたと自認している。シカゴ学派の社会学はジョン・デューイらのプラグマティズム

をベースに、フィールドワークで都市のスラムなどを精緻に描写するモノグラフを蓄積し発達させた(矢澤 1984)。彼らの社会学は、ハインリッヒ・ヨーン・リッケルト (Heinrich John Rickert) など新カント派の影響を受けたウェーバー³²などのドイツ社会学とは違い、プラグマティズムが色濃く出た。さらに、加藤は大学時代南博のもとでフィールドワークを実践し、思想の科学研究会や京大人文研ではクワインの弟子でもある鶴見俊輔や梅棹忠夫らプラグマティズムを重視する学者と親しく接した。梅棹の『アマチュア思想家宣言』は理論信仰的なアカデミズム批判を行った文章であり、加藤は中央公論社で出版された梅棹の著作集の解説や、同じく中央公論社で出版された加藤自身の自叙伝の中でもこれを高く評価している。

高度経済成長や大衆文化の発達というゆるぎない現実を、経験を重視したプラグマティズムの立場から正確に観察し記録するという加藤の立場は、民俗学や新京都学派など少数のグループのものであり、1958年の段階では斬新であった。世俗を楽しむ日本の大衆を好意的に見る加藤の議論は師の南や鶴見ら³³と共通するものであった。南と鶴見は左派に属し加藤や梅棹よりも岩波での執筆が多い学者であったが、具体的な事象としての大衆文化を吟味した上で、ア・プリオリな判断をしないスタイルであったという点で加藤や梅棹と共通していた。南は加藤・梅棹同様に「思想の科学」でも活躍し、また民科のメンバーでもあったし、鶴見は「思想の科学」の主宰者であることを踏まえれば、南と鶴見は「思想の科学」本流～左派、より中央公論社側の加藤と梅棹は「思想の科学」右派と位置付けることができる。しかし、「思想の科学」と中公新書に共通するような世俗・娯楽こそが健全な大衆社会を作り反軍国主義の土壌になるという信念を共有しない立場からすれば、単純な現状肯定の議論に見えた。江藤や大江の反発はその一例である。

加藤の論は、高度経済成長下の日本の大衆の生活を詳しく描写し肯定的に描いたことで、現代に通じる日本の消費社会論として嚆矢としての地位を占めるに至ったと言えるのではなかろうか。梅棹の『文明の生態史観』における日本は十分に近代化しているという議論や『情報の文明学』、山崎正和『柔らかい個人主義の誕生』、村上泰亮『新中間大衆の時代』などは何れも中央公論社で出版されたものであるが、日本の経済成長で自信を取り戻した空気を前提とし、加藤の大衆社会論と共振する性質を持つ。松下や日高の「市民派」や南・鶴見の「思想の科学」本流～左派と比べると、日本の高度経済成長を謳歌する立場に依っていたため、世俗を楽しむ賢い大衆という図式自体も、バブル崩壊時までは説得力をもって語られていた³⁴。

³² リッケルトの影響は限定的で、それよりも統計的因果推論の色が濃いという主張もある(佐藤 2019)。

³³ 例えば南博(2003)はテレビなどのマスコミや風俗を扱い、鶴見俊輔は『限界芸術論』(1999)で大衆芸術、さらには漫画を論じるなど当時としては俗っぽいとされるテーマを取り扱っている。

³⁴ 竹内(2014)は「加藤秀俊論」で加藤(2010)がバブル後の社会に批判的な言説をしている

3.6 実感論におけるメディア知識人の立場の決定要因と東大の機能

以上加藤や梅棹らのメディア知識人としての独自性を明示できたところで、加藤を軸としたうえで他の知識人との比較を行うことが出来る。具体的には実感論を否定するか否かで大きく分けられるが、これまで論じたように、否定論・肯定論双方で詳細に見ていくとそれぞれの論者ごとに実感の定義でも細かいところでの認識の違いが発生していることがわかる。しかも否定論・肯定論双方の内部で個人差が見られ、それらの要因は出身大学や出身地とは関係なく、竹内の図式は単純には当てはまらないとわかる。竹内の図式を理念的に言えば、東大・京大など旧帝国大卒が非実感論、一橋や私大など非旧帝国大卒は実感論的、というものであった。しかし、東大卒の後藤・田口・橋川や京大卒の梅棹は実感論を支持し、慶應大卒の江藤は反実感論を支持した。以上の事例は竹内の理念型モデルとズレが発生しているが、どのように説明すべきだろうか。

加藤の実感論は、大衆社会化している最中の社会の中での自己観察の結果であることが、前期近代化を前提としている丸山や江藤との違いという点から説明できる。前期近代化を前提とする丸山や江藤は内部指向的な個人を理想としたため、個人の修養こそが現代社会で必要と考えた。それに対して加藤とリースマンは、実感論と他人指向型を肯定する立場から、コミュニケーションを積極的に行いサークル形成することでの対処を必要と考えた。両者の中間にいる田口は対談での発言を見る限りでは、実感論に理解を示しながらも、対処の側面では近代的個人を大切にすべしという立場であり丸山・江藤の側にいたと言えよう。丸山・江藤の対処法は加藤・リースマンの立場からすれば、個人のアトム化を促す方法であり、アトム化を留める方法として加藤・リースマンの側に分があると言えよう³⁵。そして加藤の視点を磨き上げたものの中に、反修養主義的な一橋的な教養主義が入っていることが言える。

ただし、竹内の理念型でそのまま説明できる個所も存在する。東大は官僚養成所としての機能と歴史を持ち(加藤 2015)、修養主義的な価値観を植え付けることを教育目標としている。東大は幕府の御用学問である朱子学を学ぶ場所である昌平坂学問所や、海外文献の翻訳をする場所である蛮書和解御用などを源流とするため、時の為政者に仕える秀才主義的な色が強いと言える。幕末までの朱子学に変わる、戦前から戦後にかけての修養主義的

ことを挙げている。

³⁵ もっとも、加藤・リースマンの処方箋であるコミュニケーションによるサークル形成も、中井正一の「委員会」に即して目が届き個人が覚えられる範囲の人間を掬い取ることまでしかサークルには出来ないのではという限界がある問題を久野収が指摘している(中井正一、中井正一全集第一巻 哲学と美学の接点、美術出版社、1981、471p.に所収されている久野による「解題」)。久野の提示した問題については、心理学者レオン・フェスティンガーの認知的不協和と媒介の関係を考察する必要があり、後の章で扱うこととなる。

価値観はドイツ観念論やマルクス主義として表出されており、どちらも事実上強いエリート主義と観念的な議論を内包する思想であった。典型は法学部であり、例えば憲法学の穂積八束・上杉慎吉や美濃部達吉らの論争は絶対主義的な解釈・民本主義的な解釈の違いはあれど、上杉と美濃部が共にゲオルグ・イエリネック (Georg Jellinek) に学んだように、ドイツ観念論が色濃く社会的事実と法の規範の峻別を主張する大陸的な法実証主義が支配的なドイツ法から学んだ発想に由来するものであった。

こうしたア・プリオリな考え方を受容することでリースマンの他人指向型の考えに同意をしなくなる傾向は実感論に賛成する場合でも存在する。京大など他大出身者でも久野収のように加藤の論に否定的な論者はいるが、こうした実感論を肯定する側の内部での他人指向型への共感か否かへの影響面では、東大の機能が色濃く出ていると言える。実感論を肯定しながらも他人指向型は受け入れられなかった田口³⁶は東大出身である。とはいえ、今回挙げた人物のうち東大卒は比較的他人指向型への支持という点で分かっている範囲（丸山・藤田・大江・田口）では皆反対の立場と言えるが、後藤や橋川のように不明瞭な人物が存在する。

また、同じ旧帝大でも実感論での支持で京大卒は久野と梅棹で分かれているように、京大を旧帝大として東大と同じカテゴリーに入れるべきかは難しい。京大以外の大学についても、実感論・他人指向型への支持どちらでも江藤と加藤は立場が真逆である。竹内は理念型を構築する際に一応京大も含めた旧帝大卒をまとめたが、あくまで東大か否かのみとした方がわかりやすい。要は、竹内の理念型モデルである「東大など旧帝大卒は実感論への否定をする」を修正し、新たに「東大卒は他人指向型の否定をする」という形で学歴が影響を与えるという理念型を見出した。

以上の複雑な構図について、本章のまとめも兼ねて表で表すと以下の表6のようになる。

³⁶ 田口はさらに日本共産党員であり、より講座派・理論信仰的なものと属性上は親和的になりうる中では独自色を出したとも言える。

表6：実感論と非実感論

	非実感論的	実感論的
先行研究（竹内説）	旧帝大	旧帝大以外
江藤淳の分類	江藤淳（慶応→非旧帝大） ＝主体を大切にし、空気に流されることを肯定しない	加藤秀俊（一橋→非旧帝大、）梅棹忠夫（京大→旧帝大）、後藤宏行（東大→旧帝大） ＝空気に流されることを肯定する
藤田省三・久野収・鶴見俊輔座談会	藤田省三（東大→旧帝大）、久野収（京大→旧帝大）	鶴見俊輔（ハーバード→非旧帝大）
実感論争座談会	大江健三郎（東大→旧帝大）、江藤淳（慶応→非旧帝大）	加藤秀俊（一橋→非旧帝大）、橋川文三（東大→旧帝大）、田口富久治（東大→旧帝大）
他人指向型への評価	江藤淳（慶応→非旧帝大）、大江健三郎（東大→旧帝大）丸山眞男（東大→旧帝大）、田口富久治（東大→旧帝大）	加藤秀俊（一橋→非旧帝大）
丸山眞男の立場の二重性	実感信仰批判（文学者的なものを批判）	理論信仰批判（社会科学者的なものを批判）
実感論争座談会での丸山の弟子：橋川の総括	文学者が実感信仰を批判	社会学者が理論信仰を批判

実感論という文字を見る限り、竹内の論とは異なり東大出身者であっても田口のような

人物が実感論の側に入る。しかし、「他人指向型への評価・コミュニケーションを自主的に行うことできるサークルの形成」という補助線を入れて、竹内の言うような大学の違いの影響力の大きさは改めて確認できる。本稿では、当初の竹内の図式を用いて事例を当てはめて、どこまで当てはまるかを調べた。事例の中でも実感論には賛成しつつも他人指向型には反対した東大出身者である田口の事例をヒントに、竹内の図式があくまで理由を説明する説明要因としては部分的なものに留まると解釈し、他人指向型と東大卒の関係という図式を加えた新たな理念型を見出した。この新たな理念型も久野や江藤の事例があるように、うまく説明できないズレた事例が出現してしまうが、より精緻な理念型を見出さうるステップとなる。

以上により、1 つ目の作業仮説、①実感論争における加藤と他の論者との距離を単に実感に対する是非のみならず他人指向型への是非から捉える作業によって加藤の立ち位置を明確に炙り出すことができた。他人指向型の評価は加藤の独自性であり、加藤が江藤・大江・藤田に理不尽に迫害されるという、加藤が先見者であるか否かに関わる重要な点に近接することが出来た。

4. 「刊行のことば」分析から見える加藤によるメディア戦略

4.1 加藤秀俊と中公新書

加藤が江藤・大江・藤田に理不尽に迫害された理由が、加藤が先見者であるからか否かを探求するという研究目的を1章から扱っている。この研究目的を、加藤の独自性を探るという3つの作業仮説に分割して本論文は進んでいる。本章ではそれら3つの作業仮説の中でも、②加藤が中公新書に込めたメディア戦略と中間文化論との関係を探ること、を扱う。中間文化論はすでに3. である程度扱ったので、ここでは中公新書の「刊行のことば」に着目する。

1962年11月に中央公論社は中公新書を創刊した。3章でも少しふれたように、その際に、「刊行のことば」を担当したのが加藤である。加藤は当時、京都大学の人文科学研究所の助手であり、32歳という若さであった。加藤はすでに雑誌『中央公論』で『中間文化論』（1957）をはじめとする論説を執筆していたが、新書の「刊行のことば」というシンボリックな役に白羽の矢が立つこととなった。

2012年に中公新書では刊行50周年を記念し『中公新書総解説目録』（2012）を作成した。加藤はこれに「中公新書創刊のころ」という文章を寄稿し、事情を以下のように記録している。

いくら「常連」といってもわたしは当時まだ三十二歳。まだヒヨコである。そんなわたしに「刊行のことば」というたいへんな原稿のご依頼である、しかも長期にわたって一冊ごとに印刷される文章をまかせる、とおっしゃるのだから破天荒なできごとといわなければならない。(p. 5)。

すでに加藤は雑誌『中央公論』で何度も書いた経験があったといえども、「刊行のことば」を任されることは加藤自身にとっても大役であったことを素直に告白している。中公新書の創刊を担当した中央公論社の編集者は、『中央公論』編集長をはじめ、「世界の歴史」「日本の歴史」シリーズの刊行など出版史上重要な仕事を複数こなしたほか、後に鉄道エッセイなどで作家として活躍することになる宮脇俊三（1926～2003）であった。加藤によれば、その宮脇が加藤を指名し、社長である嶋中鵬二（1923～1997）らも加藤の指名に理解を示し期待していたという。中公の企画側である嶋中・宮脇が加藤に理念面のデザインを依頼したということになる。

「刊行のことば」は中公新書としての立場のものであり、執筆者が加藤であったことは一般に公表されてこなかった。「刊行のことば」は中公新書の最後に載ることになる、いわばグランドデザインに該当するものである。すなわち、中公新書の方針として加藤が描いた思想が規範として機能する力学が働いていたと考えることができる。

加藤はこのグランドデザイン策定にあたって、先発である岩波新書との差別化戦略[2]を

いかにして行うべきかという問いを以下のように考えることとなった。3章でも引用したものだが、再び加藤の寄稿文から引用する。

その位置づけをどうするかはなかなか尋常ではない。中央公論社が「新書」と名乗るにあたってはそれに先行して確乎たる地位を確立していた「岩波新書」を意識せざるをえないからである。あきらかに後発である。いったい、どこで岩波との「種差」をつけるか、が大問題であった。いったい、どこに「中公新書」の特徴をだしていったらいいのか。そのことを宮脇さんとわたしはあれこれと語りあった。そして意見が一致したのは「観念論」を排除することであった(p. 6-7)

さらに、加藤は宮本常一(1907~1981)や今西錦司(1902~1992)というフィールドワークを重視した先達の学者の名前を挙げながら、「おふたりとも抽象的な書物をつうじての学問よりは具体的な体験的事実を思索の出発点となさっていた碩学である。その「事実」を重くみることをこのあたらしい新書の特色にしたい、とおもった」とも書いている。つまり、岩波文化は「観念論」であること、さらには岩波文化との差別化戦略として反「観念論」＝「事実重視」が良いと加藤が考えて、宮脇とも合意したことを意味する。一方で、以下のようにも書いている。

だが、そうかといって、時事に流されてあまりにもジャーナリスティックな消耗品になってもいけない。いったん上梓された以上はすくなくとも五年、できることなら一〇年、二〇年たっても「賞味期限」が消えることのないような書物であってほしい。(p. 7)。

これは岩波文化と対比される講談社文化的なものとも差別化を行おうとしていると読み取れる。実際、加藤は同論説でその手前の部分で以下のようにも書いている。

「わたしの記憶ではこの判型を出版界で定着させたのはなんといっても光文社の一九五五年創刊の「カップブックス」「カップノベルス」であった、とわたしは記憶している。「カップ」の代表はいうまでもなく松本清張さんの一連の作品。一九五九年に清張さんの『ゼロの焦点』を三八万部、翌年におなじく『眼の壁』を三六万部、といったふうにおどろくべき発行部数を誇り、この規格は「本」の重要なジャンルになっていたのである。」(p. 6)。

こうした記述から見える加藤の認識は、岩波書店だけでなく、講談社もまた強力なライバルと見なしているものである(なお、光文社は音羽グループの一翼を担う、講談社の系列会社である。加藤自身がこの「系列」であることを意識している点は、4.2で後述する)。そして、岩波書店と講談社はそれぞれ対照的な強みをそれぞれもっているということを勘

案して、両者の中間を採用しつつも、両者に共通する弱点を克服できるような差別化の方向を熟慮している様子が見える。

4.2 中間文化論と中公新書

3章1節でもいっらかふれたが、日本共産党所属の知識人である蔵原惟人（1902～1991）は、岩波文化＝教養主義的・自由主義的で戦前には力をもてないもの、講談社文化＝大衆的で戦前に力もち軍国主義に親和的という図式を提示した（蔵原 1947）。この図式は単純明快でわかりやすく、遠山茂樹（1914～2011）・今井清一（1924～2020）・藤原彰（1922～2003）の三人のマルクス主義歴史学者が共著本として執筆した岩波新書の『昭和史』（1955）に採用されて、評論家の亀井勝一郎が、人間が描かれてない歴史であると批判をしたことをきっかけに昭和史論争と呼ばれる大きな論争となった。丸山眞男（1914～1996）も『日本の思想』（1961）で、理論信仰＝キリスト教神学やマルクス主義など体系的でトータルな理論を信仰するもの、実感信仰＝小林秀雄をはじめとする日本の文学者による、理論を避けて個々の実感を重視するもの、と図式化し、二つの信仰をどちらも批判した。昭和史論争の際に丸山は遠山らの歴史観を単純すぎると批判していたものの、理論信仰・実感信仰論については蔵原の二項対立を実質的に引き継いだといえる。

それに対して加藤は3章1節で詳述したように、『中間文化論』（1957）で蔵原・丸山の図式に依拠しながらもそれらを暗に批判し、対抗軸を示した。加藤は岩波文化・理論信仰に該当する高級文化と、講談社文化・実感信仰に該当する大衆文化の中間としての中間文化への統合・発達を指摘し、理論重視の蔵原や丸山の理論信仰・実感信仰の二項対立図式への批判と、蔵原や丸山よりも実感重視の路線を打ち出した。その際に加藤（1957）は当時の新書ブームを例にだしており、新書は専門書と単なる読み物の中間であり、新書は中間文化に当てはまるものとみなしていた。

加藤はさらに中公新書創刊の直前にあたる1962年の6月に『中日新聞』で新書論として「日本の新書文化」（1962a, b）を執筆している。大正以来の講談社文化対岩波文化が1962年当時では講談社から分かれた光文社によるクッパ・ブックスと岩波新書の対立として一般的には描かれていて加藤もそのことを認知しているが、両者が近接しつつあると加藤は以下のように指摘している。引用が長くなるので、ところどころ内容をまとめていく。

さて、わたしは、新書というものを、その機能においてジャーナリズムの延長線上にある出版物、として考えてきた。（中略）そしてそういう、ジャーナリズムとしての新書、という哲学に徹して、大成功をおさめているのはいうまでもなく光文社のクッパ・ブックスだ。クッパは、ジャーナリズムにおける商業的成功の鉄則、すなわちセンセーショナルなリズムをもみごとに採用して、必ず売る。売って売って売りまくるのである。「易入門」といった本を買って、なんだかバカにされたような気がする、怪しからん、などという

ひともあるが、これはいささか筋ちがいであろう。

本というものはキチンとした、永遠に価値あるものでなければならぬという考えに立ってみれば、カップは邪道かもしれないが、週刊誌三冊ぶんのネダンで、週刊誌三冊ぶんの知識とセンセーションを買ったのだ、と考えれば、べつに腹も立つまい。本だ、と思うからいけないのである。(加藤 1962b)

加藤は光文社のカップ・ブックスを新書の典型例であると考えている。カップ・ブックスは本というよりは、むしろ週刊誌的なジャーナリスティックなメディアであると分析し、時局的なもの、流行している話題を提供するものであると加藤は捉えている。

ところで、おなじ新書でも、「新書」の本家本元たる岩波新書は、カップと対極をなしている。岩波新書もまた、シロウトわかりのする内容で毎週ベスト・セラー欄に登場しているが、こっちは、もともとのスタートラインがカップと正反対なのである。正反対のスタートラインとはなにか。それはアカデミズムである。ジャーナリズムというのが、有効期間幅の短い知識の形式であるのと反対に、アカデミズムの有効時間幅はきわめて長期的である。(中略) アカデミズムは、永遠でかつ普遍的な知識を追求するのである。

岩波新書は、もともとが、永遠にしてかつ普遍というアカデミズムの時間幅をすこしせばめて、現代的関心との接点をさぐる出版物なのだ。カップが、昨日今日、という、ごく短期的なジャーナリズムの発想を“拡大”してできあがっているのにたいして、岩波のほうは、永遠にして普遍という長期的なアカデミズムの発想を“縮小”してできあがっているのだ、といってもいい。両者の関係は、上り列車と下り列車のごときもので、出発点が元来ちがうのである。カップと岩波新書は、その版型もネダンも似ているが、まったく逆方向からあゆみよって、その類似性はうまれたのだ。(同上)

ジャーナリスティックで即物的な、すぐ役立つが短期間に賞味期限が切れるカップ・ブックス的なメディアが新書であるという前提を、岩波新書の話をするので加藤は揺るがしている。岩波書店のスタートラインはアカデミズムであり、その対象は時空間を越えた普遍的なものであるという点で、講談社系列である光文社の瞬間的な視点とは対極的である。その対極的な両者がお互い相手の方向に動いた結果、新書というところで出会ったのだという説明をしている。

(中略) わたしが考えているのは、大正末期から、講談社文化対岩波文化というかたちで、きわ立ったコントラストを示してきた日本の出版界の二潮流が、いまやカップ・ブックス対岩波新書というかたちに変形されて持ちこされている、という事実なのである。戦後、講談社からわかれて独立した光文社は、いっぽうで講談社的発想の伝統をひきつぎながら他方では戦後の日本の状況に鋭敏に反応してカップをつくり、岩波新書と

対抗する地歩をきずいてきた。多くの変形をうけながらも、カップ対岩波は講談社文化対岩波文化の現代的な展開なのである。

しかし、こうした対照を歴史的に考えるなら、わたしはふつうの潮流の落差がだんだんせばまってきた、ということに気がつく。かつての講談社対岩波はまったく水と油のごとく、とけあう部分をもたなかった。それとくらべれば、こんにちのカップと岩波新書のあいだには、それほど大きな異質性は存在していない。なるほど叙述のスタイルなどはだいぶちがうが、それぞれのシリーズの何冊かは、表紙をとってしまったら、カップか岩波か判定がつきかねるほどに、両者は接近してきている。

(中略) 両者の接近から、「新書文化」が前向きに定着するかどうか、それは主として、このスレちがい技術にかかっている、とわたしはみる。(同上)

以上の記述からも、加藤は蔵原や丸山の講談社文化と岩波文化という対比図式を『中間文化論』執筆時である 1957 年と同様に 1962 年時点でも念頭に置いていることが分かる。新書文化の活用の仕方についても『中間文化論』のときのものとは変わっていない。つまり、加藤は新書の中間文化論的な図式を、「刊行のことば」を執筆する前後に改めてふれ、より詳しく分析したものと考えられる。新書は専門書と単なる読み物の「中間」という意味だけではなく、岩波文化と講談社文化の接近という意味での「媒介」の意味をもつ作用があると加藤は考えていた。この点で、蔵原及び丸山の図式の克服というモチーフが加藤の新書論において貫かれているといえる。

中間と媒介はラテン語にすると共に medium である。加藤の中間文化論の「中間」の語にも中間と媒介の両者が含まれ、中公新書の方針にも反映されていることになる。このことを踏まえながら、前章までに何度か出てきた加藤の思想の基盤たるプラグマティズムにおけるアブダクションを用いて実感が理論へつながり、具体と抽象の「中間」及び相互作用的な「媒介」の機能をもつものであるといえる。このプラグマティズムについては詳細に説明する必要があるため、次節で扱う。

4.3 加藤秀俊とプラグマティズム

プラグマティズム、プラグマティックという語は、鶴見俊輔(1922～2015)が『アメリカ哲学』(2008)で記したように、創始者であるパースとジェームズの間でさえ強調する点が異なるなど内実は幅広いものになっている。本研究でのプラグマティズム、プラグマティックとは、概ね(フィールドワークなどの)現場の実感から物事を考えるというプラグマティズムに共通する経験主義的なもの、(実学など)実用的であるというジェームズが重視したもの、仮説構築を重視し、理論形成を目指すというパースが重視したものという三つの要素を含んだものとなっている。加藤は自伝『わが師わが友ーある同時代史』(1982)で、梅棹忠夫(1920～2010)が『思想の科学』に書いた「アマチュア思想家宣言」

(1954)を「徹底的にプラグマティックな機能主義が反映」されているものとして紹介し、加藤が梅棹の特徴である現場・実用・仮説構築の三点に惹かれたことを書いている。それゆえ、本稿でもこの三点をプラグマティズムの要素として考えたい。

プラグマティズムの源流であるイギリス経験論は、一ノ瀬正樹『英米哲学史講義』(2016)よれば、「努力する」「試みる」といった行為を重視する哲学である。時代が下ると、近代のイギリス経験論の大家デイビッド・ヒューム (David Hume) (1711~1776) からジェレミー・ベンサム (Jeremy Bentham) (1748~1832) やジョン・ステュアート・ミル (John Stuart Mill) (1806~1873) らによる功利主義が発生した。そこから、さらにチャールズ・サンダース・パース (1839~1914) やウィリアム・ジェームズ (William James) (1842~1910) らによるプラグマティズム、バートランド・アーサー・ウィリアム・ラッセル (Bertrand Arthur William Russell) (1872~1970) やアルフレッド・ジュールズ・エア (Alfred Jules Ayer) (1910~1989) らによる分析哲学などに分化した。これらは幸福の追求や効果への着目、明晰な思考や確率の計量化などの特徴をもつが、それらは一ノ瀬によれば「努力する」「試みる」ことを重視する要素が大きい。

日本では、プラグマティズムの前段階としてイギリス経験論が明治時代に流入した。明治時代のベストセラーは福沢諭吉 (1835~1901) の『学問のすすめ』や中村正直 (1832~1891) がサミュエル・スマイルズ (Samuel Smiles) の『自助論』を『西国立志編』として訳したものなど、イギリスの倫理主義的な側面が強いものが多かった³⁷。さらに西田幾多郎 (1870~1945) の『善の研究』には、同書のキーワードである「純粹経験」がウィリアム・ジェームズの哲学の影響を強く受けていて、ジェームズ及びジョン・デューイ (1859~1952) を通じてプラグマティズムの影響も存在していた。

しかし大正時代以後は、日露戦争までの緊張の続く国際関係がひと段落して若者の興味関心が外から内に向いたこともあって、教養主義のもとドイツ観念論と、ドイツ観念論を弁証法的に乗り越え、止揚させることで唯物論に反転させたマルクス主義が流行した。戦後も多くの学者はドイツ哲学に基づく思想をもち、岩波文庫白帯のラインナップはカール・マルクス (1818~1883) の『資本論』を中核とし、哲学を扱う青帯の西洋哲学のラインナップではイマヌエル・カント (Immanuel Kant)、ヘーゲルらのドイツ観念論を中心とするなど、ドイツ的な教養が隆盛を極めた。

だが、加藤の出身校である東京商科 (一橋) 大学は他の大学と比べると商学・経済学といった実学をより重視する風土であった。一橋大学の源流は明六社の会長や初代文部大臣

³⁷ 英米では道徳哲学と呼ばれる分野が発達しており、アダム・スミス『道徳感情論』など人間がどのような存在であれば社会は良くなるかを問うものが学問分野として設定されていた。(佐藤, 溝口元編 1997) 当時の心理学はヒューム以来の連合心理学と呼ばれる心的活動の要素の組み合わせによって心理が説明できるとされるもの (高橋 2016) であり、ヴィルヘルム・マクシミリアン・ヴント (Wilhelm Maximilian Wundt) の心理学が導入されるのはやや後になる。

を務めた森有礼（1847～1889）が開設した私立の商法講習所にまで遡ることができる。その後、官立の高等商業学校として運営されて、ビジネスエリート養成所として機能した³⁸。こうした実学重視が一橋の「隠れたカリキュラム」³⁹となったことは、一橋大学に通った加藤に影響することとなった。加藤は1953年に⁴⁰卒業論文でアメリカ社会学を取り扱い、その背景にプラグマティズムがあることを論じている。

一橋大学名誉教授の矢澤修二郎『現代アメリカ社会学史研究』（1984）によれば、アメリカ社会学はパースを開祖とするプラグマティズムの影響を受けている。アメリカ社会学はフィールドワークを重視するシカゴ学派として開花した。シカゴ大学にはプラグマティストであるジョン・デューイやジョージ・ハーバード・ミード（George Herbert Mead）（1863～1931）が在籍していたので、プラグマティズムを重視する伝統があり、都市のスラム街など具体的な解決すべき問題をプラグマティックに研究するためにフィールドワークをし、モノグラフにまとめて理論につなげていくという方法が社会学研究として採用された。矢澤は、例外的に壮大な図式に通じる一般理論を重視しプラグマティズムの影響がないタルコット・パーソンズ（Talcott Parsons）（1902～1979）⁴¹を除けば、アメリカの社会学はプラグマティズムの影響が強いと主張している。加藤を指導したリースマンもシカゴ学派的な学風を継承した人物であり、プラグマティズムの影響が強い⁴²。

加藤がプラグマティズムに影響を受けたとして、その特徴は何だろうか。今までの記述

³⁸ 経済学・商学を中心とする実学を重視するという似た傾向をもつ学校として慶応義塾がある。慶応を創始した福沢諭吉は森と同じく明六社のメンバーであり西洋列強の文明を評価する人物であるなど似た思想をもつ。また、福田徳三は東京高等商業学校を卒業し母校の教員になった後、一時期騒擾に巻き込まれ母校をやめ、慶応の教員をしていた時期があるなど、両校の人材交流は盛んであった。なお、福田の慶応教員時代の教え子に後の慶応義塾塾長となる小泉信三がおり、福田の自由主義的な気風を受け継いでいる。

³⁹ 隠れたカリキュラムとは学校の公式のカリキュラムではない、行動パターンやメンタリティなどが学校の中で伝達されることを示す。特に校風やジェンダー意識などが隠れたカリキュラムとして指摘されることが多い。詳しくは竹内(2014)や橋木(2012)を参照。

⁴⁰ 加藤秀俊. “アメリカ社会学の理論性格 —その歴史意識と関連して—”. 加藤秀俊著作データベース, <http://katodb.la.coocan.jp/doc/text/2934.html>, (参照 2021-07-20)

⁴¹ パーソンズ社会学はウェーバーやデュルケムなど従来の社会学を統合しながら社会全てを分析対象とする AGIL 図式と呼ばれる壮大な理論体系を構築したが、反体制的な社会学者であるチャールズ・ライト・ミルズ（Charles Wright Mills）（2017）から体制を肯定するだけで社会の説明には失敗していると酷評（ミルズ 2017）され、パーソンズの弟子であるロバート・K・マートン（Robert King Merton）（1961）も壮大な理論を放棄し経験的実証研究と仮説構築の調和である中範囲の理論を唱えるなど、プラグマティズム的な観点の強い学者から批判される傾向がある。実際、加藤（1982）もハーバードでパーソンズの講義を受けるが、理論も英語も難解で理解できなかったと回想している。

⁴² リースマンは加藤を指導したのちに、シカゴ大学でも数理化・計量化が行われ始めて、数量化が手段ではなく目的と化していったことで、1958年再びハーバードに移った。加藤（2016）によれば、シカゴ学派的な個別探求の方法に逆風が吹いて、統計・コンピューターで何でも数理化することを手段ではなく目的とする風潮がリースマンには合わなかったのだという。

からは、現場と経験を重視し、フィールドワークなどの実地調査と相性が良いという特徴があるとまとめられるだろう。さらにプラグマティズムの思考方法としてアブダクションというものがあり、それについて以下では説明していく。

米盛裕二『アブダクション 仮説と発見の論理』(2007)によれば、アブダクションとはプラグマティズムの開祖パースが唱えたもので、①「ある特異な事実 C がある」②「もし、仮説 H が正しいならば、事実 C を説明できる」③「よって、仮説 H は真である」の順に行う思考法である。アブダクションは仮説構築を目的とする推論であり、論理的には大きく飛躍する。逆にいえば、論理的な飛躍が大きいだけずれが生じるということであり、その分だけ新しい発見にもつながりうる。アブダクションで構築された仮説は間違っている可能性が存在するため、論理的には正しい演繹と、事例をいくつもぶつけてテストするという、飛躍がアブダクションよりは小さく演繹よりは大きい帰納による検証の両方を要する。加藤や鶴見、梅棹らの同僚である上山春平(1921～2012)の『弁証法の系譜 マルクス主義とプラグマティズム』(2005)によれば、アブダクションは演繹や帰納も含めたサイクルの中で行われるべきものである。要は、現実観察からアブダクションを行い仮説構築し、帰納と演繹によって修正をして仮説を理論へと昇華させ、理論がひとまず出来たらつぎにこの理論に当てはまらない面白い事象を発見しさらに再びアブダクションを行うというサイクルである。シカゴ学派のスタイルである質的調査は、フィールドワークによって得た少数事例から仮説構築するアブダクションを方法論として用いるものであり、方法論としてプラグマティズムの影響を受けたものである。

こうした加藤のプラグマティックな思想に影響を与えたのは一橋大学だけではない。竹内は南博、思想の科学研究会、京大人文科学研究所を挙げている。加藤は思想の科学で鶴見俊輔と会い、京大人文研では鶴見によって梅棹忠夫を紹介してもらっている⁴³。さらにハーバード大・シカゴ大留学の際の指導教員デイビッド・リースマン(1909～2002)、鶴見の姉である民俗学者・社会学者鶴見和子(1918～2006)の紹介で最晩年の柳田国男(1865～1962)に加藤が会っていることも重要である。以下、彼らの共通点となる要素を列挙し、最後に共通因数を整理する。

南博は慶應義塾幼稚舎、旧制東京高校を経て医者を目指し東京帝国大学医学部に入るも中退、京都帝国大学哲学科に転じて心理学を学び卒業後、戦時中に事実上敵国人扱いされながらもアメリカのコーネル大学大学院で学び、戦後の社会心理学やマス・コミュニケーション論をリードした人物である(南 2004)。南は社会心理学者として実験も行っていたが、社会心理学は当時まだ社会学との分化が進んでおらず、学生と共に歌舞伎の場に足を運ぶなど、野外でのフィールドワークを重視していた。加藤は自伝である『わが師わが友』

⁴³ 南、鶴見、梅棹は共に思想の科学研究会に在籍していた(黒川創、鶴見俊輔伝、新潮社、2018、566p.)。さらに鶴見と梅棹は共に京都大学人文科学研究所に在籍していたなど、加藤周辺の人物たちの交流も密であった。

(1982)で南のこうした学問的姿勢に影響を受けたことを記録している。

鶴見俊輔も戦争直前にハーバード大学でウィラード・ヴァン・オーマン・クワイン (Willard van Orman Quine) (1908~2000) のもとでプラグマティズム⁴⁴を学び、戦後の日本ではプラグマティズムの紹介を行った。戦前日本でプラグマティズムといえば、ジェームズやデューイによる当時の心理学ベース⁴⁵のものが中心であったが、抽象的で難解な論理実証主義への批判を鋭く行ったクワインのもとでパースについて学んだ鶴見は、パースも含めたプラグマティズムをよく理解していた。鶴見のもとでプラグマティズムを思想・方法論として知った加藤(1982)は大工さんには大工さんの哲学、農民には農民の哲学があって良いと思想の科学研究会で学んだことを書いている。加藤が鶴見から学んだことは現場で実用的な知見を学び、そこから己の思想を鍛え上げていくことで経験から抽象へと昇っていくサイクルであり、その訓練をすることで結果として、現場・実用・仮説構築の三点を重要視するプラグマティックな思考を意識することになる。

梅棹忠夫は今西錦司らと共に山脈や島などをフィールドワークしてきた人類学者・生態学者である。すでに3章の末尾に書いたように、加藤は梅棹の「アマチュア思想家宣言」の徹底的にプラグマティックな機能主義と平易な文体に惚れたと書いている。現場から実用的に学び、『文明の生態史観』のような壮大な仮説を、アブダクションによって構築する梅棹の学問に共感した加藤は、大阪万博への関与⁴⁶をはじめとする梅棹が関連するプロジェクトに参画していくこととなった。こうして鶴見に紹介されてから梅棹の死(2010年)に至るまで、加藤と梅棹の友情は続いた。

デイビッド・リースマンはアメリカを代表する社会学者の一人であり、後に加藤が訳すことにもなる『孤独な群衆』の著者として有名である。『孤独な群衆』は文明史的な視野が入ったアメリカ社会論・近代文明論・現代社会論であり、多くのアメリカ文化の実例に基づいて、伝統指向型社会、内部指向型社会、他人指向型社会へ至るアメリカ文化の大まかな流れという壮大な仮説を描いている。加藤(1982)はリースマンのゼミで週刊誌やジャズ音楽など世俗のものを数多く扱うスタイルを経験しており、リースマンの弟子にもなったことで「シカゴ学派社会学の末席にいる」ことを誇りとするなど、リースマンの学風にも強く影響を受けた(加藤 2016)。

⁴⁴ クワインのプラグマティズムはルドルフ・カルナップ (Rudolf Carnap) ら分析哲学の洗礼を受けており、パースやジェームズといった初期のプラグマティズムとの違いも大きい(丹治 2009)。

⁴⁵ ジェームズとデューイは心理学が基盤であり、パースは論理学・数学が基盤であるとの指摘は上山春平(2005)によるものである。上山は京都大学人文科学研究所に在籍し、プラグマティズムとドイツ観念論の比較を行った人物であり、加藤・鶴見・梅棹・桑原らとも親しかった。

⁴⁶ 加藤や梅棹らが大阪万博に関与していった様子については、例えば、小松(2018)を参照のこと。同著は当然小松左京視点で描かれているが、加藤が解説を寄稿しておりこちらは京大人文研視点となっている。

柳田国男は日本民俗学の創始者であり、加藤も直接対面したことがある。加藤はそのなかでも『明治大正史 世相篇』（2001）を高く評価し、社会学の基本文献であると中公クラシックス版の解説で書いている。加藤は柳田の世相史への関心に強く影響を受け、加藤が最近執筆した『社会学』（2018）をはじめ、加藤の現代社会分析のあり方の基本となっている⁴⁷。柳田もまた民俗学者としてフィールドワークを行い、実用的な視点から常民をめぐる諸仮説をアブダクションによって構築していった人物である。

現実をありのままに見る社会観察、学問を社会に役立てる実用性、アブダクションによる仮説構築という三点で加藤に影響を与えた南、鶴見らはそれぞれ共通しており、加藤はこの三点を受け継いでいる。南と梅棹、リースマンや柳田国男はフィールドワークを行う学者である。鶴見俊輔は哲学者であるが実感を大切にするプラグマティズムを扱っており⁴⁸、反戦運動を組織化するなど実践を重視した人物でもある。加藤の社会学において現実観察としてのフィールドワークとは、人々の実感に基づく具体的な描写を精緻に記録すること、わかりやすい表現で記述すること、その上での確に説明を行うこと、説明したことをもとに社会に役立てることに他ならない。

以上、社会観察と実用性、アブダクションによる仮説構築の関係性及び加藤の思想への影響を述べた。

4.4 中公新書「刊行のことば」の分析

ここで、加藤の「刊行のことば」の全文を四つの段落に分割して引用し分析する。以下では、ここから読み取れる加藤の考えがプラグマティズムに基づいていることと、それが中間文化論と連動していることを説明していく。以下は第一段落である。

いまからちょうど五世紀まえ、グーテンベルクが近代印刷術を発明したとき、書物の大量生産は潜在的可能性を獲得し、いまからちょうど一世紀まえ、世界のおもな文明国で義務教育制度が採用されたとき、書物の大量需要の潜在性が形成された。この二つの潜在性がはげしく現実化したのが現代である。

一つ目の段落は書物の大量生産・義務教育制度の採用による書物の需要の潜在性と、現代社会化による書物の潜在的需要の顕在化に言及し、これは情報社会化の激化を意味する。

⁴⁷ 加藤自身も『明治・大正・昭和世相史』（1967）の分担執筆をしたり、後に単著の世相史本を執筆するなどして世相史への関心を表現してきた（加藤 2002）。加藤は「中公新書創刊のころ」で、京大人文学研究所でも活躍した生態学者今西錦司と共に民俗学者宮本常一を挙げているように、柳田民俗学に限定せず民俗学全般に共感し高く評価している。

⁴⁸ 鶴見は『アメリカ哲学』（2008）の70pでアブダクションを「構想」と訳している。鶴見はアブダクションでの思索の創造性、新しい考えの挿入といった現象を把握している。

書物の大量生産は講談社文化的なものと同様の現代の大衆文化の原因となる。また、ここで教育の拡大と大衆化をのべているが、そういう教育の拡大と大衆化は、大卒＝「末は博士か大臣か」というエリート路線の確定を意味しない状況⁴⁹を生み出し、大卒でもサラリーマンになるようになったと『中間文化論』で描かれている。

加藤は指導教員である南と同様にメディア論・コミュニケーション論の専門家でもあり、社会観察としてマスメディアの発達や情報社会化を観測していた。2節でみたように、中間文化をマスメディアが担い、カッパブックス（音羽グループの光文社）など新書ブームを根拠に新書がその例であるとする。3章で検討したように、加藤の『中間文化論』（1957）は戦後10年のマスメディアの発達や社会観察をもとに書いたものであり、大衆文化と高級文化を繋ぐ中間文化という概念もまた、大衆文化と高級文化の差が教育の拡充と大衆化によって高等教育を受ける人の数が増えて、徐々に減っていくことを観察したことで導出できたものである。さらにそこから加藤は情報社会化という現代ではおなじみの概念をこの当時から見出していた⁵⁰。

第二段落の分析に移る。第二段落の全文は以下の通りである。

いまや、書物によって視野を拡大し、変りゆく世界に豊かに対応しようとする強い要求を私たちは抑えることができない。この要求にこたえる義務を、今日の書物は背負っている。だが、その義務は、たんに専門的知識の通俗化をはかることによって果たされるものでもなく、通俗的好奇心にうったえて、いたずらに発行部数の巨大さを誇ることで果たされるものでもない。現代を真摯に生きようとする読者に、真に知るに価

⁴⁹ 大学生の数と大学生一人当たりの価値は価値と稀少性の関係から、反比例の関係にある。詳しくは竹内(2003)を参照。

⁵⁰ さらに加藤(1963)は、情報社会化による情報の洪水が発生し人々が情報の海に溺れて認知処理上でトラブルが発生しやすくなっていることを別の機会で論じている。なお、1963年1月に梅棹は「情報産業論」（『文明の情報学』（1999））を発表し、同時期のダニエル・ベルやアルビン・トフラー、マーシャル・マクルーハンやフリッツ・マッハルプらと並び立つ情報社会論の開拓者の一人と並び称される。加藤による「刊行のことば」は中公新書の一冊目である『日本の名著』が出版された1962年11月に世間に公開され、加藤の『整理学』は1963年5月出版である。『加藤秀俊著作集1』（1980）でのあとがきでは、『整理学』ができたきっかけが加藤の手によって描かれている。京大人文学研究所での共同研究の最中、「あまりにもたくさんの情報に押しつぶされそうになっていたわれわれは、情報をどうさばくか、という処理技術をかんがえはじめていた。そんななかで「整理学」ということばが、誰かの口から出た」とあり、その時に加藤と話していた相手が梅棹と川喜田二郎であることを加藤が書いている。さらに、『整理学』の序文では梅棹が校正の段階で加藤に助言したことも書かれている。以上の情報を纏めると、情報社会論としてまとめて発表したのは梅棹であるが、加藤及び川喜田とのディスカッションを行いながら作られたものであり、情報社会論的な視点を持つ文章を加藤が表現したものが『整理学』で、梅棹が表現したものは「情報産業論」（1963）と『知的生産の技術』（1969）、川喜田が表現したものは『発想法』（1967）『続発想法』（1970）であったと考えられる。

いする知識だけを選びだして提供すること、これが中公新書の最大の目標である。

二つ目の段落は一つ目の段落の内容を前提にした上で、発行部数至上主義に代表される通俗性の排除をしながら書物のあるべき機能を果たすことを中公新書の目的とすることである。発行部数至上主義は、講談社文化を思い起こさせる表現であり、それと比べると中公新書は高い質をもつことをアピールしている。

「刊行のことば」のこの部分の記述とは逆に、加藤の「刊行のことば」の回想、「中公新書創刊のころ」にある、「観念論」を排除する」という記述は本稿 1 章で先述のように岩波文化を思い起こさせるものである。岩波文化の抽象的な側面は、それが過度になれば、第二段落の最初に描かれる「変りゆく世界に豊かに対応しようとする強い要求」に対して机上の空論的な対応に陥る危険もあるといえる。すなわち、質が高いといっても岩波文化的な、抽象的過ぎて経験と切り離される恐れがあるものは不味いということになる。

以上の話を 3 章で扱った中間文化論に代入すると、中間文化とは質の高いものを志向し、発行部数至上主義や通俗性を排除しながらも、空理空論ではない、現場や経験と結びついた有用な知見が積み重なって仮説に発展していくものであるべしというアブダクション的な理想が見えてくる。これを講談社文化・岩波文化の図式に代入し第三の道としての中央公論社として位置づける場合、講談社的＝大衆文化的な発行部数主義に基づく通俗的な本と、観念論的＝上からの啓蒙的な岩波の（高級文化的）な専門書どちらでもなく、両者の中間であるところの＜実感に基づいた理論＞へとつながる、両者の接近・橋渡し・媒介をするものであると捉えることができる。

すなわち、中間文化の「中間」とは、通俗的な読み物と専門書、講談社文化と岩波文化という二つの中間でありつつも、二つを近づけて繋ぐという、二つの媒介をも意味することになる。実際、加藤は 2012 年の「中公新書創刊のころ」でも以下のように書いている。

「事実」を重くみることをこのあたらしい新書の特色にしたい、とおもった。学者というのは、えてして「本から本をつくる」傾向がある。はなはだしきは外国の本の紹介でお茶をにごすことを学問だと錯覚しているひともいる。わたしは学問というものは生きた人間がそれぞれの背景にある知識をしっかりとおさえながら、それを事実によって「わたし」という一人称で語るものでなければならない、とかんがえていた。いまもその信念にかわりはない。だが、そうかといって、時事に流されてあまりにもジャーナリスティックな消耗品になってもいけない。いったん上梓された以上はすくなくとも五年、できることなら一〇年、二〇年たっても「賞味期限」が消えることのないような書物であってほしい。(p. 7)。

当時既存の新書であったカップ・ブックスと岩波新書が近接していることをすでに加藤は 4 章で先述のように指摘しているが、それでも両者は講談社文化と岩波文化のなかから

発生したものである。加藤は改めて、新書という媒体そのもの中間性と、中央公論社の位置取りである岩波書店・講談社の中間性、両者の中間を採用することをポジショニング戦略と思想的な戦略を兼ねて宣言したと言えるだろう。

第三段落の分析に移る。第三段落の全文は以下の通りである。

私たちは、知識として錯覚しているものによってしばしば動かされ、裏切られる。私たちは、作為によってあたえられた知識のうえに生きることがあまりに多く、ゆるぎない事実を通して思索することがあまりにすくない。中公新書が、その一貫した特色として自らに課すものは、この事実のみの持つ無条件の説得力を発揮させることである。現代にあたな意味を投げかけるべく待機している過去の歴史的事実もまた、中公新書によって数多く発掘されるであろう。

ここで書かれている内容は、事実を通じて思索するというプラグマティックな発想の重視の表明である。最初に知識と思い込んでいるものに騙されてしまう我々の認知という問題を取り上げており、哲学上の認識論上の議論になっている。その次の文は、作為によって与えられた知識と自分の経験に基づく確かな知識を比較し、現代人があまりに前者に偏っていることを指摘し、さらにその次の二つの文では、中公新書が後者の知識を、時間軸を問わず重視していることを宣言している。事実のみの持つ無条件の説得力とは、パースのアブダクションに通じており、加藤のプラグマティズムの立場を示している。

以上「刊行のことば」の三つの段落をまとめてみると、第一段落では情報社会化と教育の大衆化、第二段落では講談社文化的なものや岩波文化的なものに対して第三の道としての中公新書の立ち位置を説明したものになっており、両者は共に中間文化論が発想の根源であった。これに対して第三段落では、岩波文化的な「作為的な知識」と対比的な説明もされているものの、その本質は事実を基盤とするプラグマティズム的な現場・実用の発想である。前段落までの「中間文化論的」な発想と第三段落のプラグマティズム的な現場・実用の発想とが組み合わさったものが「刊行のことば」である。

「刊行のことば」の最後の部分に相当する第四段落は以下のように、一文のみである。

中公新書は、現代を自らの眼で見つめようとする、逞しい知的な読者の活力となることを欲している。

ここでは、「自らの目で見つめる」という自ら学習する姿勢を知的な読者の活力という成果と結びつけていることを示しており、成果を理論への到達と重ね合わせれば第三段落同様にアブダクションを思い起こすことが可能な表現である。アブダクションは徹底的な現実の観察を仮説構築に結びつける手法であるが、仮説といっても「自分の体はラーメンを一杯食べた程度ではまだお腹が空く」というような、日常的な経験（ラーメンを一杯食

べる程度の食事をする) から教訓や周囲に当てはまる傾向 (その量ではまだお腹が空く) を見出すといったものも十分当てはまる。こうした小さな教訓や傾向を把握することで自分の生活が良くなる、言い換えれば「読者の活力となる」という表現とも通じる。

4.5 中公新書「刊行のことば」のまとめ

以上の「刊行のことば」をまとめると、加藤は以下のように考えていたとわかる。加藤は大衆的な基盤である実感を重視しながらそこから事実をもとに探求させて、閃きによる飛躍を行わせるという思考を読者に求める。それは事実をもとに自分で考える大衆をつかっていくというメッセージであり、精緻な社会観察をまず行い次にアブダクションをするという順序に則った方法論でそれがなされると考えていた。これは岩波的啓蒙とは違った「学習科学」的姿勢である⁵¹。学習科学は次の章で詳細に扱う重要論点である。

加藤は『中間文化論』ではエーリッヒ・フロム (1900～1980) の『自由からの逃走』(1966)⁵²に言及しながら、中間文化がマイナスに転じてファシズムに転落する可能性を指摘する一方、それをプラスの方向に働かせることの大切さを説いている⁵³。加藤は中間文化を穏健な大衆社会文化と考えているが、フロムに限らずハンナ・アレント (1906～1975) やオルテガ・イ・ガセット (1883～1955) などの大衆社会論ではファシズムへの転落の危機が常に描かれている。つまり、中間文化もまた大衆社会である以上、フロムらの危惧通りにいつ墮落し圧政を生むかわからないものである、という厳しい現実を加藤は見据えている。そうした中で、加藤は『中間文化論』の記述から、大衆の全体主義的要素を軽減することを意図したと考えられる。加藤はそれまでのファシズム論を踏まえて、中間層がしっかりすることこそが大衆社会たる現代社会の健全化に必要であると考えた。そして中間層がしっかりするためには、実体験と仮説、異なる他人を結びつける媒介すなわち、中間文化のプラグマティズム的な実践が必要とされるのである。こうして加藤は medium の二義性、中間と媒介の両者をプラグマティズムだけでなく、全体主義回避とも結びつけて考え

⁵¹ 加藤は『整理学』の他にも『人間関係』『自己表現』『情報行動』『取材学』『電子時代の整理学』『人生にとって組織とはなにか』などの中公新書を同様の観点から執筆している。論点こそコミュニケーション論・図書館情報学・組織論など多岐にわたるが、いずれの論点も自ら学んでいくというスタイルでは共通している。

⁵² なお、『自由からの逃走』の訳者である日高は東大新聞研究所教授として日本のマス・コミュニケーション論の学者を多く育てたが、彼も思想の科学研究会の主要なメンバーの一人であった。またリースマンはコロンビア時代にフロムに学んだことがある。

⁵³ 『中間文化論』での加藤の発想は、ウィリアム・コーンハウザー(1961)の原子化する個人からなる大衆社会はより全体主義化しやすいという考え方や、ロバート・パットナム(2006)による社会関係資本の効用を主張する考え方と通じるものがある。コーンハウザーを訳した辻村は『自由からの逃走』で日高が訳に貢献した旨を感謝されており事実上の翻訳者でもある他、ソ連の機関紙「プラウダ」を用いてロシア語を読み解きながら如何にプロパガンダが行われているかを分析する研究を行った人物でもある。

ている。

加藤は『思想』に「ある家族のコミュニケーション生活 マス・コミュニケーション過程における小集団の問題」という論文を寄稿し、エリフ・カッツ (Elihu Katz) (1926～) とポール・ラザースフェルト (Paul Lazarsfeld) に (1901～1976) よる「コミュニケーションの二段の流れ仮説」の日本での実証を試みている(加藤 1977)。二段のコミュニケーションの流れ仮説とは、マスメディアが一般の人々に対して直接効果をもつ(弾丸理論)のではなく、小集団におけるオピニオン・リーダーを媒介して間接的に影響するという仮説である。加藤はカッツとラザースフェルトの仮説に基づきながら、マスメディアと小集団内でのコミュニケーションの関係がどうなっているのかの分析を「より良いコミュニケーションの在り方の模索」という形でめざした。この論文の結論部分では生活つくり方運動などの小集団・サークルがマスコミと対立的ではなく、むしろ二段のコミュニケーションの中で「浄水場として」マスコミの情報を濾過しながら有効に活用していることを論じている。

以上の点から、「刊行のことば」の思想である読者自ら知識をもとに考えるようになるという方針は、メディアに流されず逆にメディアの情報を有効利用できる人間を作ることにつながる。

こうしたサークルのあり方は 3.6 で触れたように、そもそも鶴見俊輔が思想の科学研究会を運営するにあたって重要視していた発想であり、加藤も思想の科学研究会に入っていたことに鑑みれば、専門家と大衆とをつなぐ媒介＝中間文化としてサークルが機能するという考え方との親和性も指摘できる。そして、サークルが発展することはますます中公新書の市場を拡大することに繋がるという正のループが発生する構造になっている。そのため、中間文化の担い手をターゲットにするマーケティング戦略としては加藤のメディア戦略は上手なものであるといえる。

加藤が『中間文化論』を執筆した 1957 年の段階ですでに神武景気 (1954～1957) と呼ばれる好景気が発生していたが、その後にも岩戸景気 (1958～1961)、オリンピック景気 (1962～1964)、いざなぎ景気 (1965～1970) と呼ばれる好景気が断続的に続き高度経済成長に突入したことでますます社会の中間文化化は進展した。すなわち、中公新書の経営戦略は講談社と岩波書店の間を狙うニッチ戦略でありながらも、アメリカでの生活経験から日本が豊かになると見抜いた加藤の先見の明により、巨大な市場への発展の予測に成功した。また、中間文化がもつ大衆社会の健全化による全体主義化の防止機能についても、中央公論社が戦時中に受けた言論弾圧(横浜事件⁵⁴)による雑誌『中央公論』の廃刊や戦

⁵⁴ 1942 年に、左派の色が強い改造社による総合雑誌『改造』に掲載された細川嘉六(ジャーナリスト、政治学者、戦後日本共産党参議院議員)による論文「世界史の動向と日本」が共産主義的と言われて細川が治安維持法違反で逮捕されたのをきっかけに、細川を囲んで出版記念での宴会時に撮影された写真が禁止されていた共産党再結成を行おうとしていた証拠とされて、細川に親しい関係者も次々と逮捕され、『改造』及び『中央公論』が

後の風流夢譚事件などを勘案すれば、加藤のメディア戦略は中央公論社の会社文化とも合致するものであると解釈できよう。以上により、2 つ目の作業仮説、②加藤が中公新書に込めたメディア戦略と中間文化論との関係を探ることができた。これは加藤の独自性である。加藤が江藤・大江・藤田に理不尽に迫害されるのは、加藤が先見者であるか否かを探るといふ研究目的に近接することが出来た。

1944年に廃刊となった一連の事件であるが、獄死者が出る程の拷問を行った神奈川県警察の特高にちなんで横浜事件と呼ばれた。『中央公論』が復活したのは戦後の1946年である。

5 加藤秀俊の先達としての中井正一

5.1 中井論の前提である認知論と4章までの議論の再整理

1章から説明している通り、加藤が江藤・大江・藤田に理不尽に迫害された理由は、加藤が先見者であるからなのか探求することが研究目的である。研究目的を構成する加藤の独自性に関する作業仮説のうち、3章で①実感論争における加藤と他の論者との距離を単に実感に対する是非のみならず他人指向型への是非から捉える作業によって加藤の立ち位置を明確に炙り出すこと、4章で②加藤が中公新書に込めたメディア戦略と中間文化論との関係を探ること、をそれぞれ解明した。そのため、本章では最後の作業仮説である③以上の点を踏まえた上で新たに認知的不協和とミッテルの観点から中井正一と比較して見えるものを考察することになる。本章では加藤と中井正一と対比させて両者に共通する特徴を見出すことを試みる。その手がかりが中井のメディアウムとミッテルに関する議論であるが、メディアウム及びミッテル共に中井独自の術語である。そのため、加藤との共通基盤を考えるにあたって認知心理学における認知資源・認知的不協和論を下地にしたほうが説明がしやすい。藤田や江藤・大江が加藤に激しく反発した場面が出てくる①は認知的不協和、中公新書を他者との媒介の手段として用いるという説明をした②はミッテル論にそれぞれ該当する。そこで本節では前章までの議論を、1章で既に触れている認知資源論・認知的不協和論に接続させて、1章よりも詳細に説明するところから議論を始める。

認知資源とは、その文字の通り、認知行為を行う際の精神的負担をどこまで脳が可能であるかを資源として考える見方(箱田 2010:166)である。集中力や注意力といったものは、認知資源を消費することでできる。高い集中力を要求される仕事を長時間行って疲れ果てているときに、勉強をする余裕がなかったり、階段から足を踏み外してしまいやすくなったりすることも、脳の認知資源を使い果たしてしまったからである、と説明できる。

認知的不協和理論とは、社会心理学者であるレオン・フェスティンガー(Leon Festinger)が提示(1957=1965)したものである。認知が矛盾を起こしている状態は強く認知資源を消費するため、ストレスを感じてその認知を解消することを促しやすくする、というものである。例えば、1「喫煙をしたい」が2「喫煙することは体に悪いことである」と知っている場合、自分のしたいことが自分の悪影響を及ぼすと脳が判断しその矛盾から不快感が発生する。そのため、1を変更し3「禁煙をし」だすか、2を4「喫煙による害はたいしたことがない、嘘である」といった形に変更する誘因が発生する、というものである。タバコはニコチンによる中毒性があるため、1を3に変更するよりは2を4に変更しやすい、すなわち楽な方に流されがちである人間心理をうまく説明したものになっている。

それではいよいよ前章までの議論を認知資源・認知的不協和論の考え方をを用いて再解釈を行っていく。他人指向型的な、このような自主的なコミュニケーションによるサークルの形成は、いわゆる経験学習(松尾(2011))と呼ばれる考え方に親和的である。松尾の経

験学習論は、組織内での経験を内省し振り返ることで古い硬直した考えをアンラーニングし、他者の視点を加えつつも自分の感情や目標を再確認していくことを続けるというものであるが、経営学では松尾以前から、野中郁次郎及び竹内弘高 やピーター・M・センゲ ((Peter Michael Senge) らが、マイケル・ポーター (Michael Porter) に代表されるポジショニングよりも組織内での経験学習によって人材が成長するケイパビリティ論を重視する考えを主張している (ミンツバーグほか(2008=2012))。

同様にケイパビリティ論の立場に立って人間が組織の中で学習することを理論化した野中・竹内のSECIプロセス論 (1995=1996) は マイケル・ポランニー (Michael Polanyi) の暗黙知論 (ポランニー 1966=2003) を用いて、暗黙知と形式知を相互に変換させる一連のスパイラル的な流れを経営学の中に位置づけたものであり、共同化、表出化、結合化、内面化を繰り返していくものであるというモデルである。野中・竹内と同様に組織内学習を論じたセンゲによる『学習する組織』(2006=2011)では、共有地の悲劇に代表されるミクロ・マクロの社会的ジレンマ構造となるような、ミクロの合理性の追求がマクロの最適化とバッティングするようなメカニズムを見破るために、社会システムのループ状となっている仕組みを強く認識するシステム思考の考えを導入する。そして、組織内での学習を通じて組織全体や組織に属する個々の当初の考え方の癖や偏見であるメンタルモデルをまずは自覚し、変化・改善していくことを目指し、チーム内での対話を通じて社員同士の学習を促していくというものである。松尾、野中・竹内、センゲらのスタイルは現代経営学では組織学習論として編成 (安藤 2019) されているが、ミクロ・マクロ間で事象と法則とが異なりつつも両方で相互に連動しているという大まかな特徴がある。

以上のような経験学習・組織学習論は加藤の議論と親和的である。まずその背景として、経営組織論上での知識の重要性 (ナレッジマネジメント論) は、古くはピーター・ファーディナンド・ドラッカー (Peter Ferdinand Drucker) やアルビン・トフラー (Alvin Toffler) などが産業社会論 (稲葉 2018) と呼ばれる分野を論じる際に知識が産業社会の中で重要であることを示していることで発生したのが由来である。この経営組織論上でのナレッジマネジメント論はトフラーやダニエル・ベル (Daniel Bell)、梅棹忠夫らが唱えた情報社会論と連続的であり、コンピューター社会と情報量の増大という現象を説明していた。梅棹は加藤の京都大学人文科学研究所での先輩であり、情報社会化について最初期に論じた (加藤 1963) 一人でもある。

また、加藤の発想は経験学習的なものである。加藤は大学教員として学生を教育しつつも、上からの教育だけではない、学生側の自主行動である学習を重視する議論 (学習科学論) を『独学のすすめ』で展開している (加藤 1975=2009)。また、加藤は図書館の使い方や調べものの方法といった図書館サービス・情報サービスの活用法も『取材学』で詳しく言及 (加藤 1975) しており、加藤の学習科学論は机上の空論ではなく実際の経験とテクニクとが合わさったものになっていると評価ができる。中間文化論、他人指向型、新書文化による中間集団の構築、プラグマティズムといった前章までの議論とこれら認知資源およ

び学習科学論は親和性がある。

教育学分野での学習科学論と経営学で扱われる経験学習論は共に実務的な視点を持ち、教師による上からただ一方的に与えられる教育ではなく自らが主体的に学んで試行錯誤することを重視する点で共通の基盤を持つ。両者の違いは、前者は図書館情報学なども含む生涯学習論を中心に教育学的文脈で使われるものであるのに対して、後者は経営学での組織内学習で使われるものであるという点にある。以下、本稿では教育学あるいは経営学どちらかの立場に立つわけではないので、両者を同等の機能を果たすものとして、並列的に扱う。

加藤の学習科学・経験学習的な姿勢は著述の中でもよく表れている。加藤の文章は淡々と具体的な経験・事実を丁寧に記述することに終始することが多く、その際にその事例を何かの理論に当てはまる、といった形の説明をすることは少ない。その上で扱う経験や事例は数多く、様々なエピソードがちりばめられていっている。通常、そうした書き方は事実の羅列になるだけになりがちであるが、加藤はミクロな事象を集めた記述全体によってマクロな社会とは何なのかが浮かび上がるような工夫を施している。この書き方は柳田国男の民俗学と同様の手法であり、柳田の『明治大正史 世相篇』(2001)では加藤自らが解説を書いてこのことを触れている。つまり、柳田が開発したミクロな記述を集めて適切に配列することでマクロな社会を描く手法を加藤は学び、社会学に応用したこととなる。野中やセンゲなどが言うようにミクロの観察とマクロな分析は両者は質的に異なるものだが、両者を繋げることができるという点で、ここでも加藤は一貫している。具体的にはどのような方法で結びつけているのだろうか。

筒井清忠編『日本の歴史社会学』(1999)は日本人の歴史社会的な文献を著作ごとにとりあげて解説している本であるが、その中で佐藤哲彦は加藤秀俊『世相史』(1981)を挙げている。佐藤は加藤の文章を「彼の作品の最大の魅力は、実はその文章の平易さと明晰さにある。そのような彼の著作を要約し紹介することは、精神的には極めて「しんどい」作業だった。いってみれば、秋刀魚の骨を見てそれを美味しそうだと思えというような無理難題に近い。彼の文章の魅力が、この拙い紹介では全く伝え切れていない—せいぜいそれが本当に秋刀魚なのだということ程度しか伝えられていない—ことを悔やむばかりである」(佐藤 1999:315)と表現している。本稿で触れる柳田民俗学的方法を佐藤も「方法なき方法」と名付け、加藤がフィールドワークで得た経験やデータの集合体が社会学理論のような一般性に通じていることを論じている。

加藤自身、柳田著『明治大正史 世相篇』の解説で「その結果、この書物のなかには新聞記事からの引用や言及はきわめてすくなく、そのかわりに柳田がみずからの鋭敏な観察にもとづいて同時代に巨視的な傾向線をひくことによって「世相」をみるという手法がとられたのであった」と書いており、加藤自身方法論に自覚的でありながら各論考を執筆していたことが分かる。加藤にとって社会全体という巨大な対象を、自分が観察できる範囲のミクロな経験の積み重ねで説明することは、巨視的な傾向線(=マクロ)という方法によ

ってできるものであると考えられている。要は、ミクロの事象の中からマクロな法則を説明できる要素を見つけて結びつけることで両者のギャップを埋めることである。加藤は、柳田がミクロ面では中部山岳地帯で米、塩、魚などの荷物を運搬するボッカの姿を精密に描きながら、マクロとしては風来坊の日本社会での役割を見事に説明していると讃えている。加藤が採用した柳田の方法論とは、具体的な事実から抽象的な理論へと橋渡しをするという点で帰納法やアブダクションの手法と通じるものであるが、自らが経験し考えることを重視する学習科学・経験学習的な姿勢でもある。加藤の『独学のすすめ』や『取材学』に代表される学習科学・経験学習的な姿勢は、現代でも十分通用しうる議論である。

加藤の学習科学・経験学習的な姿勢は新しく人間関係を形成しサークルを成立させたり、自学自習することで新たな知識を学び経験をしたり、ということをして是とする考え方であり、これは後述する中井正一の組織論・コミュニケーション論である「委員会の論理」(1936)と似たものである。当然、他者との交流や新しい知識や経験は今までの自分の考え方に合わないものや、説明できないものとの接触が増えることになる。その中には認知資源を多大に消費し、認知的不協和を引き起こすものも当然存在することになる。このときに学習で認知資源を大量に消費することで疲労が発生しそれ以上学習することを放棄したり、認知的不協和によって現実を受け止めずに無視して誤った認知へと飛びついたりする、ということは人間が行いがちなことである。加藤の健全な提言は、じつは認知資源を大いに消費させるハードワークに外ならず、人間にとって難易度の高い行為でもある。野中・竹内やセンゲらの組織学習論が長く世界中で受け入れられているにもかかわらず、企業内トラブルが絶えないことも、こうした学習科学的行為は強靱な精神や十分に余裕ある認知資源、認知的不協和に耐えることが出来るような豊かな教養や経験値が必要であり、多くの人間には困難であることの傍証にもなっているといえよう。

5.2 中井正一のメディウム、ミッテル、メディウムに支えられたミッテル論

この節では、中井正一の議論⁵⁵の中でもメディウムとミッテルについて整理する。その

⁵⁵ 中井の論考は全四巻の全集に収録されている。美術出版社より1964年から出版され、1981年に完結している。何れの巻でも久野収が編者として携わっている。ただし最初の出した巻が1964年、次に出た巻が1965年で、それからなぜか16年空けて1981年ようやく第1巻と第4巻が出ていて、前半の1/3以外が図書館論中心の第4巻は、国立国会図書館職員でJICST（科学技術情報センター）出向中の中井浩（のちJICST理事、常磐大学教授、中井正一の長男）が実質多く編集していると思われる。なお木下長宏（1995）はこの全集に収録漏れの著作がいくつかあり、また仮名遣い表記等も、初出雑誌と異なり、新字体新仮名遣いに改める方法が恣意的であると批判しているが、後藤（2005）は、彼の父親の最初の単著『陥没の世代』（中央公論社、1957、新書版）出版仲介の労をとった久野に恩義を感じているので、この木下の批判の妥当性は認めつつも全体として見れば些末なこととして基本的に一蹴している。なお岩波文庫になった長田弘編『中井正一評論集』（1995）も全集を底本とするとの断り書きがついているが、全集に収録漏れの重要な論文

前に、中井について最小限度の説明を行ってから本題に入っていく。中井は京都帝国大学文学部哲学科で美学・美術史を学び、京都学派左派の立場から様々な評論活動を行った美学者である。戦時中に反ファシズムの人民戦線を組織したが、コミンテルンと通じていたとの誤情報を得た官憲により1937年治安維持法違反容疑で検挙され、執行猶予付きの有罪判決を受け、終戦間際まで当局の監視下に置かれた。終戦間際の1945年6月から尾道市立図書館長となり、戦後は、講座派マルクス主義者で、参議院議員・参議院図書館運営委員会委員長になっていた史学者羽仁五郎の推薦によって、1948年、国立国会図書館の初代副館長⁵⁶となり、1952年に亡くなるまでのあいだ図書館行政に携わった。戦前からの言論活動や戦後の図書館行政に至るまで、さまざまな形でメディアに関与してきたと評することができる。

なお、戦前は雑誌『世界文化』（1935-37）、隔週刊新聞『土曜日』（1936-37）というメディアを中井は主宰し、瀧川事件（1933）後のファシズム的な学問・文化への圧力の強化に抵抗する人民戦線を中井は組織化したが、『世界文化』同人には、自由主義者、マルクス主義者、キリスト教徒が加わり、合評会等では喧々諤々と議論しつつそのあとの宴席では和気藹藹と酒を酌み交わし呉越同舟的に手を取り合っていた。特にその当時の中井の後見人とも目された住谷悦治は、内村鑑三の非戦論に共鳴した著名な牧師住谷天来の甥で、キリスト教徒でありつつ労農派マルクス主義者でもあり（通常、双方は水と油の関係とされるが）、戦後は同志社総長にもなった人物である。また同人で同志社予科教授の和田洋一はキリスト教徒でなおかつ内村鑑三の義理の甥でもある。なお中井自身は浄土真宗の篤信家で、自由主義者であった。このように自由主義者、マルクス主義者、キリスト教徒が論争をしつつも手を携え、人民戦線を形成しているのが、同人誌『世界文化』であり、その同人誌を事実上主宰しているのが中井であった。

その意味で、中井は加藤同様に認知的不協和の理論に親和的というか、認知的不協和になりにくい、いいかえると認知的不協和に対する耐性・タフネス性を強く持たざるを得ない経歴を辿ってきた人物である。多様な思想を中井自身が背景に持ちつつ、また中井の周囲も様々な思想を持っている人物が揃っている環境であり、その上で思想の違いを認識し意見を戦わせつつも、なんとか協働行為を行ってきたということは、中井が他者との交流や新しい知識を学習することで認知資源を大量に消費させてきたであろうことを示しているからである。また、戦後の国立国会図書館においては、戦前の治安維持法違反での逮捕

「気（け、き）の日本語としての変遷」も収めている。なお中公文庫から出された『美学入門』（2010）（解説・後藤嘉宏）は、中公文庫の編集部が初出の河出市民文庫版（1951）を忠実に新字体新仮名遣いに改めている、木下の批判に呼応している。

⁵⁶ 羽仁は中井を館長に推薦しようとし、中井の親友新村猛の父親新村出京大元図書館長の推薦状を得ることで、参議院の総意を得るが、中井の政治的立場が左派であることを理由に衆議院の反対に遭い、中井は副館長としておさまり、代わりの館長として戦前からのリベラル派で憲法担当国务大臣も務めた金森徳次郎が就任した。

歴や講座派の羽仁議員の推薦ということもあり、「アカ」の副館長を排斥しようというビラ攻撃にも見舞われてきた。その点でも彼の言論活動の着想には、異論に耐えるという寛容の精神⁵⁷が強く背景にある。

中井と加藤は共に思想の科学研究会の創設から比較的日の浅い段階から同研究会に加わったという点でも、共通項を有する。しかも雑誌『思想の科学』は1947年10月から、戦前建国大学で「新聞政策」「弘報論」を教えていた井口一郎を編集長に迎え、編集長井口の意向もあって、雑誌がコミュニケーション論、マス・コミュニケーション論に深く関与してきたことは、田村紀雄の論じるところでもある。井口はこの雑誌で日本では真新しかったアメリカのコミュニケーション学の紹介に務め、加藤の指導教員となる南博ら新進気鋭の専門家に寄稿させると同時に、自らも同誌掲載の「コミュニケーション序説—ラスウェルの方法論について」等で、アメリカの最新の学説を紹介したと田村はいう。井口についての論考の末尾の方では次のように田村は記す。「一連の思想の科学研究会会員の言説をよんでいると、井口によってもたらされた、コミュニケーションの用語、概念がまず思想の科学研究会のメンバーにつよい衝撃だったことがわかる」（田村 2012:132）。実際、編集長を辞してからの著書であるが、井口の『マス・コミュニケーション』（1951）は、元東大新聞研究所所長の竹内郁郎が学会の回顧・展望の論文において、「『マス・コミュニケーション』という名を最初に冠した単行本」（竹内 1998:5）と評していて、またこの井口の著作に対して「これは本当に衝撃的な本でした」（内山・有山・乾 2003:159）と証言する、やはり東大新聞研究所元所長の内川芳美は、井口をはじめとする思想の科学研究会の関係者が、コミュニケーション、マス・コミュニケーションという用語を使い始めたことにも当時強い印象を受けたと語っていて、その意味でも田村の上述の発言は裏づけられる。

中井は戦前から戦後にかけて様々な分野の論考を執筆した人物であるが、中井を貫く問題意識の一つとして、加藤も専門としたコミュニケーション論の基礎ともなっている媒介論がある。認知と媒介のつながりは例えば極端な例として、優れたプロパガンダを發した毛沢東の『矛盾論』『実践論』が好例として挙げられる。毛は媒介行為による学習効果や認知への作用を論じており、認知と媒介によってどのように社会が変動するかという現象を射程に入れている。こうした側面を持つ媒介について中井が論じる際に、同じ媒介を意味する単語でもメディアウムとミッテルという二つの用語を使い分けている。メディアウムとミッテルがどういう意味か、またメディアウムとミッテルに対してどういう評価を中井がしているかは時期や論考によってズレがあり、統一した中井の立場があるとはいえないが、およそについては後藤(2005、2016、2019)がまとめているので、この整理をもとに認知資源論や認知的不協和理論との接続を目指す。

中井はメディアウムとミッテルをモノとコト、すなわち静的・動的という二項対立で表現

⁵⁷ 英語の tolerate（耐える）の派生語として tolerance（寛容）があることから、耐えることと寛容とは語源的にも結びつく。

している。メディアムをただ単にあるものとあるものとの間・中間だけでしかないという意味での媒介の意味であるとし、ミッテルはあるものとあるものを媒介する行為としての媒介の意味を持つとした。メディアムの具体例は本や知識人、知識といった中間に存在するものであり、一方向的、あるいは動きの少ないものである。他方、ミッテルは相互交流的で双方向性的である。以上の対比を前提とした上で、認知資源が多く、自己の主張を場合によって控えながら集団の主張、集団的主体を育む実践を人民戦線においても国立国会図書館においても果たしてきた中井は、相互交流や実践を重んじるだけに、メディアムよりもミッテルをより大事なものとみなし、メディアムからミッテルへ、という大まかな志向性を持っている。以上の整理を後藤は以下の表7⁵⁸で表している。

表7：メディアムとミッテルの見取り図（（後藤 2019:90）より）

	メディアムの	ミッテル的
1	媒介物・媒体	媒介する、コミュニケーションする
2	モノ的	コト的
3	固定	流動
4	理論・体系	実践・素材
5	知識人	大衆
6	本	会話
7	安定的、自己肯定的	自己否定的
8	身分的、固定的	流動的
9	実体概念的	機能概念的
10	知識人と大衆の断絶性	知識人と大衆の互換性
11	一方向性	双方向性
12	間接性	直接性（透明性）
13	内なる弁証法	外なる弁証法

中井はヘーゲルの弁証法における（正⇔反）→合の図式を前提にしており、メディアムは静的なので正と反の間において媒介項・仲人的な立場で両者を取り持つという、図式でいうところの⇔の部分に該当する。一方でミッテルは動的で相互のコミュニケーションの結果、正と反がお互いに批判し合い、合へとなっていく、→の部分に該当する。ミッテルでは媒介「する」という行為の側面が強い。

以上の表の延長として前章までの議論、学習科学やシステム思考、認知的不協和などの概念を代入して、ミッテルとメディアムの対比の議論を組織論や認知資源論と連結させた

⁵⁸ 後藤のこうした分類学的な類型論に対して、現在後藤が会長を務める思想の科学研究会の事務局長である本間伸一郎(2021)は後藤(2019)を読み込んだ上で、固定的に考えすぎて実体概念を目指すものになってはないかと批判し、機能概念としてメディアムとミッテルを考えるべきではないかと述べた。それに対して後藤(2021a)は、本間の主張を受け止めつつも、分類学的な類型論がそもそも機能概念的なものであると述べて本間の批判が空回りに終わっている面もありうると指摘している。

らどようになるだろうか。加藤らの「学習科学的」な姿勢の対立項は何かを考えると、それは「教員による上からの教育」が想定される。「学習科学」では双方向性を重視し新しく学ぶたびにそれまでの自分の殻を破壊し成長させるのに対して、「教員による上からの教育」は一方的である。表1の11行目より、双方向性がミッテル、一方方向性がメEDIUMであるので、前者の学習科学がミッテル的であるのに対して、後者の「教員による上からの教育」はメEDIUM的になる。センゲや野中・竹内らが考える「学習する組織」は組織内の個々人の「学習科学」的活動を組織的に支えるのに対して、その対立項は「上下関係で動く官僚制組織」で、後者は一方的であるのでメEDIUM的になる。「学習する組織」で必要なマクロで複雑なシステムをループ状に把握する「システム思考」の対立項は、単純な原因・結果モデルである「因果論」である。加藤が師事したリースマンの類型論に即していえば、柔軟性に富んで異なる他者と交わり協調していく「他人指向型」に対しては、自分の考えを強く持つ「内部指向型」が想定される。「他人指向型」は、自分の考えに凝り固まらないので、表1の7行目の「自己否定的」に通じ、ミッテルであるのに対して、「内部指向型」は「安定的、自己肯定的」であるのでメEDIUMになる。以上の対比は学習科学と教員による上からの教育との対比同様、前者がミッテル的であり、後者はメEDIUM的であるとまとめることができる。さらに、ミッテルは認知資源の消費が大きく認知的不協和を起こしやすいので十分なタフネス性をもとに耐性がある状態を想定するが、メEDIUMでは認知資源の消費が小さい代わりにそもそも認知的不協和を回避することに親和的である。以上の事項を表にまとめると以下の表8のようになる。

表8：メEDIUMとミッテルの見取り図拡張版1

	メEDIUM的	ミッテル的
14	教員による上からの教育的	学習科学的
15	官僚制組織的	学習する組織的
16	因果論的	システム思考的
17	内部指向型的	他人指向型的
18	認知資源消費小	認知資源消費大
19	認知的不協和から回避的	認知的不協和に対する耐性が十分ある

一方で、中井がミッテルを常に礼賛しているとも限らない、という複雑な側面もある。杉山(1983)は中井の中でもメEDIUMに親和的な側面にも着目し、「メEDIUMに支えられたミッテル」という立場も併存していることを示した。さらに杉山は「メEDIUMに支えられたミッテル」の立場を出した中井の論考「農村の思想」が1951年という最晩年のものであることに着目し、それまでの通説(例えば、稲葉(1987))である「メEDIUMからミッテル」を中井が唱え続けたと解釈する立場を批判し、最晩年に中井は転向したものであると考えた。

杉山が唱えた「メEDIUMに支えられたミッテル」とは、確かに「メEDIUMからミッ

テル」と対比的に論じられている。しかし、「メデイウムに支えられたミッテル」もまた大まかには「メデイウムからミッテル」の流れ自体には乗っかっている（「メデイウムから『メデイウムに支えられた』ミッテル」という意味で）という点で、共通項も大きい。その上でどういう違いがあるかといえ、もし「メデイウムからミッテル」をやりすぎてメデイウムがなくなると理論や体系性がなくなり状況に流されがちな機会主義的なものになってしまう、という問題を認識し、さらにそれを阻止しようとする発想の有無である。

杉山によれば、メデイウムが一切存在せずにミッテルしかない状態は、それはそれで問題が発生するという。具体的には、中井は 1945-48 年、広島県の農村で文化運動をし、青年への夏期講座等を主宰し、中井自身はそこでカント講座を受け持ったが、そこで目覚めたはずの若者が両親らに接するとまた「封建遺制」⁵⁹に囚われた行動を再び始めるとい、ある意味での挫折を経験して、国立国会図書館に転身した。国立国会図書館に在職中の最晩年、その反省を籠めた「農村の思想」（1951）という小文を書く。その「農村の思想」において、農村の人びとはミッテルだけでそれを相対化する「思想としての体系的基盤が欠けている」（中井 1981b:151）と、中井が言及した点に、杉山は着目する（杉山 1983:157）。この「思想としての体系的基盤が欠けている」という中井の言葉は、ミッテルだけになれば、理論や体系性がなくなって状況に流されがちになり機会主義的になるということを指す。そうなった場合、結果的に知識人の立つ立場を失わせ、大衆と媒介するミッテルがかえって不可能になってしまうのではないか、結局は理論と実践、すなわちミッテルだけでなくメデイウムも含めてどちらも必要だ、という立場を中井は採用したのではないか、というものが杉山の主張になる。稲葉の唱えた「メデイウムからミッテルへ」という中井解釈に対する大きな問題提起を、杉山は「ミッテルだけではミッテルが求めるものができなくなる」という形で行ったことになる。いいかえると稲葉の視点のみでは機会主義的になる可能性があり、それへの対応も込めた発想をしているのが杉山であると、ここで評することができる。

後藤はこの杉山の議論を稲葉の議論と共に参照・比較・検討を繰り返して、結論としては稲葉と杉山どちらも当たっている面があると結論づけている（後藤 2016、2019）。中井は稲葉のいうように大まかには「メデイウムからミッテル」の流れを指向しており、中井がメインの分野と考えている美学・美術分野や晩年に携わった図書館論の議論では「メデ

⁵⁹中井の視点では、青年たちの両親をはじめとする農村の人びとが前近代的な思考を色濃く残すことは封建遺制と理解されたが、封建遺制はあくまで講座派の影響を受けた当時のインテリ用語・概念であり、中世日本に存在した封建制度や封建制度を支えた思想そのものと重なるわけではない。なお、中井はマルクス主義者ではないが、第三高等学校弁論部での友人が服部之総で、服部が京都に戻る機会にはしばしば会って当時中井宅に居候していた自分は席を外させられたと、久野収が証言しており、中井を国立国会図書館副館長に推薦した羽仁五郎も服部同様、講座派の代表的論客であった。つまり、中井本人の思想とは別に、周囲の環境上講座派的な専門用語を自然と使いやすい土壌があったことは確かである。

ィウムからミッテル」の傾向が著しい。一方で確かに、杉山が見出した論拠以外の、出版論でも「メデイウムに支えられたミッテル」を主張する部分が、時期をまたいで存在していることも指摘している。後藤自身、中井が「メデイウムからミッテル」か「メデイウムに支えられたミッテル」のどちらの要素が強かったのか、彼の論文の執筆ごとに判断が揺れている。それは永遠に決着できない問題かもしれないが、本稿では加藤と中井の共通項を、フェスティンガーやグレゴリー・ベイトソン (Gregory Bateson)、戦略論 (毛沢東 (毛泽东)、等) の議論を補助線として見ていくことによって、この問題をよりメタレベルで捉えることが可能となり、一つの解決の糸口を見出すことにもつながりうるとも考えている⁶⁰。

5.3 中井正一の図書館論 加藤秀俊の『整理学』との比較

この節では中井の図書館論を扱い、加藤が図書館について論じている『整理学』との比較を試みる。そのことによって、中井と加藤が共に認知資源が豊富で認知的不協和に対して耐久力がある人物であることが、それぞれの図書館論にどのような影響を与えているかを吟味する。

中井は国立国会図書館の副館長として、図書館業界の内側の人間として戦後図書館制度の構築を図る立場にあった。中井はそれまでの言説やキャリアを背景にしながらも、最晩年は積極的に図書館を対象に論じていたのである。中井は戦前の段階で既に組織論としての側面もある「委員会の論理」を発表している他、メデイウムとミッテル、戦後になると三木清の『構想力の論理』に対する検討を行っている。これらの議論が具体的な制度構築論として発展したものが中井の図書館論である。

中井の図書館論は後藤(2005)が纏めている。中井は本業は美学者であるので、制度構築は不慣れな仕事であった。その中で、自分の主張である「メデイウムからミッテルへ」「(メデイウムを扱うにしても)メデイウムに支えられたミッテルとして」という立場に基づいて、国立国会図書館支部図書館制度を構想し、各省庁の官僚が独占する官庁資料への国会議員のアクセスの道を切り開くことを意図していた。なお、国会が国権の最高機関であるのは、国会議員が国民の代表であるからであり、国会議員へのアクセスチャンネル

⁶⁰ 問題が決着したら問いは閉じられてしまい、メデイウムのであると考えると、永遠に終わらない問いはミッテル的である、といういい方は可能である。実際、中井の「委員会の論理」(1936)の最終節は、問と答えの永遠の螺旋状ループにも譬えられている(後藤2018)。もちろん、ミッテル的だ、という答えが永続化すればメデイウムのものに転じるという逆説がある。本論ではそうした逆説に対して、フェスティンガーやベイトソン、毛沢東などの戦略論と接続する形でミッテルとメデイウムに支えられたミッテルを相補的に使い分けることが戦略論的であると、そうした戦略論的立場を採用する場合、使い分け自体は永遠に終わらず、その原則も不明瞭なままであることから、メタな視点からミッテル的であることを示唆した。

が開かれることは、間接民主制のもとに国民の眼に、官庁の独占していた情報がガラス張りになる可能性を意味する。官庁資料へのアクセスが自由になることで一般人である国民と官僚の立場は平等になり、ミッテル的な社会へと近接するからである。その上で後藤は、中井がミッテル論を突き詰めることで戦後直後の時期にすでに電子図書館の様なネットワーク社会を先取りしていたと指摘する。それは実質的に社会の発展と複雑化による分業社会化・情報社会化の予見とその対策としての図書館、という当時としては斬新なアイデアへの到達であった。

一方で、図書館員は中立（メディウム）的でありつつ自律（ミッテル）的であることを求められることで、組織制度を構築するにあたってメディウムとミッテル双方の必要性を痛感することになったという、中井にとって複雑な感情が見え隠れする。後藤は中井の最晩年、在野に降りた三木清を共に高く評価する仲間である久野収にアカデミアでの美学ポストを欲する発言をするなど、明確な方向への志向、すなわちメディウムのものを求めるという矛盾した態度を示したことを挙げている。

確かにこれは杉山が言うように「メディウムに支えられたミッテル」と解釈することも可能である。ただ、これを認知資源・認知的不協和の視点から再解釈した場合どうであろうか。中井は「委員会の論理」で組織や集団の維持発展、活性化のために様々な時代の在り方としての論理を統合しつつミッテル的な形で開かれたものにしたいという展望を持っていた。つまり、中井にとっての理想は野中ら経験学習の立場と同様、組織や集団が自ら認知資源の限りを尽くして認知的不協和をサイクル的に乗り越え続けよ、というものとなる。

杉山説と稲葉説を相補的に解釈すれば、ミッテル志向を維持しつつ、図書館制度構築に携わることでメディウム要素の必要性を学んだことで、中井の中で認知的不協和が発生し、不協和の発生を戦略論的視点の導入で解消したものと言えるのではないか。つまり、中井はメディウムの必要性をミッテルの中に溶かし込む際に、単に「メディウムの支えられたミッテル」に渋々転向したのではなく、戦略論的視点によって常にミッテルか「メディウムに支えられたミッテル」かを常に選ぶことが出来るようにすることで、ミッテル志向を維持することに成功したと考えられるのである。「委員会の論理」の段階ではあくまで小規模な雑誌及び新聞編集での経験しかなかった中井であるが、国立国会図書館という多くの人数をかかえる組織をマネジメントし、グランドデザインを策定する経験を初めてすることになった。経験学習的なものを大切にしている主張をしていた中井にとっても、大組織のマネジメントとグランドデザインという難題を経験学習することは確かに困難であった。それを中井は見事に乗り越えた結果が戦略論的視点の導入による、メディウム要素さえミッテルの中に落とし込みながらも、杉山説の様なメディウムへの接近を目的とせずミッテルの徹底という形で行うという、よりマクロな構造の発見につながった。

中井の図書館論に対して、加藤の図書館論はどうだろうか。加藤は『整理学』で図書館で使われる情報資源組織論的な知識、即ち目録法や日本十進分類法などを紹介している。

さらに『取材学』では欲しい情報をいかに探すかという観点から参考図書の扱い方や情報の調べ方などを中心に扱い、レファレンスサービスを筆頭とする情報サービス論的な話題を紹介している。

加藤は中井の図書館界での活躍時期と同時期にGHQのCIEが設置した図書館で働いた経験がある他、『整理学』で中井の著作を引用し言及している。中井と比較すれば、中井は国会図書館の副館長という制度設計側の経験をしている一方で、加藤は大学生のバイトとして携わり自らも図書館の利用者でもあるというユーザー側としての視点が強い。戦後図書館制度の最初期の文章しかない中井に対して、加藤が『整理学』を書いたのは『中小レポート』と同年であり、戦後図書館制度と社会の分業化の大幅な進展と情報社会化の定着をより観測することが出来ている。そのため、加藤が出す具体的なエピソードやケーススタディは幅広く実践的であり、どういうときにどうすべきかの指針を立てやすいものが揃っている。これらの事例と制度の説明を通じて、経験学習できる賢いユーザーへと読者を成長させようと企てている。中井と異なりユーザー視点とはいえ、認知的不協和を乗り越えることができるタフネスさを身に付けさせようとしている点では中井と同じ目的を持っている。

中井と加藤の比較は以下のように纏められる。両者の相違点は、図書館に携わる立場・視点の違いである。中井はトップマネジメント・グランドデザイナーの視点に立っており、加藤は一職員ないしは利用者の視点から見ていた。また、中井は戦後初期に亡くなったため加藤と異なり高度経済成長下の日本の現実を観測することが出来なかった。共通点は、共に分業と協業、情報社会化を説いて情報の組織化の必要性を論じたこと、ミッテル的な経験学習をして認知的不協和を乗り越えるタフな学習者たるべきことを主張したことである。

中井は図書館を実際に支える司書について、諫官としての機能を持つようにするべきだと考えている。諫官については次節で扱う。

5.4 中井正一の諫官論

中井の諫官論については、後藤(2005)がまとめているので整理する。諫官とは、文字通り「諫める官吏」であるが、特に中国史上で言及される存在である。中国史では、王朝や時代ごとの変容があるにせよ、皇帝は強い権力を持ち臣下や民衆の生命や財産を大いに左右することができる存在である。その一方で、皇帝もまた人間であり、常にその政治的判断が正しいとは限らない。暗君ではなく明君(名君)であつても、常に正しい判断をできるとは限らず、それこそ認知資源上での限界や、認知的不協和を引き起こすことで誤った判断をすることは十分にありうる。例えば、唐の第二代皇帝である太宗は中華王朝史の中でも抜群の名君であるとの評価をされる人物であるが、権力争いで兄弟を肅清(玄武門の変)して安定的な権力を握ったという暗い側面もなくはない。中華王朝では皇帝に忠告し、

政治の得失について率直に、ときには厳しい意見を述べる諫官が設置された。唐の太宗にも魏徵・房玄齡・杜如晦・王珪などの名臣が諫官として太宗が誤ったことをしようとした際には容赦なく批判し、その対話録は唐代に『貞観政要』としてまとめられており、後の中華皇帝や日本の大名などに政治論の名著として読まれている。特に魏徵⁶¹は太宗を相手に激しく批判することも厭わず判断を最も撤回させた人物であり、後に太宗の数少ない失政の一つである高句麗遠征失敗時に「魏徵が生きていれば自分の愚策を撤回させてくれたらうに」と太宗を嘆かしめたことで知られる。太宗のような明君とされる人物であっても、諫官が機能しなければ失策をしてしまう可能性が高まる、という教訓にもなっている。

もちろん、諫官をしっかり重用して反省することができる太宗はそれだけで十分に明君としての器を持つと評価できるだろう。魏徵のような諫官による皇帝の判断への批判は真剣であり、その分皇帝が見聞きしたくない厳しい現実を突きつけることになる。これは皇帝の認知資源を著しく消費させて、場合によってはそのことによって認知的不協和が生じると、それによって認知と行動を悪い方向に変更させやすくすることにも繋がる。例えば、『春秋左氏伝』では以下のようなエピソード⁶²がある。斉の宰相である崔杼が君主を殺し、その弟を王位に就けて傀儡とした際に、公文書記録係である太史は「崔杼、其の君を弑す」と記述し、崔杼は激怒して太史を殺してしまう。次の太史は殺された太史の弟で、同様に「崔杼、其の君を弑す」と記述したので崔杼は次の太史も殺し、さらにその弟が次の太史になるも記述を曲げずついに記録が残ることが確定したので崔杼はついに諦めた。崔杼は宰相でナンバー2であるが、事実上トップの座にある十分な権力者であるといえる。このように権力者の気分を害する行動を取った場合は、死を覚悟しなければならない。特に、諫官は職務上命がけといっても過言ではない。

それでは、中井の諫官論とはどのようなものであろうか。中井は治安維持法違反で逮捕された後、執行猶予付き判決を得て、執行猶予期間終了後も、当局の監視下に置かれていた時期、北宋時代の司馬光『資治通鑑』を読み込んだ。中井は諫官が命を擲って諫言する点に感銘を受けている。中井自身は、マルクス主義者、自由主義者、キリスト教徒を纏めあげ、認知的不協和になりそうな人民戦線での状況を乗り越えつつ、日本を正しい方向に導こうとし、逮捕を覚悟して抵抗運動をしていた時期を振り返りながら、戦況の拡大期、蟄居の身ながらも自分らのそれまでの活動が政府に対する諫官の役割を担っていたと考え、この本を読み進めていたと考えられる⁶³。そして、戦後の中井の文章「国立国会図書

⁶¹ 太宗も年々傲慢になり、晩年には魏徵を疎んでいったことがわかっている（呉 2021）。

⁶² 孔子の弟子である左丘明が編集したともいわれる、『春秋』の注釈書である。

⁶³ 当時、『続国訳漢文大成』が国民文庫刊行会から出版されてその中に『資治通鑑』が含まれており、中井はこれを読むことができた（中井 1981b:115）。「組織への再編成」

（1950）で中井は次のように語る。「私は途中で二ヶ月ばかり巻を閉じて読むのをやめた。肉体的に痛くなったからである。自分が二年くらいの判決でビクつきながら自由を求めているのに、このインテリたちは、黙っていれば最高の官職で帝王の近側でいられるものを、一言ずついつて何の効果もないことが分かっている、なおも死んでゆくのである。

館の任務」(1948)は、死を覚悟しながらも職務をこなす諫官を肯定的に論じる。そして戦後の中井は、当時の日本の諫官として国立国会図書館職員を想定し、中華王朝における諫官と異なり、命を賭けずに済むことで自由に諫言できる、「知識人の夢」を体現できる存在であると語っている。「かかる奴隷的封建的な位置より放たれて、真に人間の自由な客観的知識として、政治に関与できるということは、いかに多くの、歴史の下積みとなって、悲しみ、憤った知識人の夢であったであろうか」(中井 1981b:216)。中井にとって国立国会図書館職員は中華王朝史上の諫官と異なり隷属的な立場で命を賭ける存在ではなくなったが、中華王朝においては皇帝、国立国会図書館においては国権の最高機関である国会に籍を置く議員たち、という、それぞれの時代の最高権力者たちに対して、場合によって職を賭し、下に仕える立場から常に真実を語る存在である点で、国立国会図書館員と諫官は依然として共通項があることになる。

諫官=真実を語る存在、という中井の公式は、その反対である嘘言論を踏まえることで、メディアウムとミッテルの議論と接続可能である。中井は国立国会図書館の職員は真実を語る存在として肯定的に描く一方で、嘘言についても肯定的に論じるという、一見矛盾した立場をとる。中井は「意味の拡張方向ならびにその悲劇性」(1931)等において、カントの『純粋理性批判』と『実践理性批判』の対比を念頭に、前者は個人が思ったことである「確信」に近く、後者は「確信」したことを実践として複数者の承認を求めて化粧をしながら口に出す「主張」に関連するといひ(中井 1981a 267-268)、エトムント・グスタフ・アルブレヒト・フッサール(Edmund Gustav Albrecht Husserl)の弟子の法哲学者アドルフ・ベルンハルト・フィーリップ・ライナッハ(Adolf Bernhard Philipp Reinach)(1883-1917)に依拠して「確信」と「主張」という二つのタームを用い、両者の峻別を提起する。「確信」したことを「主張」するまでに、他者に受け入れられやすい形で加工する以上、それは「確信」から較べると多かれ少なかれ嘘言が「媒介する」ことになる。これは本来の思いである「確信」を受け入れてもらいやすく変えるという意味で、自己否定的であり、その点でミッテル的であるとまずいえる。なおかつ「確信」という自己の内にとどまるという意味で静的なものを、次には「主張」し、他者に「媒介する」という行為によって、他人を動かすという意味でも、ミッテル的なものである。その点でこれはメディアウム・ミッテル論に落とし込むことが可能である。中井の嘘言論は、コミュニケーションをレトリックという技術を媒介することで加工するという形で、芸術の技術性がミッテル的なものであるという中井の芸術論とも接続するものである。

以上の点で、中井にとっての嘘言論とは、中井のメディアウム・ミッテル論の中でいえば

このことを思うとき私は涙が出て出てたまらなかった。私たちの及びがたきインデリどもが『資治通鑑』の中に数かぎりなく自分をにらんでいるようだった。私は国立国会図書館の任務につくとき、ふと、ゾーッとすることがある。あの諫官達は、東海の一島国にインテリの組織が、組織的に政治に奉仕するときがくるに違いないという歴史への信頼をもって死んでいったんじゃないだろうか」(中井 1981b:115-116)。

ミッテル的なものに相当する。

嘘言がミッテル的なものであれば、諫官＝真実を語る存在たる国立国会図書館職員は単純にミッテル的というよりは、動かしがたい真実という意味での確信に支えられている点で、「メディウムに支えられ」、そして場合によって命を擲ち他者に介入するという意味で自己否定的、「ミッテル」的なものである。また自己の確信というだけでなく書物や資料というメディウムの媒介物に支えられているという意味でも、総じて「メディウムに支えられたミッテル」であるといえる。

中井は戦前の国立図書館である帝国図書館と異なり、占領期 GHQ 傘下の CIE が図書館政策に介入する時代の国立国会図書館の副館長として本というメディウムの媒介物に関する制度設計の仕事に従事することになり、また西田幾多郎や三木清が影響を受けたアメリカのプラグマティズム思想であるウィリアム・ジェームズとジョン・デューイの影響を中井も受けることとなった。それは中井自身や彼の『世界文化』での同人仲間が思想の科学研究会に戦後関わり、この研究会の事実上の主宰者の鶴見俊輔がアメリカで学んできたプラグマティズムにふれる機会が多かったことも関連しよう。そこでミッテルを基本的に志向しつつも、プラグマティズム的なメディウム⁶⁴の要素も中井は受け入れていったと後藤(2005)では解釈しているが、国立国会図書館での中井の仕事と中井に対するプラグマティズムの影響は、このようにメディウムとミッテルとの関係についても見て取れると本稿では考えた。

ところで、諫官が自分の確信という意味でのメディウムに支えられているとはいえ、彼らは自己否定的媒介という意味でのミッテルの要素も強く持つものであるのに対して、明確にメディウムの存在として、諫官とは逆に、皇帝を甘い言葉で惑わして裏で利益を貪るという、これもまた中華王朝史上でよくいる存在である宦官に着目したい。ここで宦官について触れるのは、それが諫官と対比的な存在であるからである。宦官は中華王朝に限らずビザンツ帝国やオスマン帝国などユーラシアを中心に広く見られた存在であるが、要するに後宮・ハレムの管理をすることができる、男性器を切除された男性の官吏である。宦官は中華王朝を腐敗させ、何度も滅亡させる大きな原因を作ってきた存在であるが、その理由は、要するに上には卑屈で下には威圧的になる権威主義的パーソナリティ的な性格をしていたことによる(三田村 1963)。宦官は現代では存在しないが、宦官的な行為を行う現代の宦官は大組織を中心に広く存在している(沼上 2003)。過去の宦官と現代の宦官

⁶⁴ 中井は『美学入門』の中でデューイの美学をメディウムのなものを前提にしていると考えて肯定している(中井 1964 : 132)。つまり本稿の表現でいえば「メディウムに支えられたミッテル」と考えているわけだが、プラグマティズム自体は常に問いを立てて疑問を解決することを考えておりミッテル的な要素が強い。これを中井の解釈違いや混乱と捉えることも可能であるが、すでに注釈 24 で触れたように、「ミッテル」と「メディウムに支えられたミッテル」を相補的に使い分けるといった戦略論的な、メタな視点からのミッテル的なものと考えの方がより整合的であると思われる。

の違いは、過去の宦官が去勢された国家官僚に限定されるのに対して、現代の宦官は必ずしもそうではないということにある。過去の宦官と同様の組織の腐敗を起こしていることそのものが、古今の宦官の共通性である。現代の宦官もまた、過去の宦官と同様に社長などの権力者の取り巻きとして情報を独占し、ゲートキーパーになることで権力者にも、下にも自分にとって都合の良い情報しか流さない情報の非対称性を悪用し利益を貪る。その欲望を達成するためにいじめを好み、空気を自分に都合の良い方向に誘導・操作を行うことで、縄張りの中では絶対的な存在として君臨する(松井 2018b、松井・中尾 2020)。また、宦官は承認欲求が強く人びとから人気を得たいという原理で動いているため、また上司に対してへりくだるため、一見すると見栄えが良く可愛がられやすい。そのため側近として重用すると一見あるいは短期的に組織内コンフリクトを減らす、問題を先送りあるいは隠ぺいするもしくは不確実性が高い現象をなかったことにする、という方法で誤魔化しているだけなので、長期的にはかえって害が増し組織が腐敗し組織全体が共倒れしやすくなるという点で、典型的なミクロの合理性によってマクロの合理性を潰す合成の誤謬を起こす人材である(松井 2020b)。こうした宦官は見栄えが良く強力な権力を握り空気を支配しているだけでなく、派手な恣意行動を好むパフォーマー型と比較すると縄張りに籠り外部からの観察もされにくいため、彼らを排除しようとするとき排除するコストが大きく失敗しやすいが、危機のときはあっさりと排除されることが多い。なぜなら宦官はメディウムのな存在である以上、非線形的な変化が少ない平時にこそ強い存在であり、非線形的な変化が頻発してそもそも前提としている空気が流動的になった非常時・緊急時の場合は宦官の強みが失われるからである⁶⁵。要するに宦官は自己保身、自己肯定的で自己の出世のみを意識する。その点で自己否定的な媒介のミッテルの逆になる。

以上の宦官の特徴をメディウムとミッテルの見取り図に代入すると、以下の表9のようになる。

表9：メディウムとミッテルの見取り図拡張版2

	メディウムの	ミッテル的
20	宦官的(「歪んだ」ミッテルに支えられたメディウム)	諫官的(メディウムに支えられたミッテル)
21	空気操作的コミュニケーション	他者との分かり合いのコミュニケーション
22	いじめ・支配的	対等的
23	上に対してへりくだる	現実を見せる
24	周囲からの見栄えが良い	周囲から非難・誤解され迫害されやすい

⁶⁵ 沼上(2003)では、宦官的な人材が組織を腐らせている場合は強権的に彼らを排除することが有効である旨を経営戦略論・組織論の知見を用いて説明している。なお、ここでふれた「線形的」=メディウム、「非線形的」=ミッテル、という図式については、表4の「メディウムとミッテルの見取り図拡張版3」にて後述される。

古今問わず宦官は君主や社長を騙すなど、嘘言も厭わないという点では一見するとミッテル的な要素が色濃い。しかし、本来、ミッテルの嘘言は自己否定としての嘘言であるのに対して、宦官の嘘言の目的は上司や周囲が自由に媒介し経験・学習することを情報封鎖によって妨げて組織を硬直化させ、そのことで自己の利益を貪るという目的によって貫かれている。つまり自己否定の逆の自己肯定、保身であるので、基本はメディウム志向であると評価できる。宦官に特徴的な空気操作、いじめと支配、上に対してへりくだる、見栄えをよくするなどの要素は自己保身という意味でメディウムのである。他方、諫官は信念、その人の「確信」という意味でのメディウムに支えられた自己否定的ミッテルを目指す。この自己否定とは命を顧みないという意味でまず自己否定であり、つぎに「主張」するため「確信」を場合によって受け入れられるように変えるという意味での自己否定である。学習科学や経験学習という点では、宦官は真実を隠すことにより、皇帝をはじめとする組織内メンバーが自己変容による組織改善を行うことを妨げることに成功する。諫官が逆に辛い現実を突きつけて自己変容や組織改善を促すのとは好対照である。認知資源・認知的不協和という点でも、宦官は耳が痛い事実を隠すことで認知的不協和の回避を行うのに対して、諫官は積極的に組織内のメンバーに対して認知的不協和になりうる事実を突きつけて学習を促す。両者のスタンスはメディウムの、ミッテル的という対比に上手くあてはまる。

つまり諫官がメディウム要素を持ちつつもミッテルを志向する存在とするならば、宦官はその逆にミッテル要素を持ちつつもメディウムを志向する、「歪んだ」ミッテルに支えられたメディウムであると評価することができる。宦官と諫官⁶⁶について、メディウムとミッテルの観点から纏めると、宦官は嘘言を用い、信念があるというよりは本能的であるなど、ミッテルの要素がある一方で本質的にはメディウム志向であり、諫官は信念を持ち体系性も勘案する点ではメディウムのな要素があるが、常に現実を把握するために意見や

⁶⁶ 宦官と諫官は、立場は私益か公益かに分かれてメディウム志向かミッテル志向という点では対極的であるが、一方でそのためにコミュニケーションを用いて説得を試みることや、共にメディウム要素とミッテル要素があることなど、同じ平面上に存在するが故に対比的であるという側面もある。このことを今後考察するヒントとして若干思考実験を行う。諫官が役立つのは本論の上からも自明であるが、宦官はどうだろうか。進化心理学の知見（例えば、長谷川・長谷川(2000)）は、例えば共感性に乏しいサイコパスも何かしら生存に有利で社会に意義があるから、社会の中に一定数存在することが説明(原田 2018)されるが、宦官も同様の構造の中にいると考えられる。宦官によって組織が崩壊することは、そのことによってそれまでの社会の矛盾や格差などが露呈して社会変動を促すことで、新しい時代を作り上げていくという、人類という種の発展・多様性に貢献する点で、人類史的な俯瞰的視点では確かに宦官は意義(ドーキンス 1976=2018)があるといえる。これは宮沢孝幸や福岡伸一がウイルスの効用について盛んにいうこととも、また近い。古くは寺田寅彦が「蛆の効用」というタイトルのエッセーも書いている(後藤 2021b)。俯瞰的視点は諫官・先見者の視点であり、宦官と諫官がやはり同じ地平に立つ、永遠の宿敵として両者が共存することが、人類史に新しい時代を切り拓く方向に機能するのではないかとの仮説が立つ。

考えを修正する点で全体的にはミッテル志向である。

その観点から、最後に加藤にも諫官としての側面があることを指摘したい。加藤は『中間文化論』で、当時ほとんど言及しなかった日本における大衆社会の到来説⁶⁷を主張し、当時の主流であった「日本が近代化に遅れた国」という認識に異議を唱えた。それに対して江藤らが反発し論争になった。これは、加藤が『中間文化論』を唱える形で公共知識人として世に対して諫官として振る舞い⁶⁸、中国の皇帝ほどではないにせよキャリア形成などに大きな影響力を持つという点である程度の生殺与奪の権を持つアカデミアでの主流から反発を受けた、という事例として解釈できる。中井も戦前は軍国主義に批判して治安維持法容疑で逮捕されたことから、両者共に諫官として行動した点でもよく似ている。

以上により、3つ目の作業仮説、③以上の点を踏まえた上で新たに認知的不協和とミッテルの観点から中井正一と比較して見えるものを考察できた。前章までに、研究目的を構成する加藤の独自性に関する作業仮説のうち、3章で①実感論争における加藤と他の論者との距離を単に実感に対する是非のみならず他人指向型への是非から捉える作業によって加藤の立ち位置を明確に炙り出すこと、4章で②加藤が中公新書に込めたメディア戦略と中間文化論との関係を探ること、をそれぞれ解明していた。①②は加藤の独自性であるが、③は①②をそれぞれ認知的不協和とミッテル論に基づいて新しく論じた個所でありつつ、加藤の独自性であると説明した。このことで、加藤が江藤・大江・藤田に理不尽に迫害されることは、加藤が先見者であるからなのかという研究目的を扱う準備が整った。

⁶⁷ 同時期に松下圭一(1994)が言及している。松下はマルクス主義的な分析をベースに独自にアメリカ大衆社会論と接合しているが、加藤はよりダイレクトにアメリカの議論を用いている。尚、両者を比較した大嶽(1999)は、加藤はファシズムへの警戒感がなかったが松下にはあったという評価をしているが、加藤は大衆社会のファシズム化の可能性に触れて中間文化が対処法であると述べているので、大嶽の分析は間違っている。印象論的に大嶽の分析があまり違和感なく読まれてきたのは、それは松下がマルクス主義の概念を用いた独自の分析をしているからではないかと思われる。

⁶⁸ 勿論、加藤も桑原武夫が所長である京大人文研の助手であり、そこには梅棹や鶴見など新京都学派と呼ばれる知識人やその周辺が在籍していたため、相応に守られていた立場にもある側面もある。

6. 考察と結論 加藤秀俊はなぜ江藤淳・大江健三郎・藤田省三から理不尽な扱いをされるのか

6.1 中井と加藤の共通項 長期的でマクロな視点による認知的不協和の打破

1章から説明している通り、加藤が江藤・大江・藤田に理不尽に迫害された理由は、加藤が先見者であるからなのか探求することが研究目的である。研究目的を構成する加藤の独自性に関する3つの作業仮説はそれぞれ、3章で①実感論争における加藤と他の論者との距離を単に実感に対する是非のみならず他人指向型への是非から捉える作業によって加藤の立ち位置を明確に炙り出すこと、4章で②加藤が中公新書に込めたメディア戦略と中間文化論との関係を探ること、③以上の点を踏まえた上で新たに認知的不協和とミッテルの観点から中井正一と比較して見えるものを考察することである。前章までで3つの作業仮説の説明が終わったので、本章でははいよいよ、加藤がなぜ江藤・大江・藤田に理不尽に迫害されたかに進む。この事例の分析によって先見者の事例として加藤が該当するか否かが判明しうることとなる。

前章までの内容をまとめながら中井と加藤の関係、及びその特徴を考察する。中井は概ねメディアムからミッテルへという志向を持ちながら、時と場合によりメディアムに支えられたミッテルを支持することもあった。それは、中井のメディアムとミッテルに対する考え方が時期や分野、またその時々に応じた戦略的な合理性によるものであると解釈することができる。それは、諫官に対する中井の考え方からもある程度想像することができる。つまり中井の戦前の人民戦線の組織化・運営においては、中で立場の違う者同士対等な議論をするので、ミッテルといえる。しかし反ファシズムという意味での大きな方向性は揺らがない。その点ではメディアムに支えられたミッテルともいえる。中井が諫官に託した思いは、自らの信念、確信部分という意味でのメディアムに支えられながら、権力者に対する臣下という下の立場から、場合によって命を賭して、権力者に対して対等性というミッテルを要求・発揮しようとするものであった。

加藤も独学や図書館の利用、調べものを推奨するなど学習科学的姿勢を持ち、『中間文化論』（1957）で高級文化と大衆文化の融合を唱えている。また、加藤も他人指向型による自由なコミュニケーションとサークルの形成を支持していることから、基本的にはミッテル志向である。もちろん加藤も社会学を専門として学問体系を知っている専門家・知識人として新書などを通じて読者との媒介と読者への啓蒙と二面的なメディア利用を行っているので、部分的にメディアムに支えられたミッテルの要素もあると考えることができる。

こうした中井と加藤の特徴であるミッテル志向でメディアムに支えられたミッテルも部分的に採用するスタイルは、恐らく多分に戦略的なものであると評価できる。孫子（孫武）やカール・フィリップ・ゴットリーブ・フォン・クラウゼヴィッツ（Carl Philipp Gottlieb von Clausewitz）に代表される軍事戦略論や、野中・竹内やセング、松尾へと続く組織学習論的な経営戦略論は、相矛盾する命題を適宜使い分けてどちらにも引っ張られ

ずにいることを是とする考えを重視している。奇しくも野中は『戦略の本質』（2008）で毛沢東の『遊撃戦論』（1938=2014）を紹介し、矛盾のマネジメントと題して毛沢東の戦略を解説している。野中が紹介する毛沢東の動きはミッテル志向でありつつも、ミッテルとメディアムに支えられたミッテルを使い分けているものであり、開かれた選択肢を提示し続けるという点でより高次のレベルでミッテル的であり、あえて不安定さを残しながら最後はアートとして軍事や経営の判断を統合するという一つの到達点⁶⁹を示している。

だとすれば、中井のメディアム・ミッテルに対する考え方は機会主義的である分、よりミッテル的であり、中井の代表作「委員会の論理」が、経営組織論をコミュニケーション論・メディア論として構築したとされることも同様の視点で考えたほうが良い。コミュニケーション論とメディア論がミッテル志向である場合、複数の命題同士が矛盾を起しその矛盾を解決する手段は、最後にアートという達人芸になるほかないという孫子以来の経営戦略論の到達点に達する構造に中井は気づいていたのではないだろうか。こうした構造は理論と実務がどちらとも高度に存在するもの、例えば外交論や国家理性論⁷⁰などにも当てはまるが、中井はそれを「委員会」というサークルレベルの小集団を実例に考え、それを戦後は図書館制度構築の立場から応用したものである、と整合的に解釈することは十分に可能である。サークル活動を重んじる思想の科学のカルチャーの中にいる加藤も、概ね小集団をベースにしながラスマメディアや大学の場も使い分けていたという点で、中井と同じであったと解釈できる。⁷¹

こうした中井と加藤の共通点は何だろうか。それを見るためには、表2の中でミッテル

⁶⁹ 『戦略の本質』では続いてバトル・オブ・ブリテン時のイギリスのウィンストン・チャーチル（Winston Leonard Spencer Churchill）首相、スターリングラード戦のときのソ連のゲオルギー・コンスタンチーノヴィチ・ジュコフ（Георгий Константинович Жуков）元帥、朝鮮戦争時のアメリカ軍のダグラス・マッカーサー（Douglas MacArthur）元帥、第四次中東戦争時のエジプトのムハンマド・アンワル・アッ=サダト（محمد أنور السادات）大統領、ベトナム戦争のときの北ベトナム軍のヴォー・グエン・ザップ（Võ Nguyên Giáp）将軍による巧みな逆転劇を紹介しているが、これらも毛沢東と共通している。ちなみに、毛の『実践論』『矛盾論』と中井の「委員会の論理」との近接性は、後の文化功労者で京大人文研における加藤の先輩でもある上山春平が、若い頃、『思想の科学』に載せた論文において強調して論じている（上山 1998）。上山は毛のプラグマティズムとの親和性についても論じて日本共産党の幹部である上田耕一郎（不破哲三の兄）から批判されており（上山 2005）、毛のミッテル志向的側面に上山は気づき、日本共産党幹部はそういった見方に対して認知的不協和を起したものだと思われる。以上の話は戦後史上極めて興味深い。

⁷⁰ 外交での利益の争いと誠実な態度の重要性の矛盾については典型的にはフランソワ・ド・カリエール（François de Callières）の『外交談判法』（1716=1978）やハロルド・ジョージ・ニコルソン（Harold George Nicolson）の『外交』（1963=1968）、国家理性における政治と道徳の矛盾についてはフリードリヒ・マイネッケ（Friedrich Meinecke）の『近代史における国家理性の理念』（1924=2016）などで描かれている。

⁷¹ 加藤（1977）はカツとラザースフェルドの二段階の流れ仮説を追試してサークル活動をする中間団体の意義を実証している。

的な要素として説明した学習する組織やシステム思考や、宦官の説明の中で出てきた宦官がミクロの合理性を追求して合成の誤謬を起こす存在である、という部分をここでは一度思い出すべきである。それらの事項から見えるメディウムとミッテルの対比は以下の表10のようになる。

表10：メディウムとミッテルの見取り図拡張版3

	メディウムの	ミッテル的
25	ミクロ/部分的な視点を持つこと	マクロ/全体的な視点を持つこと
26	短期的	長期的
27	線形的	非線形的
28	コプラ	コプラの不在
29	量的	質的
30	個人的	協力的・集团的
31	合成の誤謬	合成の誤謬回避

メディウムである宦官はミクロ的・部分的・短期的な最適解を、協力を拒否したり他者を支配したりすることで追求し、合成の誤謬を起こすことを厭わない。それに対してミッテルはマクロ的・全体的・長期的な全体最適を目指し、人々の協力の下で合成の誤謬回避を狙う。ちなみに中井は「個人的主観」から「集团的主体」への転換の時代に今、人類はあるということを主張している（中井 1981b:215）。マクロで長期的な現象はシステム思考というループ図状のものとしてとらえる必要があるため非線形的・質的であり、メディウムは相対的には線形的・量的なものとなる⁷²。

⁷² 中井は『美学入門』（1951）においてコプラの不在ということを用いる。映画のカットとカットは、「である」「でない」「に違いない」「かもしれない」といった、コプラ（繋詞）がない点に特徴があるという（中井 1964：68）。このコプラは通常の記事において、文章の送り手の事態に対する判断を指し示すものである。映画はこのコプラがない。要するに映像の文脈なり、その判断・評価は控えた、カットの提示の連続となる。映像の意味を判断し、文脈を形成する作業は、受け手に委ねられる。コプラがあればカットとカットの間の論理関係は送り手から示され、線形的に論理展開する。しかしコプラがないので、論理関係は受け手自身が模索するし、線形的なつながり以外の複雑な関係も受け手自身で模索できるし、一切の論理関係のない、単なるカットの並列と捉えられる可能性もある。その意味でこのコプラの不在の議論は、非線形論理に通じる。この中井の議論はアンリ＝ルイ・ベルクソン（Henri-Louis Bergson）の時間論（1889=2001）での線形時間（アイザック・ニュートン（Isaac Newton）による時計の針で量的に刻まれる≒空間化された時間）と生物として経験を味わうときの流れる時間との対比に繋がる（中井 1964：103-106）。コプラがあることによって論理展開が示されて線形的な議論があるのが文章であるならば、時計によって空間化・数量化された時間もまた作り手である時計職人・メーカー、さらには職人やメーカーが従う世界標準時子午線の論理を受け手が受容することになる。それに対して、質的に流れる時間（純粹持続）も映画同様にコプラの不在故にカットの連続になるので論理関係が一切ない非線形論理的なものに通じる。これらも表4のようにそれぞれ前者がメディウム、後者がミッテルと親和的であることが示される。

ただし、ミッテルを目指して合成の誤謬を回避すべくマクロな思考をすることができる諫官的人物は、認知資源が豊富で認知的不協和になりにくい、精神的にタフな人間でなければ務まらない。例えば、信念はすでに説明したようにメディウム的であるが、直感的にはマクロ的・長期的なものでもあるように考えられるという矛盾がある。これを整合的に考えれば、本来メディウム的である信念は現実遭遇して認知的不協和に耐えて常に適宜変容していく＝ミッテル的な要素を入れて、永遠に更新し続けていくことでマクロ的・長期的にもなると考えられ、直観的な認識に接近する。⁷³そのため、自分にできる範囲でのやりたいことを見極めつつ、マネジメント能力ごとの役割分担を他者と共にしていくしかない。その意味でミッテル志向の場合は他者との協力が不可欠である。一方で、メディウム志向の場合、他者は自分の利益と相反する敵、ないしは利用・搾取できる「資源」であるという考え方と親和的である。諫官と宦官とは、永劫に続く不倶戴天の敵である。

加藤はこの点で、長期的でマクロな視点を持ち、タフネス性を誇り認知的不協和に対する耐性のある諫官的人物であると評価することができる。加藤の『中間文化論』は戦後の文化を高級文化、大衆文化、中間文化の時代に区分した上で高度成長期からバブル期まで続いた戦後の経済成長期の文化を見据える展望を可能にした。さらに、加藤は同僚の梅棹と共に情報社会論を唱え、新しく未来学を構築した⁷⁴。加藤・梅棹・川喜田が情報社会論を唱え始めたのは1962～1963年の段階であり、フリッツ・マッハルプ (Fritz Machlup) やダニエル・ベルと同時期であり、アルビン・トフラーよりも先行している。⁷⁵

こうした加藤の高いミッテル志向とタフな認知的不協和耐久能力に裏打ちされた戦後文化や高度経済成長に対する肯定的立場は、藤田省三や江藤淳などに認知的不協和由来の感

⁷³ 中井晩年の『日本の美』(1952)では、伊勢神宮の遷宮に言及し、長い年月同じ形を保つために、逆に一定間隔ごとに古いものを脱ぎ捨て更新していく姿を「日本の美」の典型として称賛している(中井1965)。「日本の神殿の中心である伊勢神宮が二十一年ごとに建てかえられつづけながら、ここに一千年もの間、しかも滅びることもなく、その様式方法も変えられることもなく、ここにいたっていることも、まことに注意すべきことです」(中井1965:226)。また次のように述べる。「二十一年の僅かな歳月も、もし、それが素木で作られているならば、それは、古くならずむものとなるのであります。汚れることとなるのであります。だからあえて、素木を用いて造る時、すでに脱出の用意をしながら、そのうつりゆく清純な生成感、生きているという「なまな香り」を神殿の本質と考えようとしたことは、世界に類例のない、民衆の「こころ」であります」(中井1965:227)。

⁷⁴ 竹内洋・佐藤卓己・稲垣恭子編『日本の論壇雑誌』(創元社、2014年)では「『放送朝日』の一九六七年一月号に掲載された論考で最も注目すべきは、梅棹・小松・加藤・林雄二郎による座談会「どうなる・どうする——未来学誕生」であろう」(竹内・佐藤・稲垣2014:285)と記され、さらに梅棹らは「どうする」未来学ばかりが注目される現状を憂いて「どうなる」未来学を打ち立てようとしていると、赤上裕幸に指摘されている。

⁷⁵ 無論、彼らの情報社会論は共通項はあるものの細かい点や力点は異なる。例えば加藤が書いた中公新書刊行のことばでは技術発展に言及する点で情報社会論一般と同様の技術決定論に見えるが、技術によって「書物の大量需要の潜在性が形成された」と書くなど社会決定論の要素も勘案している。

情的な反発を呼び起こさせたのではないだろうか。藤田は加藤を、天下国家を語っていないからダメであると批判し、江藤⁷⁶と大江は丸山眞男の「日本の思想」論文(1957)をきっかけに発生した実感論争の際に、主体を大事にしない加藤はファシストであるという論調で攻撃している(久野・鶴見・藤田(2010)、橋川ほか(1958))。藤田及び江藤・大江の加藤批判は粗があるものである。

こうした粗を説明しやすくするために、ここでは藤田・江藤・大江の個人史をより具体的に扱っていく。まず藤田についてだが、天下国家の語り方としてミクロな事実を配列してマクロな社会を浮かび上がらせる加藤の(柳田由来の)手法が何故ダメなのかを藤田は説明できず、さらにそもそも天下国家を語ることが良くてそうでないものは低評価であるという藤田の価値基準自体が客観性に乏しい。

鶴見(2022)によれば、藤田は『全体主義の時代経験』では「いい本だけど、出口なしという押さえつけられる感じがする(鶴見 2022:469)」という方法論に拘る姿勢が強く出ているとしつつも、岩波の『図書』に連載した「回想・戦後点景」では「その感覚が一種の民話」「押さえこむ感じじゃなくて。フワッと窓が開け放されている。藤田省三特有のホラ話なんだが、解放されたかれの別の顔を見せてくれる。(鶴見 2022:469-470)」と高く評価し、思想の科学内での「転向研究会」での会合内の議論は後者としての顔を見せたとも語る。つまり、藤田は方法論にこだわる側面と意外にも実感論的なものを大切にする側面という相反する姿を共に持っていることになるが、加藤と鶴見というともに実感論的なものを大切にする人物への対応としてはダブルスタンダードと言える、一貫しない対応を取ったことになる。これらの記述によれば、藤田は本では方法論的にこだわりを見せ、エッセイ・オフラインでの対談・討論では実感論的姿勢を見せる傾向にあることになるが、加藤への反発をしたのは座談会であることを考えれば、エッセイやオフライン上でも条件次第では態度が硬化する、ということがわかる。よって藤田が本として記述した対象である、

⁷⁶ 江藤は対加藤だけでなく一方的な思い込みや誤読で暴走しがちな面があることが他の場面でもたびたび出てくる。江藤は実感論争と呼ばれる論争の最中加藤だけでなく梅棹忠夫と後藤宏行も含めて三人を十把一絡げに纏めてファシストであると批判し(江藤(1957)、江藤(1958))あまりの会話の不能さに加藤が「江藤氏のような紳士をやくざにたとえるのは恐縮だが、本紙四月二十一日号の「加藤秀俊の実感主義」に関するかぎりは、「それが合わねえ」といった理由で挑戦されているとしか思えなかった」「江藤式フィルターはかくのごとく屈折率の高いシロモノであるから本当なら何も口答えしないほうが賢明なのかもしれない。何を言っても、こう歪みの強い解釈をうけるのでは、生産的な論争になりそうもないからである」と書くなど加藤を怒らせて(加藤 1958)おり、直接的な対峙の場(橋川他 1958)でも会話は通じず物別れに終わった。右派に転向した後の江藤もそういったエピソードがあり、例えばアメリカに対する肯定的文脈・否定的文脈を巡って山崎正和と高坂正堯の好意を無碍にする行為を江藤は行っている(片山 2021)。山崎は江藤の評論家としての腕は江藤の最期まで高く評価しており、江藤に無礼なことをされたにもかかわらず交流を保ったという点で本稿の視点でいえば山崎は加藤や中井同様に認知的不協和を起こしうる状況に耐えきった強靱な心の持ち主であったと評価できるが、山崎正和論は本稿の守備範囲を超えているため今後の研究課題である。

全体主義や天皇制や転向者は、藤田にとって許されざる敵であった。同様に、加藤の中間文化論もまた、藤田からすれば納得できない立場であったと考察できる。

以上から考えれば、藤田は『共同研究「転向」』での総論や全体主義・天皇制分析の硬い理論的内容のように議論の際に方法論にこだわる姿勢を示すことが多いが、方法論へのフェティシズム的なこだわりは根本的には信仰的な情熱に由来すると考えられる。それは、丸山の分析で言えば理論信仰的なスタイルであるが、ウェーバーのいう価値合理的行為に該当すると解釈した方がより分かりやすいと思われる。藤田が方法論的にこだわる際は「藤田と相反する言説」を対象にした場合であり、そうでない場合は鶴見の回想のように実感論的な立場を採用しているということは、藤田は結局彼にとっての認知的不協和を起こす議論に対しては角張ってしまい、方法論的なこだわりを強く持つスタイルでしか記述することが出来ないと捉えられる。つまり、鶴見が示した藤田の二つのスタイルは、結局は認知的不協和を引き起こす対象であるか否かという感情に由来していると考えられる。

江藤と大江は主体性があることはファシズムに流されない抵抗基盤となるという前提を共有しているが、当時日本人などの東洋人に比して主体性があるとされていた西洋人であるドイツ人の支持で⁷⁷、ヒトラーが出現したことに対して説明できていない。しかも、加藤の議論は熟議と経験学習を大事にしているという点でむしろファシズムに簡単に流されない人間を作ることがを主張しており、そもそも加藤の議論を全く聞かずに勝手に誤読し思い込みに基づいて批判していることになる。そして、江藤と大江は対加藤に限らず、話を聞かずに思い込みに基づいて相手を非難する態度を取ってしまいがちな人間であり、大江の小説『万延元年のフットボール』を巡る江藤と大江の意見の違いから、両者自身も仲違いをしてしまう⁷⁸。

認知したくない現実を突きつけられて認知的不協和を起こすという点では江藤・大江は藤田と同じである。しかし、藤田と異なり江藤と大江は方法論を持ち出すという理論信仰的な手法を採用せず、感性に基づく主観的な判断を直接的に押し付けようとするという点で藤田以上に対話する精神が乏しい。江藤と大江のこうした振る舞いは実感信仰的・講談社文化的なスタイルであるといえよう。だとすれば、江藤と大江は盛んに加藤をファシストであると主張してきたが、むしろかえって江藤や大江こそファシスト的な姿勢である。奇しくも、藤田と江藤・大江はそれぞれ理論信仰・実感信仰という加藤が選んだ中庸的な中間文化的なスタイルを拒否し、加藤が見せる藤田・江藤・大江にとって不都合な事実を、

⁷⁷ 実際ハンナ・アレント(1964=2017)は、ユダヤ人強制収容所の責任者アドルフ・オットー・アイヒマン(Adolf Otto Eichmann)がイスラエルの法廷で見せた姿から、西洋人とて主体性がどこまであるのかという疑問を提示している。

⁷⁸ 『万延元年のフットボール』を巡る江藤と大江の論争については様々な先行研究(田中2001,小谷野2018,平山2019,山本2019)が考察しているが、何れも両者の議論はかみ合っておらず、己の感性を根拠にした言い合いにしかなくないといふと分析している。最初は意気投合して組んだバンドチームが、音楽性という当人以外にとっては無意味なものの違いが露呈して解散したようなもの、と解釈すると自然である。

中華皇帝が諫官を拒否するのと同じように対応しているという点では同様のものである。その上で、加藤への反発の仕方が理論信仰的・実感信仰的という対極な形で出力されたものであると考えられる。実際、先行研究（田中 2001, 小谷野 2018, 平山 2019, 山本 2019）は何かしらの形で江藤と大江の優れた才能を高く評価しているが、二人が喧嘩をする場面以外でも江藤と大江がそれぞれ他者に対して失礼な言動をしている、認知資源が不足した場面が多々見られる⁷⁹ことについては、以上の先行研究では温度差がある⁸⁰ものの、江藤や大江が引き起こす数々のトラブルに対して批判的なポイントは扱われている。

加藤の戦後文化や高度経済成長に対する肯定的立場に対して反発した藤田・江藤・大江は単に当時の講座派マルクス主義や講座派マルクス主義と親和的な戦後市民社会派などの立場に立つがゆえに批判したのだろうか。確かに藤田は戦後市民社会派の大家のうちの一人の丸山眞男の弟子で、当人も後に市民社会派を代表する政治学者となる人物であり、江藤は後に右派に転向するとはいえこのときは大江と共に藤田と親和的な立場であった。だが、3章ではすでに、当時共産党員で講座派マルクス主義の立場であるべきはずの田口富久治が、そうであるにもかかわらず加藤に対して一定程度親和的な言説をしていることや、この論点では加藤と立場が異なる丸山眞男門下の橋川文三も、同門の藤田とは逆に、加藤に肯定的な発言をしている（橋川他 1958）ことを根拠に、単なる講座派の洗礼を受けているというイデオロギーの違いだけが理由でないことを示している⁸¹。3章の分析では東京

⁷⁹ 江藤と大江の負の面を多く描く小谷野(2018)から、以下のエピソードを紹介しておく。江藤が1959年に丸山眞男に対してインタビューした際に丸山から丁寧に扱われて良い印象を抱いたのにもかかわらず、その時は橋川文三が隣にいて学者はいいなと思ったことから、丸山と橋川のことを一種の同性愛的結合と書いて丸山を驚愕させている(146p)。大江は1958年に当時の人気女優有馬稲子が番組で防衛大生を訪ねた際に見直したと語ったことに対して若い世代の日本人の一つの弱み・恥辱で防衛大学の志願者が少なくなることを望むとコメントして防衛大生に対する差別ではないかという批判をされたり、自分がミスコンテストの審査員をしたことを恥辱と感じ今でいうルッキズム批判と審査委員長を務めた谷崎潤一郎が最終審査に残った中で気に入った女性を秘書のような形で雇ったことを批判しだしたことに對して谷崎と中央公論社の社長である嶋中鵬二に批判されたりしている(138-139p)。江藤も大江も、素朴に思ったことを素朴なまま素直に言う、そうした言動をすることでどうなるのかということに無頓着であるが、その際には総じて礼や信頼という点で疑問符が付くやり方をしてしまっている。

⁸⁰ 田中(2001)は江藤の、山本(2019)は大江の内在的論理を見出して高く評価する立場に徹しており批判には控えめであるが、小谷野(2018)は江藤と大江に対して遠慮なく批判し、平山(2019)も江藤の批判されるべき点も含めて多く扱っている。

⁸¹ 趙(2017)は同じ丸山門下である藤田省三と松下圭一とを比較して、藤田が高度経済成長に対して批判的な目を向けていた一方で松下は肯定的であったとして、好対照であったと分析している。本稿で触れた藤田の対加藤の言説、松下のマルクス主義をベースにしつつもアメリカ大衆社会論に近接した大衆社会論的分析(1994)などはその傍証である。この本は松下が戦後から書いてきた論考をまとめたものであり大衆社会論的分析自体は50年代に発表した文章であり、それでもマルクス主義的な用語や概念を無理して使っているが、文庫版の松下自身の解説ではそうしたものは時代的なものであるとあっさり認めてしまっている。

大学出身者はリースマンの他人指向型類型に対して批判的になると推論し理念型としていた。しかし、本章では認知資源や認知的不協和論を代入することで別の理念型モデルとなる仮説も導出可能である。加藤の『中間文化論』は現代から見れば妥当な説であり、藤田・江藤・大江の反発が的外れなのは、戦後に急速に戦前的な貧しい社会から脱却し変容してくるという現実に対して藤田・江藤・大江は認知的不協和を起こして現実を認めることが出来なかったからである、というものである。このように考えることで、田口や橋川が藤田たちと近い思想的立場であったにもかかわらず加藤の説に親和的であったことも、田口と橋川の精神の強靭さ・タフネス性や認知資源の豊富さ⁸²という形で説明できる。

6.2 先見者の条件とは何か

前節で長期的でマクロな視点を持ち、タフで強靭な精神を持つことで認知的不協和を打破できるような人物とはどのような人物かを説明した。加藤はその典型であると言えよう。そして、確かに加藤はそのために藤田や江藤、大江に認知的不協和を起こさせて理不尽な対応をするような原因を作ってしまった。

1.2 で示した先見者の仮説と、それを上手く説明できるカサンドラやエレミヤの事例についてここで繰り返す。先見者は未来を見る能力を持ち有用であるが、理不尽な迫害を受けてしまう。その理由は、先見者がみる未来は辛い現実であり、認知的不協和を起こさせやすいからである。先見者は現実に耐えて、そうでない人物は耐えられないという認知的不協和の耐性もまた、認知的不協和耐性が低い人物にとって認知的不協和の理由になる。加藤は未来を当てて、藤田や江藤、大江は外れてしまった。加藤が当てた未来は藤田や江藤、大江にとって当たってほしくないものであった。藤田たちの反応は認知的不協和由来のものと思えるものである。この段階で、先見者の条件として加藤は当てはまっている、少なくとも加藤は先見者でないと切り捨てることは不可能である。

カサンドラとエレミヤは神話上先見者であるとされている。実際カサンドラとエレミヤは未来を当てながらも、それを聞いた他者は認知的不協和を起こして信じず迫害した。ただし、カサンドラはアポロンから授けられた能力によって、エレミヤは唯一神であるヤハ

⁸² もっとも、田口が他人指向型を巡っては加藤と立場が異なったことを勘案すると、本稿での認知資源・認知的不協和説と3章の結論部分で出した竹内説の修正版である他人指向型との親和性と東大卒との相関説はある程度相補的に考えることが可能である。つまり、東大という学習環境で学ぶとある程度認知資源の余裕がなくなり認知的不協和になりやすくなる、という仮説が導出される。実際、本稿でタフネス性がある、認知的不協和に対する耐久力が高いと述べた中では加藤・中井・鶴見など非東大出身者が多く、田口や橋川といった東大出身者は少ない。もちろん江藤のように非東大卒でも認知的不協和になりやすい人物もいるように、あくまで竹内の理念型を組み替えた新しい理念型であるということであり、仮に今後実証したところで江藤の様な事例を既に観測している以上は傾向の話にしかならないことには注意したい。

ウェによってそれぞれ一方的に未来を見させられている。すなわち、確かに認知的不協和に耐えるタフな精神の持ち主であるという点でミッテル志向寄りであるが、長期的でマクロな視点を持つほどミッテル志向が大きいかまでは不明瞭である。もっともこれらは、彼らが神話上の人物であり、神話を記録・伝達した人物たちの能力の限界によって記録が欠落した、神話的な説明で満足する他なかったと解釈することは可能である。

以上の先見者の議論には問題点が残存する。そもそもある人物が先見者であるかどうかは事後的に把握することしかできない。その人物の発言時点で、発言が当時の支配的な通説に反していることは間違いないが、この発言に先見の明があったか否かは未来になってわかることである。加藤も『中間文化論』を執筆した時点の話を中心に展開しており、高度経済成長へと加藤の観察した風景が発展していくところまでは描いていない。江藤・大江・藤田による加藤への理不尽な反応は、加藤の読みがどこまで正しいか不透明な段階では相応の説得力があった上に、ほぼ同じ加藤の発言を聞いても、もしも別の日に座談会が組まれて発言順が違っていけば、彼らの反応が発生しなかった場合も十分に考えられた。そのため、「本当のことを言って認知的不協和を引き起こすことで怒られる」ことも、たまたま偶然である可能性がある。つまり、結論から言えば、加藤はもちろん、神話上先見者である扱いとなっているカサンドラやエレミヤでさえ、確実に先見者であるとまでは言えない。あくまで彼らは、以下の条件を満たしているのみである。

- 1 認知的不協和に強く、身も蓋もない現実を見通したことがある
- 2 現実を未来予想として語る時に、聞いた人物たちがその際に聞いた内容が当時の支配的な言説に反する内容であったため認知的不協和を起こして迫害してきたことがある
- 3 認知的不協和に強いタフネスさを有し、ミッテル志向をもつので、極めて長期でマクロな事象を見渡している

これら1、2、3の条件のうち一つでも満たさないようであれば、先見者ではないと即断可能である。だが、三つを全てを満たしていても、あくまで先見者であることの必要条件でしかない。さらに、先見の明によって見えた事象の時空間的範囲とその有効性の度合いについてはここでは無視している。

また、ミッテル度合いが高く先見者に好意的な反応をしていること、つまり対先見者耐性が高い人物が直ちにその人物も先見者であると即断することも不可能である。すなわち、非先見者でかつ対先見者耐性が高い人物も存在しうる。とはいえ、ミッテル度が高い人物程、その人物が先見者である傾向があるだろうということは言える。先見者であるか否か、対先見者耐性が高いか否か、の二軸を用いて表を作って整理すると、以下のように表が導き出される。

表 1 1 : 先見者と先見者耐性の関係

	先見者でない	先見者
対先見者耐性が高い	少ないと思われる	少ないと思われる
対先見者耐性が低い	多いと思われる	極少数と思われる

「対先見者耐性が低い」かつ「先見者でない」と、「対先見者耐性が高い」かつ「先見者である」は予想される組み合わせであり、言わば xy 軸上で生じるであろう同一の回帰直線状に位置すると思われる。反対に、「対先見者耐性の高い人物」かつ「先見者でない」と、「対先見者耐性が低い」かつ「先見者である」はイレギュラーな組み合わせとなる。「対先見者耐性の高い人物」かつ「先見者でない」は後にもふれるように、鶴見俊輔など該当する人物がいくばくかは想定できるものの、「対先見者耐性が低い」かつ「先見者である」事例で明確にそうだと言える事例は現時点では筆者には見当たらず、さらに想定しにくい。想定もしにくい理由は、自分の持つ先見の明に認知的不協和で耐えられないという形で自分に心的負担が大きく発生するということになり、長時間そのまま持続できるとは考えにくく、仮に存在し得ても自ら先見の明を封じるという場合が想定できるからである。そして、自ら先見の明を封じて目を見えなくした先見者は先見者としての機能を果たせなくなる。故に、対先見者耐性が低い先見者が仮に存在したところで、先見者として扱う必要はなくなる。ある人物のミッテル度合いが高い場合は、みずからがその人物が先見者である、あるいは自身はその人物が先見者でなくても、先見者に対する耐性がある人物であると類推することは問題ないので、ミッテル度合いが高い段階で通常の場合よりも先見者である可能性は高いと計算可能である。つまり、現時点でその人物について観測できる全ての事例で 1、2、3 を満たしている場合、先見者でない可能性は最後まで 0 にはならないものの、0 に近接していると言える。

6.3 実際に加藤の先見者としての実績の検証

加藤秀俊は戦後日本に対してどのような立場を取っただろうか。加藤(2021)は戦時中は陸軍幼年学校に在籍し、大学生のころは血のメーデーに参加したと告白しているが、それらは一時的な立場に留まった。日本が敗戦したことで軍国主義に染まる前提は破壊されたし、共産党は事件に対して反省せず加藤は憤り熱病的な共産主義思想も結局抜けていったからである。それ以後の加藤は基本的に本論で触れたように、高度経済成長を予見する議論を展開した。

戦後日本の大学は竹内の言葉を繰り返せば「左翼に非ずんば人に非ず」という空気が充満しており、戦争の悲酸さに対する反省の空気と結びつき非武装中立論の基盤となっていた。55年体制はそうした非武装中立論を唱える共産党・社会党などの護憲派と安保闘争で国民から批判された岸信介などの改憲派も含む自民党的な保守の結合により、均衡点と

しては概ね吉田ドクトリン、軽武装と経済成長の路線として結実した。吉田ドクトリンは岸による安保改定によって日米関係の不均衡が是正されることで安定期に入った⁸³。少なくとも結果論的には加藤の『中間文化論』は吉田ドクトリンに親和的だった⁸⁴。梅棹が佐藤栄作政権のブレーンになったこと、後に加藤が梅棹と携わる大阪万博が吉田ドクトリン路線の戦後日本を国際的にアピールするプロパガンダとして機能したことは傍証となる。

加藤は事実を重視し、アブダクション的な思考を得意とした。さらに、ミッテル志向が高く認知的不協和にも強く、藤田たちのように加藤の話を書く他者を認知的不協和へと誘うこともあった。自律型の他人指向型の特徴である他者との媒介を重視して社会構築を行うこと、「高級文化⇌理論」と「大衆文化⇌経験」の行き来、世の中に対して常にミッテルを徹底する観点からあらゆる選択肢を用いて介入する姿勢、自分にとって不都合な情報や体験をも認知資源を用いて受け入れて自分の変化を促す姿勢を維持した。

先見者は事後的に分かる存在で、アブダクションは現在進行形の手続きの問題であるが、先見者をやっとな事後的に把握できるのは非先見者を想定している。もし先見者が存在したとして、先見者がアブダクションを行って思考している場合は、先に見えたビジョンをアブダクション的に仮説構築して考えていることになるからである。つまり、必ず長期間の全体像を見る先見者について、短期間かつ部分的にしか見る能力のない非先見者の方からは、同時進行的な観測が不可能になっているということになる。先見者同士の意見対立の場合は、それぞれ真実を含むことをぶつけ合うことで、お互いそのことを了解した上でより良い真実を見極めようとするのが可能になる。例えば、アロンがブルデューのハビトゥス・象徴資本論に対して「君の理論の例外は君自身だ（生まれや文化資本の格差を逆転した事例がブルデュー本人である）」という鋭い指摘をし、ブルデューも自分の理論があくまで傾向のものであると上手い返しをしたのは、典型的な先見者同士の真実探求だったと解釈可能である。6.2 の表 1 1 でも扱ったように、「対先見者耐性が低い」が「先見者である」人物も一応想定可能であるが、そうした人物が仮に存在していたとしても、先見者として機能することはない。以上のことから、加藤が江藤・大江・藤田から理不尽に迫害

⁸³ 旧安保では日本国内の内乱を米軍が一方的に鎮圧するという内乱条項があるなど、日本に不利な内容を含んでいた。端的に言えば安保改定は日本がアメリカの属国度を下げるものであり、安保になんとか反米という雰囲気反発した国民は自害行為をしていたに等しかった。例えば、後に保守主義の立場のメディア知識人になる西部邁は全学連の立場から安保闘争に参加したが、彼は東大在学というエリートだったにもかかわらず安保の条文を読んでいなかったことを告白している。

⁸⁴ 加藤は安保闘争時に岸の「私には声なき声が聞こえる」「後樂園球場は満員」という、デモ隊が所詮は少数派に過ぎないという発言については、後樂園球場に足を運びながらデモ隊にも参加しようとして批判している。もっとも、その後池田政権の「低姿勢」と高度経済成長政策によって反岸の空気が一掃されたことを勘案すれば、岸の発言にも強い真実性が認められる。筆者は岸を先見者の典型として分析したことがあるが、この加藤―岸間の議論は先見者同士の、真実を見極めようとする意味のあるものであったと解釈している。類例として、ををするなど、真実への接近を巡る議論は同様の傾向がある。

されたこと、加藤には作業仮説で扱った他人指向型・中間文化論・戦略的なメディアへの対応・認知的不協和への耐久力があることから、加藤が先見者である確率が高いといえる。

6.4 結論

これまでの章では、認知心理学の知見は加藤の『中間文化論』・他人指向型及び中公新書「刊行のことば」と中井のメディアウム・ミッテル論とを接続することが可能であること、中井や加藤はミッテル志向とメディアウムに支えられたミッテルを使い分ける戦略家的な視点を持ち、より広い意味でのミッテル志向的な発想をしていること、諫官かつ先見者的なもので認知的不協和に強く、強靱でタフネスな精神の持ち主であることを述べてきた。以上の話をまとめれば、加藤もまた諫官・先見者的な存在だった、という命題は仮説として十分に成り立ちうる。本章では最初にそのことについて、簡単に触れておきたい。

加藤が発表した『中間文化論』は現状、通説となっているが、当時は藤田省三と江藤淳、大江健三郎から理不尽で感情的な反発を受け、鶴見俊輔と田口富久治、橋川文三は加藤を擁護した。藤田は「一つの人工的に作られた方法論・知識体系・価値体系(=method)を内面化した存在」たるメソッドマン的(松井・中尾 2020)であるため理論(信仰)的、江藤と大江はその主張内容こそ主体性を重視し実感論を否定するというものであるものの、情動的共感に振り回された感情的な、つまり実感(信仰)的な反応だった⁸⁵という点で対極であるが、バランスを欠いていたという点では同様であった。これは対加藤への対応では、藤田が専門知識人ないしは思想ではなくスタイルの点で岩波文化的で江藤・大江がメディア知識人的ないしは講談社文化的なのに対して、加藤が公共知識人的ないしは中間文化的であるとも分析可能である。江藤と大江のような直観的でメディア知識人・講談社文化的な人物は先見者に対して天才、藤田のようなメソッドマン的な専門知識人・岩波文化的な人物は秀才と仮に定義すれば、天才と秀才はその思考スタイルが両極端ながらも、対先見者という点では同様の存在である、という新たな面を浮かび上がらせることが出来る。江藤と大江、藤田のような対先見者耐性の低い人物は諫官を殺す皇帝としての素質が高く、逆にごまをすって甘言を以て接近する宦官にいいように操られやすいという点では、彼らは三人ともファシズムに反対した人物であるが、メカニズム上ファシズムを呼び込む危険性⁸⁶が高い人物であるということになる。

⁸⁵ 藤田は理論信仰の立場から実感信仰を批判しており筋が通っているが、江藤と大江は実感信仰的に実感信仰を批判しているというという点で倒錯があり、その点では両者は異なる。

⁸⁶ 宦官的人物が甘言を以て権力者におもねり国を滅ぼした例として、松井・中尾(2020)ではまさに富永恭次が東條英機に媚びて帝国日本が減った事例を分析している。これにつき合わせれば、東條は陸軍官僚のメソッドに秀でた秀才的な人物であり、一方で親しい人物には実感論的で甘い対応をしたというエピソードも散見されることから、東條は藤田とよく似ていることとなる。

加藤はそれまでも、柳田民俗学のミクロな記述を集めて配列することでマクロな社会を浮かび上がらせる手法を用いて、膨大なデータを見聞きし、それを記述する文章を多く執筆し、それらを余すことなく描き切る役割を社会の中で担おうとしてきた。加藤は柳田の方法論を社会学に応用することで戦後日本社会の本質を見出して、次々と様々な文章を世に送り出し、リアリティのある描写と意外性のある視点を現実的な結論と組み合わせることに定評を得て、高度経済成長にまい進する戦後日本を肯定的にみるという、1980年代以前においては比較的少数派の立場を自らの役割と任じながら、論壇での独自の地位を確立していった。

そのような役割を果たすことの一環でマクロな社会を浮かび上がらせ、『中間文化論』を世に問うた。そこで日本社会の大衆社会化と高度経済成長を擁護するという、前期近代的で主体性の確立を目指す内部指向型を理想とするタイプの間が見たくない、認識したくない現実を突きつける結果となり、藤田や江藤や大江においては認知資源のオーバーフローと認知的不協和が起こったと考察できる。加藤は論壇では当時の通説である「日本＝近代化未達成」説に異論を述べて反発を受けたことは明白である。一方で、加藤はそうした反発を受けながらもメディア知識人として活躍し続けた人物であり、本稿のこれまでの章でふれた諫官や先見者としての機能・役割を果たしたことがわかる。加藤が諫官や先見者であるとするならば、帰納法とアブダクションによって淡々と現実の日本社会の様子を描写し説明する文章を世間に対して書き続けて、他のメディア知識人が世間に広めている学説に対して違和感を持ち現実に適合しないと判断した場合に、そのメディア知識人の反発を受けてでも加藤が修正を試みていくことは理にかなっている。

逆に加藤を擁護した中でも特に鶴見は、思想の科学研究会を主宰し、中井の意志を継いで（鶴見(2003)）知識人と大衆の相互交流を目指しサークル形成を行うというミッテル、ないしはメディウムに支えられたミッテル的な要素を強く持つ人物であり、漫画について論じるなど大衆文化にも造詣が深く、精神的に強靱でタフネス性を誇り、認知資源が豊富であるため、藤田や江藤らのように認知的不協和を起こさずに反発を起こさなかったと解釈できる⁸⁷。なお、加藤を擁護した橋川、逆に加藤に反発した藤田も共に、思想の科学研究会の創設メンバー7名の一人である丸山眞男の弟子で、丸山と藤田は思想の科学に在籍しており、思想の科学研究会内部及び周辺でもこの点で温度差のあることが分かる。

ここで、新しく表12としてこれまでの表7～10までの項目の中から、加藤に特に関係するものをピックアップしてまとめよう。

⁸⁷ 鶴見はミッテル志向であるが、加藤と同じく論客たちに認知的不協和を起こさせて反発を受けたタイプの間であるかは別である。加藤と鶴見の違いの有無やその内実は、今後の考察対象となる。

表12：メディアウムとミッテルの見取り図 加藤関連

	メディアウムの	ミッテル的
1	媒介物・媒体	媒介する、コミュニケート/ションする
3	固定	流動
4	理論・体系	実践・素材
6	本	会話
7	安定的、自己肯定的	自己否定的
8	身分的、固定的	流動的
9	実体概念的	機能概念的
10	知識人と大衆の断絶性	知識人と大衆の互換性
11	一方向性	双方向性
14	教員による上からの教育的	学習科学的
15	官僚制組織的	学習する組織的
16	因果論的	システム思考的
17	内部指向型的	他人指向型的
18	認知資源消費小	認知資源消費大
19	認知的不協和から回避的	認知的不協和に対する耐性が十分ある
20	宦官的（「歪んだ」ミッテルに支えられたメディアウム）	諫官的（メディアウムに支えられたミッテル）
21	空気操作的コミュニケーション	他者との分かり合いのコミュニケーション
23	上に対してへりくだる	現実を見せる
24	周囲からの見栄えが良い	周囲から非難・誤解され迫害されやすい
25	ミクロ/部分的な視点を持つこと	マクロ/全体的な視点を持つこと
26	短期的	長期的
27	線形的	非線形的

加藤は教員による上からの教育ではなく学習科学・経験学習的なものを大切に知識人であり、得た経験による自己変容を重視するため、静的な媒体・媒介物＝メディアウムではなく媒介する行為であるミッテル的である。これによって加藤は安定的・固定的な理論体系に安住せず、流動的・不安定な人間関係・コミュニケーションという双方向的な社会の中での無限の変化を是とする。これはリースマンのいう用語では内部指向型ではなく他人指向型的であり、アクティブな組織内学習・思考であるシステム思考を志向するため、認知資源の消費が大きく認知的不協和に常に晒される状況に耐えることを意味する。この態度は對他者としては諫官的に他者に現実を突きつけて周囲から迫害されてでも説得を行うものであるが、マクロで長期的で非線形的な複雑な現実を見据えたものであるため先見者的なスタイルとなる。これらのメディアウムとミッテルの対比の表から、ミッテルの究極の一つの姿が先見者であることが導かれる。無論、ミッテル度が高いほど先見者に親和的であるという形で、相関関係までは言いうるが、因果関係までは言い切ることはできない。ただし、少なくとも先見者に対する耐える力となっていくことは言うて良いだろう。江藤

や大江、藤田の加藤に対する理不尽な対応は具体例として最適である。この、先見者に対する耐える力は努力だけで身に付くものとは限らないという点で本質的である。江藤の感情的な面は最期まで改善されず、大江も田中(2001)や小谷野(2018)、平山(2019)や山本(2019)での江藤との仲違いに至る流れによれば、自分の感性に合わないものを受け入れない人物である。藤田は鶴見の前ではアイデアマンとして思想の科学研究会のサークルの場を良くすることに大いに貢献した(鶴見 2022)が、加藤に対しては藤田が主敵と見なした天皇制や全体主義、転向者に対すると同様に、頑なな態度を取ってしまったように、その努力には限界が存在した。それは単純にイデオロギーが違うから、という理由ではないことは、鶴見や田口、橋川⁸⁸といった人物が加藤の意見を肯定的に捉えたことから傍証となる。諫官的な先見者に対して嫌悪の感情を持つことを克服することはイデオロギーの左右を問わず極めて難しい、ということになる。それは、3章で扱った竹内図式や3章の結論で見出した理念型で描いたような、単純に東大卒であるか否かという説明を改変したものである。

本論の結論として見出した理念型モデルは、複眼的なミッテル的思考を持つ先見者的な存在に対して寛容さを求める、という点ではハーバーマスの熟議的デモクラシーやロバート・デイヴィッド・パットナム (Robert David Putnam) のソーシャルキャピタル論など古典的な共和主義的理論とも通じるものであるが、江藤や大江、藤田のような大知識人と言われる人物でさえ対先見者への対話は不可能であった。しかも、それは単純に生まれだけで決まるのではなく、3章の結論部で見出した理念型のように東大卒が他人指向型の肯定というミッテル的思考へのブレーキになりうることも考慮すべきである。その点で、教育などの環境もまた対先見者耐性を削りうる。勿論、この理念型もまた、より多い事例をより深く観察していくことで外れ値となる事例が多く観測されうることから、再度の修正を行っていくべきである。

本稿では藤田や江藤・大江を対立する意見に対して認知資源を消耗しすぎて認知的不協和を起こした人物として基本的には描いてきた。しかし、藤田・江藤・大江共に常にそのようなことをやったわけではない。藤田は 6.1 でも説明したように、鶴見が観測したように実感論的な対応をすることもあった。江藤や大江は対立する立場に属する相手には基本的に激しい批判を繰り出した人物であるが、その際に相手の議論の構造を内在的にしっかり把握した上で直観的な鋭い批判をするという形で、単純に批評家・小説家としての才能だけではない、認知資源を適切に扱って認知的不協和に耐えたこともある。江藤は安保闘

⁸⁸ 例えば鶴見(2022)は右派の知識人で神道史家である葦津珍彦と交流して葦津を誠実であると高く評価、田口はマルクス主義と相反するとされていたアメリカ行政学・政治学の導入に努力し(大嶽 1999)、橋川は戦時中に惚れ込んだ日本浪漫派を内在的に分析(1998)したあと、西郷隆盛から北一輝・大川周明に至るアジア主義・や陸軍皇道派などの情動的な右派に至る思想的系譜を追った研究を積み重ねている(宮嶋 2020, 杉田 2022)など、異質な思想の取り込みに積極的な姿が見える。

争の際に数少ない新安保条約の条文を読み込んでアメリカと日本がより対等に近づくプラスの条約改正であることを見抜いた人物である(平山 2019:365)。また、最晩年での書籍や雑誌・新聞の再販価格維持制度に関する公正取引委員会に参加した際には、再販価格維持世鵜殿廃止論である市場主義的な考えを正確に理解した上で、意表を突く議論までも駆使して制度の維持に貢献している(平山 2019:732-733)。大江は、様々な小説理論を勉強して自らの小説に活かすという刷新を行ってきた(山本 2019:224-237)。

上記のことから、藤田・江藤・大江共に、常に誰に対しても認知的不協和に耐えられなかったというわけではないのである。すると、誰もが何時でも誰に対しても認知的不協和を起こすか否かが一貫しているわけではないこととなる。他方、加藤や鶴見、中井など認知的不協和を起こさないと評価してきた人物も同様に、認知的不協和を起こしてしまった事例も観測しうる。切り替わる条件とは何なのかを今後探求していかなければならない。

加藤が先見者だったのであれば、その戦後メディア史における役割・機能とは何だったのであろうか。戦後メディア史は竹内洋(2015)がいうように、「左翼に非ずんば人に非ず」という風潮が確かに強く、加藤の立場は高度経済成長の肯定論である限り左派から反発を受けやすい。さらに竹内(2014)はそうした前提の中で、藤田や江藤が抱く「公共知識人＝天下国家を語る」という図式から加藤がズレていることも、加藤が反発を受けた要因であったとする。竹内が分析するように、それは確かに卒業した大学の風土・ハビトゥスの違いが関連しているものの(松井 2020c)、あくまでそれらが形成するものは一つの傾向である。一方で、鶴見など加藤と親和的な人物の中には左派知識人も一定数存在する。加藤に反発した江藤が後に右派に転じたように、加藤への反発あるいは親和的傾向は単純な思想の左右によるものではないことがわかる。本論で出てきた人物を天才(狭義のメディア知識人、講談社文化的)⁸⁹、秀才(専門知識人的、岩波文化的)、先見者(公共知識人的、中間文化的)の三つに区分し、それぞれ対先見者耐性の有無でさらに分けるならば、表11を基にして以下の表13のようにまとめられる。

表13 先見者耐性と各属性と本論文での具体例

	天才	秀才	先見者
対先見者耐性あり	鶴見、梅棹	田口	加藤
対先見者耐性なし	江藤、大江	藤田	?

天才と秀才はそれぞれどのような要件だろうか。ここで古田(2014, 2015)の概念である「こちら側」「向こう側」を用いて説明する。「こちら側」とは単純に、五感で感じることのできる世界であり、「向こう側」はその外側全てを指す。ただし、「向こう側」といって

⁸⁹ 悪く言えば天才は生まれながらのファシスト的人間であり、秀才は生まれながらの頭の固い吏員型官僚の様な人間、ということになる。ウェーバーの分類で言えば前者がカリスマ的支配、後者が合法的支配と親和的である。

も神などのいる異界・あの世ではなくこの世の存在である。例えば、クォークは肉眼では観測不能であるが、電子顕微鏡を用いることで観測可能となる。観測可能になるまでは、クォークは「向こう側」の存在であったということになる。

「向こう側」に存在するものを発見するのが科学であるが、「向こう側」への到達方法は4つある。そのうち誰でも可能なものは、ひたすら実験を繰り返して総当たりするにじり寄り、膨大なデータから共通因子のあるものを集めて類型化するマーカー総ざらいである。それに対して、「こちら側」から「向こう側」へと飛び出て再び「こちら側」へと戻ってくるときに新しい概念を発見する超越と、「向こう側」から一方的に「こちら側」へと突然ビジョンが降ってくる直観は、得意な人物と苦手な人物に二分される。この超越と直観が得意なのが天才、苦手なのが秀才であると区分できる。

以上の説明に従えば、江藤と大江は天才的、藤田は秀才的と区分することが可能である。だが、三人とも対先見者耐性に欠ける人物である。それに対して本論の中で確実に対先見者耐性が高いと思われる人物として鶴見、田口、さらには最期まで加藤と親しかった梅棹がいるが、鶴見と梅棹は直観に優れ空気を支配する力の強い狭義のメディア知識人・講談社文化的なコミュニケーションを得意とする人物として著名であり、それに比べると田口は秀才的＝専門知識人的・岩波知識人的である。表12ではさらに、先見者であることと先見者耐性が高いことはあくまで関連しているに過ぎないという観点から、先見者でありながらも先見者耐性に欠ける人物も存在しうることが想定されているが、それは今後の課題である。

以上の事例から推測するに、加藤の存在は、江藤によって引き起こされた論争によってたまたま、左右とは別の、「加藤と対応した人物は立場が異なっても話ができる人物であるか否か」を判定する機能を果たしたのではないだろうかと考えられる。もし加藤が先見者であるならば、戦後日本においてバブル期までの間、概ね未来の予想に成功し、高度経済成長以後の日本の世相を代表する機能を果たしたと整合的である。

加藤が江藤・大江・藤田から理不尽に迫害された理由は加藤が先見者だからだろうか、を解明することが研究目的であった。その上で、作業仮説では、加藤は他人指向型・中間文化論に対して親和的であり、中公新書へのかかわりでは戦略的なメディアへの対応を行った人物であり、中井正一のようにミッテル的思考に強く認知的不協和への耐久力の接続をできる精神的なタフネスを誇る人物であると描き分析できた。先見者であるためには必ず認知的不協和への耐久力が求められる。他人指向型・中間文化論や中公新書へのメディア戦略は、加藤の全体的・長期的な思考というミッテル的思考の強さと認知的不協和への耐久力の高さを物語る、すなわち加藤が先見者である可能性を100%とまでは言えなくともかなりの程度まで高める重要な要素である。

また、加藤のような先見者が活躍するためには、江藤や大江、藤田といった先見者＝諫官を嫌悪し宦官に弱い人物の理不尽な反発を跳ね返すことが必要不可欠であるが、そのためには鶴見や梅棹、田口のような対先見者耐性の高い人物との協力がある方が良い。事実、

藤田の反撥には鶴見が、江藤と大江の反撥には田口が、それぞれ加藤の援軍としての役割を果たした。その際、対先見者耐性の高い人物は必ずしも思想的に一致している必要はなく、内在的な論理構造を把握できれば十分である。現に鶴見も田口も、加藤の意見に全面的に賛同しているわけではなかった。さらに言えば、仮に鶴見や田口が加藤と全面的に立場が対立していたとしても、さして問題はない。宦官であれ江藤や大江や藤田であれ対先見者耐性の低い人物をいかに封じるかは、今後の社会では重要な命題であるが、加藤のような先見者だけでは単に反発されたり排除されるだけであるため、対先見者耐性の高い天才・秀才という存在に光が当たるのである。以上のような考察によって、清水のような世論を煽り空気を形成するパフォーマー型の狭義のメディア知識人とは違った、公共知識人的な素養を多く持つ先見者的な広義のメディア知識人というカテゴリーを先行研究者である竹内以上に精緻化させることに繋がった。山本の空気論では空気の醸成は自然に出来上がっていくモデルであり、更に新しく狭義のメディア知識人が空気を操作するというモデルがあることを既に松井・中尾(2020)は説明している。その上で水を差すことで空気を破壊することを山本は説明しているが、公共知識人や先見者が水を積極的に差すことができると繋げることが出来る。その際に、戦前の空気は国家権力が言論統制という形も含めて強く関与しており、戦後の空気は国家権力の関与が弱まるという違いがあるが、それぞれ様々なアクターが空気の醸成や操作に関与しているという点では戦前戦後共に共通しているといえる。山本の議論は戦後の空気に反逆した先見者という視点から本論を概観することに役立つだろう。気質としては天才⇔(狭義の)メディア知識人、秀才⇔専門知識人、先見者⇔公共知識人と言えるが、天才や秀才であっても鶴見や田口のように対先見者耐性の高い場合は機能面としては竹内が言うところの公共知識人へと近接するからである。また、仮にもともと先見者であったとしても自らや他の先見者の見せる現実に耐えられなくなった、「先見者でありながらも先見者耐性に欠ける人物」となってしまった場合は公共知識人からは遠ざかってしまうとも言える。竹内が公共知識人と括りたい知識人の大きな条件として、対先見者耐性を第一に挙げることができるようになったのは大きい。

加藤は恐らく先見者である可能性が高い、と本論では結論付けている。とはいえ、実際加藤は果たしてどこまで先見者としての機能を果たしたのかまた加藤本人が先見者としての機能に対してどこまで自覚的に自らの役割として認識していたかについては本稿の守備範囲を超えるものであり、今後の課題として残る。先見者というカテゴリーは既にアブダクション的方法によって得られており、本論では先見者の具体例として加藤を吟味するという帰納的方法を用いた。本論での考察はあくまで件数はたったの一件であり、アブダクションで得た仮説の検証という点では心もとないため、今後も帰納と演繹による精査もまたしていかなければならない。今後の研究としては表層的な思想の左右とは別の、様々な側面が見出されることで、戦後メディア史の姿が様々な学者たちによって更新されていくことを期待し、筆者もその一助をなすことができるよう努めていきたい。

謝辞

「先見の明」「先見者」という捉え難い概念を真正面から扱って博士論文を執筆することは、現行の論文の構成方法（メソッド）や大学のシステム上極めて困難なことでした。これから挙げる、研究を進めるにあたってお世話になった諸先生方のお力なくては不可能なことだったと思います。お礼を申し上げます。

主指導教授である後藤嘉宏先生からは、研究や調査の方法論や分野に関する基礎知識など研究者として最も大切なものを長年かけてご指導いただきました。心よりお礼申し上げます。社会学と思想史、メディア論を専門としつつも様々な分野の議論にも対応できる古き良き教養主義者として、本論文を単純なメソッド的方法だけでなく、目に見えにくい直観的な議論を含めた様々な方向性から鋭いご指摘を何度も頂いたことで、本論文は確実に進んでいきました。もし後藤先生がいなければ、間違いなく提出までこぎつけませんでした。後藤先生自身の、研究対象として中井正一を追う姿に「先見者」を感じたことも、大いなる目標として励まされました。研究者として後藤先生の背中を一生追いかけても追いつけるか怪しいですが、せめてその影には触れるくらいにはたどり着きたいと思っています。

副指導教授である横山幹子先生と逸村裕先生にもご指導いただきました。心よりお礼申し上げます。分析哲学を専門とする横山先生の、鋭く文章の論理の破綻を見破る目には何度も助けて頂きました。逸村先生には大局的視点から細かい視点までアドバイスを頂き、ゼミ合宿への参加も許可して頂き図書館情報学の本流の研究者との交流という非常に貴重な経験を得ることが出来ました。

学位論文の予備・本審査では後藤先生、横山先生、逸村先生に加えて照山絢子先生と九州大学の杉山あかし先生から数々の貴重なご意見を頂戴しました。心よりお礼申し上げます。照山先生には英文抄録の文法や語彙のチェックをして頂いたほか、研究の応用に関する鋭い質問をして頂き大変参考になりました。杉山先生からは研究の根本を問う質問を何度もして頂き、その度に論文の質が見違えるように磨かれていきました。

筑波大学の古田博司先生からも様々なご意見をいただきました。心よりお礼申し上げます。知識人と思想史のテーマを指導できる古田先生の演習にも参加を希望し、他研究科に属するにもかかわらず快諾していただいたところからご縁が出来ました。演習の最中口頭で「先見の明」「先見者」について概念を形成しだしていくという機会に立ち会い、その後まだ生煮えだった「先見の明」に関する原稿を読んでいただいて面白いという評価をいただいたことは大きな励みになりました。さらに古田先生自身、まさに「先見者」としてメディア上で活躍し10年前の言説の正しさが証明されるという場面に何度も出くわした方であり、後藤先生と並ぶ実際の「先見者」の姿から本論でのモデル形成の際にも大変参考になりました。

ジャンル不定カルチャー誌『アレ』の発行組織アレ★Club には「先見の明」「先見者」

に関する論考を投稿し、載せて頂くことで博論の基盤形成に大きなアシストとなりました。心よりお礼申し上げます。既存の査読付き論文に載りにくいテーマが好きでたまらない自分にとって、名伏し難い「アレ」としか言いようのないものを扱うことを謳う『アレ』編集部の方針は、自分にとって拾う神に等しかったです。特に最初に原稿案を読んでアレ★Club に誘ってくださった市川遊佐さま、先見者論を載せることを方針としても快諾して下さった山下泰春さまと堀江くらはさま、毎度徹底的に討論し率直な意見を交わしながら字句から論旨に至るまで根気強く訂正して下さった永井光暁さまにはその後の論考でもお世話になりました。

一橋大学の中尾優奈さんにもお世話になりました。心よりお礼申し上げます。中尾さんが発見した事例や概念を練り上げていくうちに、古田先生の「先見者」概念として纏めることが出来た他、空気と空気操作者という同じく概念化しにくい概念についても共同研究の結果見出すことができました。中尾さんは、自分が普通に生きていれば民間か公務員を目指していたであろう人生を大きく変えたうちの一人だろうと思っています。

後藤研究室に属する期間が長かったため、歴代後藤研究室の先輩・同期・後輩の諸氏にも研究を見聞きしていただきその度にアドバイスをいただきました。心よりお礼申し上げます。特に聖徳大学の片山ふみ先生、関東学院大学の千錫烈先生、図書館総合研究所の岡部晋典先生にはなかなか論文の進まない後輩を見てご心配をかけさせてしまい、感謝してもしきれないほどの様々な支援をいただきました。このご恩は何れの日か何かしらの形で返さなければならないと思っています。

博論執筆は長丁場であり、公私共に様々な方からお世話になりました。聖徳短期大学の野口康人先生、沖縄国際大学の山口真也先生、八洲学園大学の赤山みほ先生、鶴見大学の小南理恵先生、東海大学の竹之内禎先生、東海大学の西田洋平先生、筑波大学の池内淳先生、文教大学の池内有為先生、麗澤大学の川久保剛先生、明星大学の緒賀正浩先生、岩手県立大学の杉谷和哉先生、国際日本文化研究センターの西田彰一先生、総合研究大学院大学の吉川弘晃さん、東京大学の鈴木健吾さん、明星大学の二村健先生、明星大学の平井歩実先生、日本経済大学の久野潤先生、筑波大学の掛谷英紀先生、武蔵大学の笠松怜史先生、帝京平成大学の田代信久先生、歴史研究者の岩井秀一郎さん、日本思想史研究者の今西宏之さん、七夕研究所の北島哲郎さんにそれぞれお礼を申し上げます。

文献リスト

- 赤尾勝己. 新しい生涯学習概論 後期近代社会に生きる私たちの学び. ミネルヴァ書房, 2012, 276p.
- アレント・ハンナ. エルサレムのアイヒマン 悪の陳腐さについての報告. 大久保和郎訳, みすず書房, 2017, 472p.
- 安藤史江. コア・テキスト 組織学習. 新世社, 2019, 264p.
- 池見澄隆. 慚愧の精神史 「もうひとつの恥」の構造と展開. 仏教大学通信教育部, 2004, 220p.
- 井口一郎. マス・コミュニケーション どんなふう到大衆へはたらきかけるか その理論とその実証. 光文社, 1951, 257p.
- 磯直樹. 認識と反省性 ピエール・ブルデューの社会学的思考. 法政大学出版局, 2020, 438p.
- 伊藤隆. 大政翼賛会への道 近衛新体制. 講談社, 2015, 256p.
- 稲葉振一郎. 「新自由主義」の妖怪 資本主義史論の試み. 亜紀書房, 2018, 376p.
- 稲葉三千男. マスコミの綜合理論. 創風社, 1987, 461p.
- 今村仁司. アルチュセール 認識論的切斷. 講談社, 1997, 353p. 犬飼裕一, 和辻哲郎の社会学, 八千代出版, 2016, 232p.
- 上山春平. 日本の思想 土着と欧化の系譜. 岩波書店, 1998, 335p.
- 上山春平. 弁証法の系譜 マルクス主義とプラグマティズム. こぶし書房, 2005, 302p.
- 梅棹忠夫. アマチュア思想家宣言. 思想の科学, 1954, 1, 1, p. 38-45.
- 梅棹忠夫. 知的生産の技術. 岩波書店, 1969, 218p.
- 梅棹忠夫. 情報の文明学. 中央公論新社, 1999, 316p.
- 内川芳美, 有山輝雄, 乾照夫他. 内川芳美氏に聞く = 回想・初期の新聞研究. メディア史研究. 2003, 15, p. 147-170.
- 江藤淳. 実感主義は人間的か. 中央公論. 1957, 3, p. 278-287.
- 江藤淳. 加藤秀俊の実感主義. 日本読書新聞, 1958.
- 大芦治. 心理学史. ナカニシヤ出版, 2016, 396p.
- 大井赤亥. ハロルド・ラスキの政治学 公共的知識人の政治参加とリベラリズムの再定義. 東京大学出版会, 2019, 312p.
- 大嶽秀夫. 高度成長期の政治学. 東京大学出版会, 1999, 198p.
- 海野道郎. 社会的ジレンマ 合理的選択理論による問題解決の試み. ミネルヴァ書房, 2021, 360p.
- オルソン・マンサー. 集合行為 公共財と集団理論. 依田博, 森脇俊雅訳, ミネルヴァ書房, 1996, 248p.
- オルテガ・イ・ガセット・ホセ. 大衆の反逆. 佐々木孝訳, 岩波書店, 2020, 428p.
- 片山修. 山崎正和の遺言. 東洋経済新報社, 2021, 352p.

- 片山杜秀. 未完のファシズム 「持たざる国」日本の運命. 新潮社, 2012, 346p.
- 加藤秀治郎. 政治学 第3版. 芦書房, 2008, 343p.
- 加藤秀俊. “アメリカ社会学の理論性格 —その歴史意識と関連して—”. 加藤秀俊著作データベース, 1953, <http://katodb.la.coocan.jp/doc/text/2934.html>, (参照 2021-07-20)
- 加藤秀俊. 中間文化論. 中央公論. 1957, 72, 3, p. 252-261.
- 加藤秀俊. 実感二つの文脈—江藤淳への返信. 日本読書新聞, 1958.
- 加藤秀俊. 日本の新書文化 (上). 東京新聞, 1962a.
- 加藤秀俊. 日本の新書文化 (下). 東京新聞, 1962b.
- 加藤秀俊. 整理学 忙しさからの解放. 中央公論社, 1963, 188p.
- 加藤秀俊編著. 明治・大正・昭和世相史. 社会思想社, 1967, 339p.
- 加藤秀俊. 取材学 探求の技法. 中央公論社, 1975, 184p.
- 加藤秀俊. 文化とコミュニケーション 増補改訂版. 思索社, 1977, 346p.
- 加藤秀俊. 加藤秀俊著作集 1 探求の技法. 中央公論社, 1980, 383p.
- 加藤秀俊. 加藤秀俊著作集 3 世相史. 中央公論社, 1981, 324p.
- 加藤秀俊. わが師わが友 ある同時代史. 中央公論社, 1982, 224p.
- 加藤秀俊. 暮らしの世相史. 中央公論新社, 2002, 243p.
- 加藤秀俊. 独学のすすめ. 筑摩書房, 2009, 261p.
- 加藤秀俊. 常識人の作法. 講談社, 2010, 266p.
- 加藤秀俊. メディアの展開 情報社会学からみた「近代」. 中央公論新社, 2015, 613p.
- 加藤秀俊. 加藤秀俊社会学選集 上. 人文書院, 2016, 312p.
- 加藤秀俊. 九十歳のラブレター. 新潮社, 2021, 204p.
- 苅部直. 丸山眞男 リベラリストの肖像. 岩波書店, 2006, 228p.
- 川田稔. 昭和陸軍全史 3 太平洋戦争. 講談社, 2015, 456p.
- 金森修. バシユラール 科学と詩. 講談社, 1996, 321p.
- 亀田達也. モラルの起源 実験社会科学からの問い. 岩波書店, 2017, 208p.
- カリエール・フランソワ. 外交談判法. 坂野正高訳, 1978, 228p.
- ガルブレイス. J. K. ゆたかな社会 決定版. 鈴木哲太郎訳, 岩波書店, 2006, 430p.
- 川喜田二郎. 発想法 創造性開発のために. 中央公論社, 1967, 220p.
- 川喜田二郎. 続発想法 KJ法の展開と応用. 中央公論社, 1967, 316p.
- 木下長宏. 中井正一: 新しい「美学」の試み, 1995, 263p.
- 久野収, 鶴見俊輔, 藤田省三. 戦後日本の思想. 岩波書店, 2010, 368p.
- 蔵原惟人. 文化革命と知識層の任務. 世界. 1947, 6, 1-12p.
- 黒川創. 鶴見俊輔伝. 新潮社, 2018, 566p.
- コーンハウザー・ウィリアム. 大衆社会の政治. 辻村明訳, 東京創元社, 1961, 299p.
- 呉兢. 貞観政要 全訳注. 石見清裕訳注, 講談社, 2021, 776p.
- 後藤嘉宏, 中井正一のメディア論. 学文社, 2005, 561p.

- 後藤嘉宏. 中井正一におけるメディアム、ミッテル概念の関係性を再考するために 「脱出と回帰」(1951)等の再検討と「メディアムに支えられたミッテル」. 図書館情報メディア研究, 2016, 14, 1, p. 61-79.
- 後藤嘉宏. 中井正一「委員会の論理」(1936)における嘘言の媒介について. 情報メディア研究, 2018, 16(1), p. 41-69.
- 後藤嘉宏. なぜ私は中井正一のメディアム、ミッテル、二つの概念にこだわり続けているのか. 思想の科学研究会年報, 2019, 1, p. 84-106.
- 後藤嘉宏. 三木清のパスカル、親鸞像と中井正一における対話の論理の再構築. 思想の科学研究会年報, 2021a, 2, p. 110-106.
- 後藤嘉宏. 志明院から帰ってきて思ったこと. 思想の科学研究会年報, 2021b, 2, p. 8-13.
- 小松左京. やぶれかぶれ青春記・大阪万博奮闘記. 新潮社, 2018, 400p.
- 小谷野敦. 江藤淳と大江健三郎 戦後日本の文学と政治. 筑摩書房, 2018, 469p.
- 坂本多加雄, 坂本多加雄選集 I 近代日本精神史, 藤原書店, 2005, 678p.
- 佐藤卓己. 輿論と世論 日本の民意の系譜学. 新潮社, 2008, 350p.
- 佐藤卓己. 物語岩波書店百年史. 岩波書店, 2013, 384p.
- 佐藤達哉, 溝口元編著. 通史 日本の心理学. 北大路書房, 1997, 640p.
- サトウタツヤ. 方法としての心理学史 心理学を語り直す. 新曜社, 2011, 214p.
- 佐藤俊樹. 社会は情報化の夢を見る [新世紀版] ノイマンの夢・近代の欲望. 河出書房新社, 2010, 354p.
- 佐藤俊樹. 社会科学と因果分析 ウェーバーの方法論から知の現在へ. 岩波書店, 2019, 417p.
- 佐藤信, 五味文彦, 高埜俊彦, 鳥海靖編. 詳説日本史研究. 山川出版社, 2017, 566p.
- サルトーリ・ジョヴァンニ. 現代政党学 政党システム論の分析枠組み. 早稲田大学出版部. 2009, 602p.
- 思想の科学研究会編. 共同研究 転向 中. 平凡社, 1960, 492p.
- 清水幾太郎. 本はどう読むか. 講談社, 1972, 182p.
- シュミット・カール. 政治的なものの概念. 田中浩・原田武雄訳, 未来社, 1970, 128p.
- 庄司武史. 清水幾太郎 異彩の学匠の思想と実践. ミネルヴァ書房, 2015, 426p.
- 庄司武史. 清水幾太郎 経験、この人間的なるもの. ミネルヴァ書房, 2020, 432p.
- 杉田俊介. 橋川文三とその浪漫. 河出書房新社, 2022, 504p.
- 杉山光信. 思想とその装置 1 戦後啓蒙と社会科学の思想. 新曜社, 1983, 233p.
- 盛山和夫. 協力の条件. 有斐閣, 2021, 388p.
- センゲ・ピーター・M. 学習する組織 システム思考で未来を創造する. 枝廣淳子, 小田理一郎, 中小路佳代子訳, 英治出版, 2011, 584p.
- 高橋濤子. 心の科学史 西洋心理学の背景と実験心理学の誕生. 講談社, 2016, 432p.
- 田口富久治. 丸山眞男とマルクスのはざままで. 日本経済評論社, 2005, 272p.
- 竹内郁郎. 戦後日本のマス・コミュニケーション理論の系譜. マス・コミュニケーション研

- 究. 1998, 53. p. 5-17.
- 竹内洋. 大衆モダニズムの夢の跡 彷徨する「教養」と大学. 新曜社, 2001, 292p.
- 竹内洋. 教養主義の没落 変わりゆくエリート学生文化. 中央公論新社, 2003, 268p.
- 竹内洋, 佐藤卓己, 稲垣恭子. 日本の論壇雑誌：教養メディアの盛衰. 創元社, 2014, 350p.
- 竹内洋. 大衆の幻像. 中央公論新社, 2014, 321p.
- 竹内洋. 革新幻想の戦後史 上. 中央公論新社, 2015, 369p.
- 竹内洋. 革新幻想の戦後史 下. 中央公論新社, 2015, 377p.
- 竹内洋. 清水幾太郎の覇権と忘却 メディアと知識人. 中央公論新社, 2018, 423p.
- 橋本俊詔. 三商大 東京・大阪・神戸 日本のビジネス教育の源流. 岩波書店, 2012, 256p.
- 田中和生, 江藤淳. 慶應義塾大学出版会, 2001, 246p.
- 田村紀雄. 「新しい新聞学」の誕生と「マスコミ」論の影響. コミュニケーション科学. 2012, 35, p. 123-133.
- 丹治信春. クワイン ホーリズムの哲学. 平凡社, 2009, 346p.
- 中央公論新社編. 中公新書総解説目録. 中央公論新社, 2012, 448p.
- 中公新書編集部. “中公新書とは”.
<https://www.chuko.co.jp/shinsho/portal/about.html>, (参照 2021-07-20)
- 中部大学編. ARENA 2011. 風媒社. 2011, 12, 502p.
- 趙星銀. 「大衆」と「市民」の戦後思想 藤田省三と松下圭一. 岩波書店, 2017, 432p.
- 津金澤聰廣. 京都大学教育学部におけるメディア史研究の系譜 開講科目についての覚え書き. 京都メディア史研究年報, 2016, 2, p. 14-18.
- 筒井清忠編. 日本の歴史社会学. 岩波書店, 1999, 338p.
- 筒井清忠. 近衛文麿 教養主義的ポピュリストの悲劇. 岩波書店, 2009, 375p.
- 筒井清忠. 日本型「教養」の運命 歴史社会的考察. 岩波書店, 2009, 242p.
- 筒井清忠編. 昭和史講義 軍人篇. 筑摩書房, 2018, 301p.
- 筒井清忠編. 大正史講義. 筑摩書房, 2021, 508p.
- 鶴見俊輔. 限界芸術論. 筑摩書房, 1999, 462p.
- 鶴見俊輔. 源流にいた人. 場, こぶし書房, 2003, 25, p. 3-4.
- 鶴見俊輔. アメリカ哲学. こぶし書房, 2008, 366p.
- 鶴見俊輔. 期待と回想. 筑摩書房, 2022, 615p.
- ドーキンス・リチャード. 利己的な遺伝子 40周年記念版. 日高敏隆, 岸由二, 羽田節子, 垂水雄二訳, 紀伊國屋書店, 2018, 584p.
- 遠山茂樹, 今井清一, 藤原彰. 昭和史. 岩波書店, 1955, 238p.
- 戸田山和久. 知識の哲学. 産業図書, 2002, 272p.
- 富永健一, 戦後日本の社会学 一つの同時代学史, 東京大学出版会, 2004, 471p.
- 中井正一. 中井正一全集第1巻 哲学と美学の接点. 美術出版社, 1981a, 471p.
- 中井正一. 中井正一全集第2巻 転換期の美学的課題. 美術出版社, 1965, 389p.

- 中井正一. 中井正一全集第3巻 現代芸術の空間. 美術出版社, 1964, 354p.
- 中井正一. 中井正一全集第4巻 文化と集団の論理. 美術出版社, 1981b, 375p.
- 中井正一. 中井正一評論集, 岩波書店, 1995, 406p.
- 中井正一. 美学入門, 中央公論社, 2010, 180p.
- 西浦進. 昭和戦争史の証言 日本陸軍終焉の真実. 日本経済新聞出版社, 2013, 288p.
- 西垣通. 生命と機械をつなぐ知 基礎情報学入門. 高陵社書店, 2012, 213p.
- 西部邁. 知識人の生態. PHP 研究所, 1996, 197p.
- ニコルソン・ハロルド. 外交. 斎藤眞, 深谷満雄訳, 東京大学出版会, 1968, 273p.
- 沼上幹. 組織戦略の考え方 企業経営の健全性のために. 筑摩書房, 2003, 221p.
- 野中郁次郎, 竹内弘高. 知識創造企業 新装版. 梅本勝博訳, 東洋経済新報社, 2020, p.
- 野中郁次郎, 戸部良一, 鎌田伸一, 寺本義也, 杉乃尾宜生, 村井友秀. 戦略の本質 戦史に学ぶ逆転のリーダーシップ. 日本経済新聞出版, 2008, 496p.
- パットナム・ロバート・D. 孤独なボウリング 米国コミュニティの崩壊と再生. 柴内康文訳, 柏書房, 2006, 689p.
- バーネイズ・エドワード. プロパガンダ [新版]. 中田安彦訳, 成甲書房, 2010, 240p.
- ハイエク・フリードリヒ. 隷従への道. 村井章子訳, 日経 BP, 2016, 536p.
- 箱田裕司, 都築誉史, 川畑秀明, 荻原滋. 認知心理学. 有斐閣, 2010, 523p.
- 橋川文三, 加藤秀俊, 江藤淳, 田口富久治, 大江健三郎. 『実感』をどう発展させるか. 中央公論. 1958, p. 226-237.
- 橋川文三. 日本浪漫派批判序説. 講談社, 1998, 326p.
- 長谷川寿一, 長谷川真理子. 進化と人間行動. 東京大学出版会, 2000, 291p.
- 服部聡. 松岡洋右と日米開戦 大衆政治家の功と罪. 吉川弘文館, 2020, 222p.
- 原田隆之. サイコパスの真実. 筑摩書房, 2018, 254p.
- バンド・ジュリアン. 知識人の裏切り. 宇京頼三訳, 未来社, 1990, 323p.
- 日高六郎. 『実感』と『理論』について 特集『八月十五日』を読んで. 世界. 1958, p. 254-260.
- 日高六郎, 杉山光信編. 日高六郎セレクション. 岩波書店, 2011, 353p.
- 飛矢崎貴規. 一九五〇年代後半における「実感」論争の位置 橋川文三の議論を中心に. 文学研究論集. 2016, 45, p. 185-206.
- 平山周吉. 江藤淳は甦る. 新潮社, 2019, 783p.
- フーコー・ミシェル. 監獄の誕生<新装版> 監視と処罰. 田村俣訳, 新潮社, 2020, 393p.
- フェスティンガー・レオン. 認知的不協和の理論 社会心理学序説. 末永俊郎訳, 誠信書房, 1965, 277p.
- 古田博司. ヨーロッパ思想を読み解く 何が近代科学を生んだか. 筑摩書房, 2014, 228p.
- 古田博司. ビジネスにも人生にも役立つ 使える哲学. ディスカバートゥエンティワン, 2015, 163p.

- 古田博司. 旧約聖書の政治史 預言者たちの過酷なサバイバル. 春秋社, 2020, 376p.
- ブルーム・ポール. 反共感論 社会はいかに判断を誤るか. 高橋洋訳, 白揚社, 2018, 318p.
- ベイトソン・グレゴリー. 精神の生態学. 佐藤良明訳, 新思索社, 2000, 706p.
- ベルクソン・アンリ. 時間と自由. 中村文郎訳, 岩波書店, 2001, 311p.
- ボードリヤール・ジャン. 消費社会の神話と構造 新装版. 今村仁司, 塚原史訳, 紀伊國屋書店, 2015, 368p.
- ポランニー・マイケル. 暗黙知の次元. 高橋勇夫訳, 筑摩書房, 2003, 194p.
- 堀口剛. 戦時期における岩波文庫の受容古典と教養の接合をめぐって. マス・コミュニケーション研究. 2008, 72, 40-57p.
- 本間伸一郎. ミッテルの夢はどこで見えるのか. 思想の科学研究会年報, 2021, 2, p. 102-103.
- K. マートン・ロバート. 社会理論と社会構造. 森東吾, 森好夫, 金沢実, 中島竜太郎訳, みすず書房, 1961, 616p.
- マイネッケ・フリードリヒ. 近代史における国家理性の理念Ⅰ. 岸田達也訳, 中央公論新社, 2016, 406p.
- マイネッケ・フリードリヒ. 近代史における国家理性の理念Ⅱ. 岸田達也訳, 中央公論新社, 2016, 183p.
- 松井勇起. メディア知識人を典型とする煽動行為者の範囲から見る人間類型—承認欲求と界の戦略との関係. 図書館情報メディア研究. 2018a, p. 1-14.
- 松井勇起. 「先見の明」は科学的に解明できるか?. アレ. アレ★Club. 5, 2018b, p. 88-121.
- 松井勇起. 「時を動かす」ということについて 「〈異なる〉メカニズムとの直面」における「認知的不協和」の克服. アレ, 2020a, p. 122-166.
- 松井勇起. 現代組織における「宦官」とは—三田村泰助『宦官』の組織論的再解釈. 八洲学園大学紀要. 2020b, 16, p. 61-67.
- 松井勇起. メディア知識人論から見た加藤秀俊論 —実感論争における他人指向型社会への評価に焦点を当てて—. 情報メディア研究. 2020c, p. 81-99.
- 松井勇起, 中尾優奈. 『空気』、そして『空気』の操作主体に対する社会科学的考察 富永恭次陸軍中将・東條英機陸軍大将間の組織内コミュニケーション行為分析より. 戦略研究, 27, 2020, p. 25-48.
- 松尾睦. 職場が生きる 人が育つ「経験学習」入門. ダイヤモンド社, 2011, 224p.
- 松下圭一. 戦後政治の歴史と思想. 筑摩書房, 1994, 527p.
- 松永智子. 知識のいま、むかし、これから 加藤秀俊『メディアの展開』から考える. 京都メディア史研究年報. 2016, 2, p. 29-48.
- 間々田孝夫. 消費社会論. 有斐閣, 2000, 285p.
- 丸山眞男. 日本の思想. 岩波書店, 1961, 192p.
- 丸山眞男. 増補版 現代政治の思想と行動. 未来社, 1964, 585p.
- 丸山眞男. 自己内対話 3冊のノートから. みすず書房, 1998, 287p.

- 南博. 南博セレクション4 マスコミと風俗. 勁草書房, 2003, 512p.
- 南博. 南博セレクション7 出会いの人生 自伝のころみ. 勁草書房, 2004, 522p.
- 宮嶋繁明. 橋川文三 野戦攻城の思想. 弦書房, 2020, 380p.
- ライト・ミルズ・チャールズ. 社会学的想像力. 伊奈正人, 中村好孝訳, 筑摩書房, 2017, 411p.
- ミンツバーグ・ヘンリー, アルストランド・ブルース, ランペル・ジョセフ. 戦略サファリ 第2版 戦略マネジメント・コンプリート・ガイドブック. 齋藤嘉則訳, 東洋経済新報社, 2012, 488p.
- 村上一郎, 竹内洋解説. 岩波茂雄と出版文化 近代日本の教養主義. 講談社, 2013, 176p.
- 村上泰亮. 新中間大衆の時代 戦後日本の解剖学. 中央公論社, 1984, 354p.
- 毛沢東. 抗日遊撃戦争論. 藤田敬一, 吉田富夫, 小野信爾訳中央公論新社, 2014, 265p.
- 山本昭宏. 大江健三郎とその時代「戦後」に選ばれた小説家. 人文書院, 2019, 327p.
- 山本七平. 空気の研究. 文藝春秋, 1983, 237p
- 米盛裕二. アブダクション 仮説と発見の論理. 勁草書房, 2007, 260p.
- リースマン・デイビッド. 孤独な群衆 上. 加藤秀俊訳. みすず書房, 2013, 384p.
- リースマン・デイビッド. 孤独な群衆 下. 加藤秀俊訳. みすず書房, 2013, 336p.
- リオタール・ジャン＝フランソワ. 知識人の終焉 新装版. 原田佳彦, 清水正訳, 法政大学出版局, 2010, 136p.
- リンス・J. 全体主義体制と権威主義体制. 睦月規子, 黒川敬吾, 村上智章, 木原滋哉, 高橋進訳, 法律文化社, 1995, 283p.
- ル・ボン・ギュスターヴ. 群集心理. 桜井成夫訳, 講談社. 1993. 302p.
- 矢澤修次郎. 現代アメリカ社会学史研究. 東京大学出版会, 1984, 324p.
- 柳田国男. 明治大正史 世相編. 中央公論新社, 2001, 438p.

全研究業績のリスト

① 査読制度のある学術雑誌

- (1) 松井勇起「メディア知識人を典型とする煽動行為者の範囲から見る人間類型：承認欲求と界の戦略との関係」図書館情報メディア研究, Vol. 16, No. 1, 2018, pp. 1-14.
- (2) 松井勇起, 中尾優奈「「空気」、そして「空気」の操作主体に対する社会科学的考察：富永恭次陸軍中将・東條英機陸軍大将間の組織内コミュニケーション行為分析より」戦略研究, Vol. 27, 2020, pp. 25-48.
- (3) 松井勇起, 「メディア知識人論から見た加藤秀俊論—実感論争における他人指向型社会への評価に焦点を当てて—」情報メディア研究, Vol. 19, No. 1, 2020, pp. 81-99.
- (4) 松井勇起, 「加藤秀俊の新書メディア戦略—中公新書「刊行のことば」から見えるプラグマティズム—」情報メディア研究, Vol. 21, No. 1, 2022, pp. 1-20.
- (5) 松井勇起, 後藤嘉宏, 「加藤秀俊のタフネス性と先見性—中井正一のメディアウム・ミッテル概念を用いた考察—」図書館情報メディア研究, Vol. 19, No. 1, 2022, pp. 1-26.

② 査読制度のない学術雑誌

- (1) 松井勇起「現代組織における「宦官」とは — 三田村泰助『宦官』の組織論的再解釈 —」八洲学園大学紀要, 16, 2020, pp. 61-67.
- (2) 松井勇起「図書館員の待遇の考察—機能としての「低賃金カルテル」—」八洲学園大学紀要, 17, 2021, pp. 37-43.
- (3) 松井勇起「フリーライダーの思想的基盤 — ミクロ的行動に限定された認知とリスクなき無責任 —」八洲学園大学紀要, 18, 2022, pp. 25-36.

③ 著書

- (1) 松井勇起「第5章 各種情報源の特質と利用法・解説と評価——利用者からの質問事例を手がかりに 5章4, 6、コラム」pp. 山本順一監修, 山口真也, 千錫烈, 望月道浩編著. 情報サービス論 情報と人びとをつなぐ図書館員の専門性. ミネルヴァ書房, 2018, 256p.
- (2) 松井勇起「第13章 ネットワーク情報資源の組織化 13.4~6」pp. 140-141, 143-149, 竹之内禎, 山口洋, 西田洋平編著, 情報資源組織論, 東海大学出版部, 2020, 158p.

④ 口頭発表

- (1) 松井勇起「知識人論の整理 —メディア知識人を論じる基礎—」第11回メディア情報検証学術研究会 2016年12月1日
- (2) 松井勇起「中公新書刊行の言葉の思想 加藤秀俊の経験論」日本出版学会 秋季大会 2017年12月2日

- (3) 松井勇起「メディア知識人としての加藤秀俊」歴史論研究会 2020年6月20日
- (4) 中尾優奈, 松井勇起「2000年代の”JRPG”における、ストーリー内での『一般意志』『先見者』の描かれ方 -ゲームストーリーの社会科学的分析-」日本デジタルゲーム学会 2020年夏季研究発表大会 online 2020年9月6日
- (5) 松井勇起, 中尾優奈「「空気」の創造主体についての考察 富永恭次陸軍中將の組織内コミュニケーション行為から」戦略研究学会第18回大会 2020年11月28日
- (6) 中尾優奈, 松井勇起「「負の」ゲーミフィケーション 遊戯性の抑制による逸脱行為抑制戦略」日本デジタルゲーム学会 2021年夏季研究発表大会 2021年9月12日
- (7) 中尾優奈, 松井勇起「戦略論における『天才』概念の再検討 イノベーション論とクラウゼヴィッツの結節点」戦略研究学会学術研究成果発表会 2021年12月12日

⑤ その他

- (1) 後藤嘉宏, 本間伸一郎, 大河原昌夫, 塩沢由典, 那波泰輔, 松井勇起, 古田佳之, 安田常雄, 山本英政, 横尾夏織, 吉田桃子「思想の科学研究会、70年座談会」思想の科学研究会年報 DISPLAY 創刊号, pp. 42-61, 2019年4月